
帰るべき場所

蒼藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰るべき場所

【Nコード】

N8217B

【作者名】

蒼藍

【あらすじ】

初投稿です。組織と対決し、新一と志保はそれぞれの帰るべき場所へ戻れるのか？対決前後の新一・蘭・志保・平次・和葉の心情を中心に物語は展開していきます。（対決自体は省略する予定です。）おそらく長い連載になると思います。目新しい展開もありませんし、駄文かと存じますが、読んでいただけるとうれしいです。

P r o l o g u e) T h e b e g i n n i n g o f t h e b a t t

「c o o l k i d、哀、彼らの本拠地を発見したわ。」

長い間、待ち望んだ瞬間が

今、訪れようとしていた。

それを、F B I捜査官であるジョディ・スターリングが知らせ

に来たのは、冬の寒さも和らいできた3月の初め。

高校生探偵だった工藤新一が、小学生の江戸川コナンとしての生活を余儀なくされてから、

もうすぐ1年が経とうとしている頃だった。

春を感じさせるような、日差しにあたためた日曜日。

その日から、それぞれが自分の居場所に戻るための戦いが始まった。

それが、予想以上の苦しい戦いになることを知る由もなく・・・。

P r o l o g u e

(

T h e b e g i n n i n g o f t h e b a t t

とうとう始まりました。

なんせ初めてなので、これでいいのやら・・・??

悩みながら、でも精一杯書いていきたいと思えます。

最後までお付き合い頂ければ、幸いです。

1. 別れの予感

その言葉を聞いたときの二人の反応は、全く違っていた。

「本当か!？」

目を輝かせ、固い決意を胸にした探偵の顔になるコナン。

一方、哀は何も言わず、うれしそうなコナンの様子を一瞥した後、手にしていたコーヒ―を口に含んだ。

「なんだよ。うれしくねーのか？」

反応のない哀を見て、物足りなく感じたコナンが尋ねる。

「そんなことないわ。ただ……これからのことを考えるとあなたのように喜んでいられないだけ。」

あの組織を壊滅させることがどれほど大変なことか……。」

そう言うと、悲しい顔で静かにカップをソーサーに戻した。

その表情の理由は、言った言葉だけが原因ではない。

自分と一緒にいることで、周りの人間を危険にさらしているこ

とは十分に理解している。

それでも、この一時的でも平穏な、仮の生活が消えてなくなる不安と、新一が彼女のものであると

思い知らされることへの恐怖。

（このままじゃいけないことはわかってる…。彼を彼女に返さなくちゃいけないことも……。）

そう自分に言い聞かせると、哀は冷笑を浮かべた。

そんな哀の様子が気になりつつも、組織のことで頭がいっぱいになっていたコナンは、ジョディと今後の計画を

話し始めた。

そこで、FBIに特別チームが組まれていること、決戦は3月末を予定していること、連絡は阿笠博士の家で取り合うこと、

その日まで更に更なる調査を進め、準備を万全に整えるために協力し合うことなどが確認された。

「二人とも…学校はどうするの？」

一通り話がついた後、ジョディが冷めたコーヒーを手に尋ねた。

コナンは、いつかこの日がくることを予想していただけにすんなりと、でも少し物悲しそうに言った。

「ああ、転校手続きをしねーとな。それにあいっらにも言わないといけねーんだよな。」

哀も彼と同じ顔をして頷いた。

そして、もう一言コナンがつぶやく。

「蘭にも……だな。」

1. 別れの予感（後書き）

設定として、ジョディはすでにコナンと哀の正体を知っていることにしています。

次話以降、悪戦苦闘しながら執筆中です。

定期的に更新できるように、頑張っていきます！

2. 苦しい選択

太陽が沈みかけ、西の空が赤く染まる頃

コナンは毛利探偵事務所の前で、一人佇んでいた。

今日は、待ち望んだ未来が見えた1日だった。

『工藤新一として、蘭のところへ戻る』

このことだけを考えて、この1年過ごしてきた。

その願いに手が届くかもしれない、大きなチャンスをやっとつかんだのだ。

うれしくないはずがない。

計画を話し合っている時までは、希望でいっぱいだった。

しかし、ジョディに言われた一言をきっかけに、帰路につく中で事務所が近づいてくるほど、

その気持ちに影が見え始めた。

蘭を一人にしてしまうという現実。

コナンは、蘭と小五郎に

「両親から外国で一緒に暮らす準備が整ったと連絡が来たから、あちらで暮らすことにした。」

別れの日が来たら、そう話そうと決めていた。

その事実を知ったとき、

心優しい彼女は、コナンが離れていくことをきつと悲しむだろう。

そして、やっと両親と暮らせることになったコナンを思い、笑顔で送り出してくれるだろう。

自分の寂しい気持ちを隠して……。

工藤新一として傍にいられない代わりに、コナンとして蘭を見守ってきた。

しかし、これからしばらくの間は、新一としてもコナンとしても蘭から離れることになる。

一見強そうだが、本当は脆い彼女を一人にすることは、コナ
ンにとってあまりにも苦しい選択だった。

「でも、このままじゃ前に進めないんだ……。」

そう思い直すと、彼は意を決して事務所への階段を上って
いった。

2. 苦しい選択（後書き）

2日に1回、ぎりぎり何とか投稿できている状態です。
日本語って、本当に難しい・・・（涙）。

一仕事終わったので、これから新1VSキッドの対決を心いくまで
楽しみたいと思います♪

3. 気持ちを隠して

「ただいまー!!」

コナンは敢えて、いつもよりも大きな声で言った。

「お帰りなさい、コナン君。あら、なんかご機嫌ね。いい事でもあったの?」

エプロン姿で迎えてくれた彼女は、予想通りの言葉をコナンに向けた。

「うん!!」

(今はこれしか方法がないんだ……。)

コナンは再度、そう自分に言い聞かせながら、努めて明るく振舞う。

「何があったの。私にも教えて?」

「もちろん。でも、大切なことでおじさんにも聞いてもらいたいから、夕飯の後でもいい?」

自分がいない間の蘭には、小五郎の支えが必要だ。

彼がいなくては、始まらない。

「わかったわ。楽しみにしてるね。」

そう言うと彼女は台所へ戻り、再び食事の準備を始めた。

コナンに起こった良い事を自分のことのように喜んでいるためか、無意識に鼻歌を歌いながら料理をしている。

そんな楽しそうな彼女の背中を、彼は切なく見つめていた。

夕食前に小五郎が調査から帰宅し、食事を終えて片づけが済んだ頃、

「おじさん、蘭姉ちゃん。話があるんだけどいい？」

とコナンから切り出した。

「どうした？」

そういう小五郎の隣に、エプロンを外しながら座る蘭。

しかし、彼女の顔をコナンは見ることができずにいた。

彼女の笑顔を見てしまったら、決心が揺らぎそうで……。

彼女の凍りついた笑顔を見てしまったら、離れることなど出来なくなりそうで……。

小五郎の方を向き、明るい声と無理に作った笑顔を添えて話し始めた。

「お母さんから連絡があってね……………」

話を聞き終えた小五郎は、タバコに火をつけて大きく煙を吐き出した後、

「そうか……………」

と一言だけ言った。

（少しは、寂しいと思ってくれてるみてーだな。）

一緒に暮らしてきた日々をふと懐かしく思った。

「コナン君…。いなく…なっちゃうの？」

信じられないという表情で、今にも瞳から涙がこぼれ落ちそうな蘭。

そんな蘭を見ることができないコナン。

「うん。ごめんね…。…蘭姉ちゃんと離れるのは寂しいけど…でも、やっぱりお父さん達と一緒にいたいから…。」

笑顔で言わなくてはいけないのに、彼は俯いたまま顔を上げられない。

（蘭・・・オレはいつもお前を泣かせてばかりだな・・・。）

彼女を苦しめてしまう自分をここから消してしまいたい。

ひざの上に置いていた拳を、爪が食い込んで掌から血がにじみ出るほど握り締める。

心から自分のことを憎らしく思った。

そんな彼の気持ちを知る由もない蘭は、俯いているコナンを見てハッとした。

「・・・そうだよね！コナン君、ずっとご両親と離れ離れで本当は・・・寂しかったんだもんね……。やっど・・・、いっぱい

甘えられるようになるんだもんね！」

（だめじゃない！私が暗い顔したら。コナン君にとってはうれしいことなんだから。）

蘭は、流れた涙を慌てて指で拭い、無理に作った笑顔を浮かべた。

やっぱり彼女は自分の気持ちより、相手の気持ちを重視してしまふ。

彼女の想いを感じ取ったコナンは、自分も精一杯の笑顔で答え

た。

「うん!!」

その胸に寂しさはどうしようもない不安を抱えて……。

3. 気持ちを隠して（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。

まだまだ先が長いので、この駄文で続けていって大丈夫なのかと不安に思う今日この頃です・・・。

でも、頑張ります！

4. 偽りの自分

翌朝。

自分の心境とは正反対に、空は気持ちよく晴れ渡っていた。

（朝になっちまったな・・・。）

コナンはほとんど眠れずに、朝を迎えていた。

コーヒーでも飲もうと誰もいないであろう居間に下りてきた
彼は、蘭が起きていたことに驚いた。

「おはよう・・・。」

少し気後れしながら挨拶し、彼女の表情を伺った。

「コナン君！・・・おはよう！早いよね？」

そう驚きながら言う彼女の目は、真っ赤になっていた。

（蘭・・・やっぱり、一晩中泣いていたんだな……。）

「蘭姉ちゃんこそ、早いんだね。」

わざと気づかない振りをして、彼は普段通りに話しかける。

彼に気づかれているとも知らず、彼女はいつも通り明るく振舞う努力をする。

「うん！なんか目が覚めちゃって……。コナン君、コーヒ
ーでも飲む？」

そういうと、蘭はコナンの返事も聞かず準備を始めた。

（早めにこの事務所を出たほうが良いかもしれないな……。

）

無理をしている蘭とその彼女を見ることに耐えられない自分
に気づいたコナンは、そう考え始めていた。

「おはよう！！コナン君」

教室に入ると、探偵団が近づいてきて恒例のサッカーの試合
の話が始まった。

「昨日のヒデ、かっこよかったー！！」

「本当ですよ。あの距離からのシュートはヒデ以外には無
理ですよ。」

「そうかあ？オレならきつとできるぜ！！」

「元太くん。どこからその自信はやってくるんですか……
」？

いつもと変わらない光景に、コナンは少しホッとした。

（でも、こいつらと一緒に入れるのも、あとちよつか・・・）

いざ、探偵団のメンバーと離れると思うと感慨深くなる。

楽しそうに話している3人を、彼は慈愛にも似た気持ちで見
ていた。

そんな彼の様子に気づいた哀は、

「彼女に話したのね・・・家を出ること・・・。」

とみんなに聞こえないように尋ねた。

コナンは、ほんの一瞬、辛そうな表情を見せた。

「ああ・・・。それにあいつらにも先生にも今日言おうと思
ってる・・・。あ、お前はどようする？一緒に言ったほうが、

あいつらを何回も悲しませてなくて良いと思うん
だけだよ。」

哀もコナンと同様、いつか来るこの日のために、

『アメリカにいる両親と暮らすことになった』

という転校の理由を用意していた。

（今まで本当のことを隠してきた私に、悲しんでもらう資格なんてないわ・・・。）

そんなことを思いながら、

「あなたに任せるわ。」

とだけ言い、自分の席に着いた。

4. 偽りの自分（後書き）

哀って描写が難しい・・・。

彼女が今のところの、大きな課題です。

来週の前半は忙しいため、更新が不定期になるかもしれませんが、見捨てずにまた読んでください。

できるだけ、きちんと投稿するつもりです。

5. 友情とは・・・

探偵団の3人は、公園のベンチに座って夕日を眺めていた。

「きれいだね・・・。」

そうつぶやいた歩美は、過ぎった嫌な予感に必死で気づかないふりをしていた。

放課後、

「ちょっと先生に灰原と話があるんだ。その後、オメーらにも話があるから、いつもの公園で待っていてくれねーか？」

そうコナンに言われた3人。

歩美と光彦は、その彼の表情に不安を覚えた。

「話って・・・何ですか？」

感じた不安を少しでも早く振り払いたくて聞いた光彦だったが、

「・・・後で話すよ。じゃあ、またな！」

そうコナンにはぐらかされてしまった。

「とりあえず、サッカーでもしてようぜ!!」

元太だけはそれに気づかず、いつもと変わらず元気に言った。

「コナン君達、遅いね……。でも、来て欲しくない気もする・
・。」

歩美は今日1日、いつもにも増して静かだった哀のことも思い
出していた。

（きつと悪い話なんだ……。だから哀ちゃんも……。元
気なかったんだ。）

予感が無視できなくなってきたその時、

「わりいー。待たせたな。」

コナンと哀が重い足取りで、3人の傍にやってきた。

「おっせーぞ!!コナン!!」

文句をいう元太。

何もいえない歩美と光彦。

そんな3人を前に、コナンが話し始めた。

「実はよ……オレと灰原は転校することになったんだ……。」

「

コナンが言い終わった後、夕日だけが静かに地平線に向かって傾いていた。

突然のことにびっくりした歩美の瞳から、涙がこぼれる。

「本当ですか……？」

かろうじて聞こえる声で光彦が問いかける。

「マジかよ……。」

ついさっきまで、何も気づいていなかった元太も呆然としている。

「そんなのイヤだよ……。二人と離れるなんて……。」

歩美はそういうと哀に抱きついた。

「行かないで!! 哀ちゃん! 会えなくなるなんて、イヤだよ!

！」

その光景に哀は驚いていた。

（自分と離れたくないと、この子は涙を流してくれている？）

こんなこと、想像もしていなかった。

（あなた達を騙し続けている私がいなくなること、寂しいと思ってくれている？）

これまでの人生の中で、こんなことは1度もなかった。

経験のない事態が起こって、哀は困惑していた。

（どうして・・・？ どうして泣いてくれるの？）

歩美の涙が落ち着き始めると、コナンが静かに思いを口にした。

「確かに・・・一緒にいれなくなるのはさみしいけどよ、友達じゃなくなる訳じゃねーんだし。」

離れていたって、オレたちは少年探偵団だろ？それに・・・
・きつといつかまた、どこかで会えるさ。」

『きつといつかまた、どこかで会える』

その言葉を言ったときの彼は、いつもの探偵の顔になっていた。

あの組織を倒して、必ず戻ってくる。

そんな強い意志の表れだった。

そして、その言葉は探偵団全員の胸に響き、悲しみを友情に変えた。

「そうですね！どこにいたって、仲間ですよね！」

「オレたち少年探偵団は、永久に不滅だもんな！！」

「そうだよ。コナン君も哀ちゃんも、ずっと歩美の友達だよね？」

真剣なまなざしで歩美に言われた哀は、何も言えずにただ、彼女の顔を見つめていた。

「もちろんだよ。歩美ちゃん。な！灰原！」

そんな哀の心情を察したコナンは、困惑している彼女の背中を軽く押した。

（大丈夫。あいつらは、心からお前のことを大切な友達だと思ってるぜ。）

そんなコナンの声が哀には聞こえた気がした。

「ええ・・・みんなずっと私の友達よ。」

5. 友情とは・・・（後書き）

何とか投稿できました。

時間ぎりぎりでかなり焦りましたが・・・。

次回から物語が少しずつ動いていく予定です。

あのお阪メンバーも登場予定。

楽しんでいただける作品が書けるように頑張ります。

6. 変化し始める日常

「ふう……。」

ソファーにドサツと体を沈ませると、コナンはため息をついた。

「おつかれさま。」

ねぎらいの言葉と一緒に、彼にコーヒーを手渡す哀。

「ずいぶん急に決めたのね。もう少し、ゆっくりでも良かったんじゃない？ 引越し……。」

ジョディに一報を告げられたあの日から、ちょうど1週間たった日曜日。

その間に転校の手続きと仲間達との別れを終えたコナンは、毛利探偵事務所から阿笠博士の家へ引っ越しをした。

もちろん、彼がここにいることを知っているのは、博士・哀・FBIの主要メンバーのみ。

他のみんなは、今頃彼はロンドン行きの飛行機の中だと思っている。

蘭も含めて。

「今までと違って、かなりヤバイところまで首を突っ込んでんだ。これ以上一緒にいて、

みんなを危険な目に合わせられねーだろ？」

別れ際の蘭の寂しそうな、縋るような目を思い出しながらコナンは答えた。

「そうね……。」

（本当の理由は違うところにあるんじゃないの？ 工藤君……。）

月並みの説明をされているような、本当の気持ちを知られたくないと感じさせるような彼の言葉に

苛立ちを覚えた哀は、すくっと立ち上がると地下の研究室へ降りていった。

（すべては彼女のためなんでしょ？ これ以上苦しめたくないから……。）

つけっぱなしのパソコンの画面の前に座った哀は、彼の気持

ちが読めてしまてしまう自分に嫌悪感を抱いた。

（私には、関係ないことなんだから……。）

そう思い直すと、無心でキーボードを操り始めた。

「何なんだよ……アイツ。」

地下への階段に目をやりながら、コナンはそうつぶやいた。

明らかに彼女は、自分の言葉で不機嫌になった。

それはわかった。

でも、何が気に入らなかったのかがわからない。

（オレ、変なこと言ったか……？）

一刹那、頭をフル回転させて考えてみたが、あきらめたように目線を引越しのダンボールに向け、

小さな旅行かばんやら洋服やらを取り出して荷物を詰め始めた。

「新一、どこかに行くのか？」

彼の行動を不思議に思ったのか、博士が尋ねる。

「ああ、大阪にな。アイツにも口裏合わせてもらわねーといけねーだろ？オレはもう学校行かなくて

いい訳だし、早めに行っとこーと思ってよ……。」

「それは、そうじゃが……。組織に突入することは、話すのか？」

博士の言葉に、コナンの手が止まった。

「問題はそこなんだよなあ……。話すとアイツが黙ってるわけねーし……。かといって巻き込むわけにも

いかねーからな。行くまでになんか方法考えるよ。」

そう言うと、止まっていた手を再び動かし始めた。

と同時に、インターホンが鳴った。

来客は、ジョディ。

「cool kid、引越しは無事済んだみたいね。あら？哀は？」

もう1人の住人がいないことに気づいて、尋ねる。

「ご機嫌斜めみたいだぜ。」

コナンはそういうと、階段を指差した。

「そう……。じゃ、彼女抜きではじめましょうか？ 組織の追加情報だけど……」

彼女は、このところ組織について新しい情報が入るたびに、それを彼に伝えに来る。

そして、その情報を元にコナンが作戦に必要なアイデアを出し、それをまたジョディがFBIに持ち帰る。

そんな日々が続いていた。

彼は、日に日に計画が具体化し、詳細が詰まっていく充実感を強く感じていた。

そう、この時までは……。

この後、彼の希望を絶望に変える事態が待ち受けているとも知らずに……。

6. 変化し始める日常（後書き）

やっと更新できました。

続きを書けば書くほど、上手に書けず悩む毎日。

小説って、奥が深いですね・・・。

さて先日、やっと読者数を見れるようになったのですが、

（それまでは、見方がわからなかったんです・・・。）

1, 200を超えるアクセス数があり、本当に驚きました。

初投稿のこんな駄文を読んでもくださっている読者のみなさん、本当にありがとうございます。

もっと精進しないといけないと、改めて身に染みて思いました。これからも頑張って、良い作品にしていきたいです。

7. 親友の凶兆

引越してから2日後、コナンは大阪行きの新幹線の中にいる。

そして、これから起こる事への思索に耽^{ふけ}っていた。

（絶対アイツ、納得しねーよな……。はあ、どうすっかない。）

そう、これから西の名探偵に会いに行くところなのだ。

彼には、これまでにいろんな意味で助けてもらってきた。

事件の解決はもちろんだが、コナンの正体を知っている数少ない人間として。

さらに、大切に思っている幼馴染の存在が同じようにある男として。

コナンの気持ちや立場を察してくれる相手だった。

だからこそ、今回の件に関わらせることは避けたい。

関われば、当然平次の身の安全を保障することなどできない。

そうなると蘭と同じように、和葉も心配や不安からきつと涙を流すことになるだろう。

それを平次が見て、自分の様に苦しんで欲しくない。

そう思っていた。

かといって、自分が平次の立場だったら・・・とも考える。

彼が危険な目に合っているにも関わらず、自分だけ平穏な場所・・・なんて事があり得るだろうか？

そんなこと、あるはずがない。

大切な友人が無事に戻ってこれるように、自分にできることを精一杯考え、助けるはずだ。

行くまでにどう話すか決めておくはずだったが、あれこれ考えを巡らせるばかりで結論など出なかった。

「厄介なことになりそうだな・・・。」

そう口にする、これ以上考えていても無駄と思ったのか、彼は瞼を閉じた。

一方、大阪では平次が法定速度ギリギリの速さでバイクを走

らせていた。

『大事な話があるんだ……。』

珍しく東の名探偵の方から電話があつたのは、昨日の深夜。

「なんや！？ 珍しいな。それやったら、朝一で来い！」

といった平次の誘いを、

『何言っただよ。明日、学校だろ？ 授業が終わる時間に合わせて行くよ。それから……。オレと会うことは

誰にも言わないでくれねーか。もちろん、和葉ちゃんにも。
じゃ、新大阪まで迎えよろしくな。』

とコナンが一方的に話を決めて、電話を切られた。

その口振りに、いつもと違う不穏な雰囲気を感じ取った平次は、今日一日うわの空で過ごすこととなった。

「平次、なんかあったやろ？」

普段の彼と様子が違うことに気づいた和葉が、休み時間毎に
問い^{ただ}糾す。

「別に何もあらへん……。」

そう返事はするものの、

「何で教えてくれへんの？あたしに言えないことなん？」

彼女の追及は終わりを知らない。

それを何とかかわして、彼は今、新大阪駅へ向かっている。

（あー・・・もう。明日もしつくこく聞かれんのやろなー。ほんまに、工藤のせいや・・・。）

文句を言いながらも、何か大きな問題が起こったという根拠のない不安。

取り敢えず、早く話が聞きたい。

駅に辿り着くと、彼は逸る気持ちを抑えながらバイクを降り改札へ急いだ。

7. 親友の凶兆（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

やっど、平次登場です。

前回のラストでさんざん煽ってしまったのに、普通の始まり方でごめんなさい。

あの言葉の意味は、もう少し先でわかるようになっていきますので、お楽しみに。

8. 疑惑から確信へ

「急に、悪かったな……。」

そう言ったコナンの表情を見たとき、平次の不安は確信に変わった。

「そんな挨拶は抜きや。何があったんや？」

先を急ぐ平次に、コナンは落ち着いた声で言った。

「とりあえず、ゆっくり話ができる場所に……。」

平次は、駅前にある一流ホテルの部屋を用意していた。

『誰にも聞かれてはいけない話』だと、電話の彼の様子から感じ取ったためだった。

それには、コナンも些ちとか驚いた。

「いいのかよ……。こんなことに金使って……。」

「オレの勘、間違うてへんやろ？」

不敵な笑みを浮かべる平次。

さすが、全幅の信頼をおいている親友兼探偵だけある。

「で、話ってなんや・・・？」

そう促され、コナンは重い口を開いた。

「実はさ、ちよつと奴らの動きで不審に思うところがあって・・・、オレが近くにいると周りに迷惑が掛かるから、

蘭の家を出ることにしたんだ。今は博士の家に住んでるけど、みんなにはイギリス両親の所に行くって

言っている。で、お前にも口裏合わせといひ欲しいと思つてよ。」

大阪についてからわずかな時間で作り出した、西の名探偵を欺くための嘘。

彼は少し胸が痛みながらも、淡々と話した。

「工藤・・・。ほんまか？」

平次がコナンを睨み付ける。

「お前、それでオレをごまかせると思ってたのか！？何もなくて、お前があのねーちゃんから離れるわけ

ないやろ？・・・組織の居所、わかったんとちゃうんか！？
どうなんや！？」

声を荒げて言う平次に、コナンは動じることもなく、ただ感心していた。

（ホント、さすがだな……。やっぱり隠し通すのは無理か？）

しかし、ここで引き下がる訳にはいけない。

「それが本当だったら、オレがもう突入してるさ。」

平静を努め、なんとかこの嘘を押し通そうと試みるが、平次は一向に信じようとしてない。

「工藤……。オレにも話されへんってことなんか？」

悔しさと悲しみが混在した目でコナンを見つめる平次。

それでも、コナンの決心が揺らぐことはなかった。

「ホントにそんなんじゃない。それでさ、お前にひとつ、頼みがあるんだけど……。」

「頼み……？」

「ああ、もうすぐ春休みだろ？その間だけでも、蘭のこと預かってくれねーか？和葉ちゃんとゆっくり

遊ぶことでも口実にして。オレは・・・組織のこと調べるために、しばらく米花町を離れようと思ってるんだ。

その間に、蘭に何かあったら困るからよ。こんなこと頼めるのお前くらいしかないからな。それで、今日

ここに来たんだよ。」

その言葉で平次は、コナンが何を考えているのかわかった気がした。

（とことん、シラ切り通すつもりなんやな・・・。それならこっちにも考えがあんで。）

「・・・工藤、この件、一回預からせてくれへんか？和葉のこともあるし、ちょっと考えたいんや。」

（え！？考えたい・・・？）

自分の頼みをきいてくれると勝手に思っていたコナンは、その答えには動揺を隠せなかった。

「あ・・・ああ。わかった。できたら、2～3日くらいで返事もらえるか？」

「おお！こっちから連絡さしてもらおうわ。」

何かをたくらんでいる・・・そんな表情に変わった平次だったが、コナンは彼の瞳の中にある思惑を見抜くことが

できずにいた。

8. 疑惑から確信へ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

いよいよGW突入ですが、皆様はいかががお過ごしですか？

このGW中はパソコンの使用を独占できなくなるため、更新が不定期になる可能性大です。

加えて、次話から内容が複雑になってくるので、執筆自体がなかなか進まず・・・。

時間は掛かるかもしれませんが、頑張って書いていこうと思っますので、待ってて頂けると幸いです。

9. 失望への扉

その知らせは突然だった。

見えたはずの希望への階段は、いまにも崩れ落ちそうになっている。
いる。

彼は、絶望の中で光を探すこともできずにいた。

その数時間前……

口裏合わせと大切な彼女の安全を依頼するために行った大阪で、
西の名探偵が用意したホテルに1泊したコナンは、東京行きの
新幹線を待っていた。

（あー。さすがに眠いな・・・。）

1泊といっても、彼は平次と一晩中、語り明かしていた。

内容は、真面目な事件の話から他愛もない幼馴染の話まで、ジャンルを問わず。

もっと、組織のことを突っ込まれると覚悟していた彼は、拍子抜けしていた。

『じゃ、気をつけて帰りや工藤。オレからの連絡、楽しみに待ってけよ!』

そう言った最後の平次の表情がどうしても気になっているのだが、何を考えているかは未だにわからない。

（なんか嫌な予感がするんだけどな・・・。）

そんなことを考えながら、ポケットの中の携帯を取り出した。

リダイヤルの1番上になっている『博士』の番号に合わせ、通話ボタンを押す。

ただ、これから帰ると伝えるだけだった。

しかし、そこから聞こえてきたのは、冷静だが失意に満ちたジョディの声だった。

「cool kid、大変なことが起こったの。できるだけ早

く戻ってきて。」

彼の指が苛立ちを隠せないというように、窓の縁を叩く。

これほど、2時間30分という時間が長く感じたことはない。

ここで焦っていても仕方ないのは頭で理解しているのに、感情がついていかない。

『大変なこと』 Ⅱ 計画の失敗

詳しいことは聞かされていないが、そんな予感がしてならなかった。

(違ってくれ・・・。)

自分の予感を否定したい。

彼は、何度も浮かび上がってくる最悪の状況を必死に取り払おうとしていた。

長かった所要時間が経過し、新幹線が東京駅のホームに滑り込み扉が開くと、彼は全速力で駆け出した。

博士の家についたコナンは、ドアを開けるなり

「何があっただんだ!？」

と息を切らして叫んだ。

出迎えたのは、博士。

「とりあえず、中に入りなさい。」

そういうと彼の荷物を持って、前を歩き始めた。

居間には、ジョディが沈痛な面持ちで座っている。

「おかえりなさい。待ってたわ……。」

「一体、何があっただんだ!？」

いつもの冷静さを失っている彼は、ジョディに食って掛かる。

「ここで、詳しいことは話せないわ。本部に来て欲しいの。」

そう言っていると、車を呼ぶために携帯を手を取った。

一方、コナンは彼女がいないことに気がついた。

「灰原は？出掛けてるのか？」

「ああ。たまたまな。じゃが、哀くんがいない時で良かったよ・
・。あまり良い知らせではないみたいだし、

哀くんには事情がはっきりしてから話した方がいいじゃろう
からな。」

博士はホッとしたように言った。

（確かなな・・・。）

「車が来たわ。行きましょう。c o o l k i d」

ジョディに声を掛けられたコナンは、覚悟を決めて頷いた。

9. 失望への扉（後書き）

いつも読んで下さって、ありがとうございます。

いよいよ事件が動き始めました・・・。

ということ、レイアウトも変えてみています。

以前にも後書きに書きましたが、ここからが難しい・・・。自分の文章力の無さに泣かされています。

しかし、最近皆さんの評価も頂けるようになり、楽しみにして下さい、最近皆さんの評価も頂けるようになり、楽しみにして下さい、なんてか乗り越えたと思います。

次回の更新は、ちょっとわかりません・・・。

GW明けには必ず、できればその前に投稿したいと考えております。

10. 崩れた希望

車内での会話は一切なかった。

ただ、重い空気が流れるだけ。

コナンは窓の風景を見ているようだったが、その目には何も映っていないかった。

「よく来たね。コナン君。いや・・・新一君と呼んだほうがいいのかな？」

FBI本部の一番奥にある、コンピューターやスクリーンが数多く並ぶ部屋に通されたコナンは、久しぶりに

会うジェームズに声を掛けられた。

「どちらでも・・・。それより話を聞かせてください。」

これ以上は我慢できないという目で、コナンはジェームズを見据えた。

「わかった・・・。では、そこに座って。」

そう促された椅子の前には大きな液晶テレビが置いてあり、地

図らしきものが映し出されていた。

「これは・・・組織の本拠地の地図ですね？」

「その通りだ。」

「何があったんですか？」

ジェイムズは大きく息を吸い込むと、コナンから目を背けずに言った。

「特別チームのメンバーの一人がやつらに捕らえられた・・・。」

「何だって!？」

思わず、コナンは立ち上がる。

「3日前から潜入調査を行っていたんだ、最終確認のために。しかし、その内の一人が現在も戻って来ていない。」

おそらく、やつらに捕まったとみて間違いない。」

「・・・って事は・・・計画がバレた・・・。」

「そうとまでは言えない。これが、最後に彼から送られてきたメールだ」

そう言うと、画面が地図からメールに切り替わった。

『脱出不可能。通信を終了する。拘束される前に自決する。』

「・・・・・・・・・・。」

言葉にならず、コナンは呆然としていた。

今度は大きなスクリーンに組織の地図が映し出されると、ジェームズがレーザーポインターを使って説明する。

「確かに、彼が所持していたGPSの信号はこの研究室の前で途切れている。恐らく、ここで囲まれたんだろう。」

このメールを信じれば、彼らに捕えられ計画を自白させられた可能性は低い。ただ、FBIが潜入捜査を

行っていたことはバレた訳だから、我々が何かを計画していたことは奴等にも想像つくだろう。もちろん、

向こうもそれ相応の対策を取ってくる可能性が高い・・・・。」

コナンは、放心状態のまま椅子に座り込んだ。

「これから・・・・どう・・・・するんですか？」

「それを君と相談しようと思って呼んだんだ・・・・。我々は、計画の一時中断を考えている。このままでは

危険すぎる。一度計画を練り直したほうがいい。」

ジェームズの言葉に、コナンは思わず声を上げた。

「そんな・・・！それじゃ、奴らを倒せるのはいつになるんですか！？」

「・・・半年から1年は先延ばしも止むを得ない・・・。」

ジェイムズは、承服できないと言わんばかりのコナンを説き伏せようとしていた。

「わかっている。君がどのくらいの覚悟を持って、この計画に臨んでいるか。これにすべてを掛けていることも。」

しかし、現在の状況で突入するのは危険だ。それであっても、無事に戻ってこられる可能性は50%だったんだ。

それ以下になってしまった状態で、君を突入させることはできない！」

ジェイムズが言っていることは、理屈としてわかる。

しかし、コナンにはそれを受け入れられない理由があった。

「このまま計画を止めたら・・・蘭たちは・・・どうなるんですか？」

その言葉にジェイムズの顔が歪む。

コナンは更に言葉を重ねた。

「計画を先延ばしにしたら、蘭たちが危険にさらされるんじゃない」

ないですか!？」

「・・・その可能性は否定できない・・・。」

やっと聞き取れる程の低い声でジェイムズは答えた。

「しかし、このまま突入してもやつらを倒せる可能性は限りなく低いんだ!彼女達のことは、我々が責任を

持って警護に当たる。だから、ここは自重して欲しい。」

もはやコナンにはジェイムズの声が聞こえていなかった。

(蘭があぶない・・・。)

その事実が、彼の心を蝕んでいった。

「とりあえず、一晩ゆっくり考えてみてくれ。」

止まっていたコナンの時間を動かしたのは、ジェイムズだった。

自分が冷静に考えられていないと自覚したコナンは、彼に従うことにした。

「わかりました・・・。明日、もう1度話し合いましょう。」

これまでの様子を黙って見ていたジョディが、コナンに声を掛ける。

「哀には・・・どうするの？」

現段階で話せば、哀が取り乱すことは目に見えていた。

「灰原のことは、オレに任せてもらえませんか？結論が出たら、オレから話します。それまで、

このことは黙っていてください。」

「わかったわ・・・。あなたに任せる。・・・それじゃ、家まで送るわね。」

そう言うと、彼女は車を準備するため、重い空気が残る部屋を後にした。

10. 崩れた希望（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。
お待たせ致しました。

やっぱりGW中は叶いませんでした。が、なんとか投稿できて良かったです。

これから数話は暗い話が続きますが、後半巻き返す予定なので読んでいただけると嬉しいです。

11. 長い夜の始まり

ジョディに送ってもらい博士の家に着いた時には、あたりは真っ暗だった。

空には今にも折れてしまいそうな程の細い月が、建物の隙間から僅かな光を発している。

いつも以上に重く感じられるドアを開けコナンが家に入ると、心配顔の哀が出迎えた。

「おかえりなさい。遅かったわね。……何が……あったの？」

何かが起こった。

彼女がそう確信するには、十分だった。

家に入ってきた彼の目には、生気が無かったのだ。

推理する時の輝いた目、何かに夢中になっている時の真剣な目、彼女を思う時の切なそうな目……。

哀はこれまで、彼のそばで数多くの彼の表情を見てきたつもりだった。

しかし、今の彼はそのどれにも当てはまらない。

（工藤君・・・一体・・・。）

しかし、困惑している哀の存在など気にも留めないように彼女の横を通り過ぎ、自分の部屋へ向かうコナン。

「ねえ！何があったの！？」

無視されたことに耐えられず、彼女は叫んだ。

「ごめん・・・。」

その言葉は、明らかに自分を拒絶している。

その背中では、他の者を寄せ付けようとしない。

（お願い・・・！私を一人にしないで・・・。）

そう伝えたいが、声にできない。

『ボタン』

扉の閉まる音が聞こえると、彼女の目には、もう誰も映っていなかった。

R R R R R . . . R R R R R . . .

コナンが部屋に閉じこもってから暫く経った頃、

いてもたってもいられなくなった哀は、携帯電話を握り締めていた。

『Hello . . . 』

電話に出たのは、事情を知っているであろうFBIの女性捜査官だった。

「夜分遅くにごめんなさい . . . 。」

哀は、どう話を始めたら良いのかわからず、次の言葉を探していた。

それが相手にも伝わっていたようだ。

『何があったのか聞きたくて、電話してきたのね?』

ジョディのやさしい声から、彼女の思いやりが哀に伝わってくる。

「ええ . . . 。」

『ごめんなさいね、哀。この件は、彼に任せてあるのよ。だから、私の口からは話せないわ。』

(やっぱり . . . 。

哀には、電話を掛ける前から予想できていた。

そういう根回しは既に出来上がっているという検討はついていたのだ。

「わかってたわ……。でも、もしかしたらって思ったの。だから……。」

『そう……。でも彼は、必ずあなたに話してくれるわ。もう少し時間をあげて。』

ジョディの声にも元気がない。

改めて、大変なことが起こったのだと認識する。

これ以上はどうにもならないと感じた哀は、そのまま電話を切った。

（工藤君……。）

彼女は、眠れない夜を迎える。

11. 長い夜の始まり（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

投稿してから気付いたんですが、今回非常に短いですね……。すみません。

なので、なんとか明日中に次を投稿します！

それから、昨日でアクセス数が2, 100件を超えました。

こんなにもたくさんのアクセスがあるという事に、本当に驚いています。

読者の皆様、本当にありがとうございます。

だんだん話が佳境に入ってきて、ますます文章力の無さが目立ってきてはいますが・・・、

頑張りますので引き続き読んでいただけると嬉しいです。

12. 本^{ほん}当^{とう}に守^{まも}りたいもの

あれから・・・

衝撃の事実^{じじつ}に直面し、大切な女性^{ひと}が危険にさらされるかもしれないと知^しってから・・・

自分を心配^{しんぱい}してくれた仲間^{なかま}に背^せを向^むけたまま、この部屋^{へや}に閉^しじこも^もってから・・・

どれくらいの時^{とき}間^{かん}がた^たったの^のだ^だら^らう。

彼は、まだ暗闇^{くらやみ}の中^{なか}に^にいた。

部屋^{へや}の電^{でん}気^きをつ^つけ^ける^るこ^こも^もせ^せず^ずに。

希望^{きぼう}とい^いう^う光^{ひかり}を^を探^{さが}す^すこ^こも^もで^でき^きず^ずに。

彼の心^{こころ}にあ^ある^るの^のは、行^いき^き場^ばの^のない^{ない}怒^{いら}り^りと^と憤^いり^り。

そ^そし^して、大^{だい}切^{せつ}な^な幼^{よう}馴^じ染^{せん}へ^への^の深^{しん}憂^{ゆう}だ^だけ^けだ^だった。

(どうす^すれ^れば^ばい^いん^んだ^だ・・・！)

彼は、出^で口^{ぐち}の^の見^みえ^えな^ない^い迷^{まよ}路^ろの中^{なか}で、必^{ひつ}死^しに^に答^{こた}え^えを^を模^も索^{さく}し^して^ていた。

「しん．．．いち．．．．．助け．．．．．」

暗闇の中で、遠くから蘭の声が聞こえる。

「お願い．．．助けて。新一！」

徐々に視界が開けてくるにつれ大きくなる声の方向に視線を向けると、銃を突きつけられている蘭が見えた。

「蘭．．．!!」

「新一！やっぱり助けに来てくれた．．．。わたし．．．新一のこと信じてたよ。」

彼女はそう言って、緊迫した状況にも関わらず喜色満面を浮かべる。

そんな彼女に彼は駆け寄ろうとするが、足が動かない。

「クソッ！どうして．．．。」

必死にもがきながら、銃を向けている人物を見ようと目を凝らす。

「大切な人を、帰る場所を失ったとき、お前はどのようなのかな？」

蔑むような声の先に、ジンが立っていた。

「ジン……。どうして……………」

信じられずに一瞬、目を疑う。

しかし、新一は彼が手にしている銃に気付き、現状を認識した。

「ジン！！蘭から離れろ！！！」

彼の動きを封じようと、必死で声をあげる。

「お前が殺したいのは、オレだろう！蘭は関係ないはずだ！！」

そんな新一に、ジンは突然問いかける。

「お前の本当に守りたいものは何なんだ？」

（オレが守りたいもの……？）

思いもよらない質問に、戸惑う新一。

「工藤新一としての人生か、名探偵としての名声か、それとも愛する人との幸せな生活か……さあ、何だ？」

（本当に守りたいものは……なんだ？）

ジンの発問に思い悩んでいた時、新一の目の端から微かに蘭が見えた。

彼女は、なぜか幸せそうに彼を見つめ微笑んでいる。

そんな彼女を見た瞬間、彼の心の奥が幸福で満たされていくのを感じた。

「蘭・・・だ・・・。」

思わず、声に出していた。

「蘭の笑顔・・・蘭の・・・幸せだ。」

『本当に守りたいもの』

それは、愛する人と幸せになること、そう思っていた時期もあった。

工藤新一としての人生や、名探偵としての名声に固執したことがない訳ではない。

しかし、この危機的状況の中で彼が守りたいと思ったものは、そのどれでもなかった。

愛する人が笑顔で暮らすこと、幸せに生きていくこと。

それが自分の幸せであり、本当に守りたいものなのだ。

新一は、見つけた答えに満足し、ほんの少しの達成感を味わっていた。

だがそんな感情も、ジンの言葉に一瞬にして打ち消された。

「では、その大切なもの・・・始末させてもらおう。結局お前は、何一つ守れない。そしてお前は、一生自分自身を

責め続ける。そういう運命なのさ……。」

新一を嘲笑うかのように言うと、ジンは何の躊躇いもなく引き金を引いた。

銃声と同時に、彼女の体がスローモーションで崩れ落ちていく。

新一は微動だにすることもできず、ただその光景を見ていた。

倒れた彼女から流れ出る大量の赤い液体。

それが広がっていくのと同じ速度で、自分の心が壊れていくのがはつきりとわかる。

そして、心が完全に機能を失ってしまう寸前、感情が噴き出し、叫んでいた。

「らん!!!」

12. 本当に守りたいもの（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

何とか、昨日の後書きでの約束を守れました！

間に合わないかと焦りましたが、良かったです。

さて、今回登場するジンの描写がおかしいというご意見が多数あるかと思えます。

難しかったんです・・・、彼。

どう書いたらいいものやらと頭を悩まし、こういう文章になったのですが・・・すみません（涙）。

13. 夢と現実の狭間で

気がつくと、あたりは真っ暗だった。

意識が朦朧として、自分がどこにいて何をしていたのかもわからない。

（あれ・・・？オレ・・・確か・・・）

コナンは、記憶の糸を手繰る。すると突然、血まみれになっている蘭の映像が頭に浮かんだ。

（蘭！！）

先程、ジンに拳銃で撃たれ、重症を負っているはずの彼女を探すが、見当たらない。

代わりに目に飛び込んできたのは、自分が使っている部屋の中にあるベットと時計。

蛍光塗料で光っている時計の針が、午前零時を回っていることを彼に知らせた。

（もしかして・・・寝ちまったのか？オレ・・・。）

辺りを見回し、現在の自分の状況をもう1度確認する。

（夢・・・だったの・・・か？）

そして昨日も、大阪でほとんど寝ていなかった事を思い出した。徐々に冷静になってくると、自分の身体中から汗が噴き出していることに気付く。

僅かに手も震えていた。

とても夢とは思えない、これから起こることを予言しているような内容。

（もし、あれが現実になったら・・・。）

思っただけで、戦慄がはしった。

そんな彼の身体は、汗のせいか水を要求している。

コナンは、暗闇に慣れてきた目でドアノブを見つけると扉を開けた。

先程の細い月が空高く昇り、わずかだが廊下を照らしている。

まるで長い間光を見ていなかったように、彼の瞼は自然と閉じられた。

その微かな月明かりでさえ、彼はまぶしく感じていた。

静まり返った家で物音を立てないように歩き、キッチンにあるコップを手にする。

冷蔵庫からペットボトルを取り出すと、静かにミネラルウォーターを注いだ。

ゴクッ・・・ゴクッ・・・

コップの中の水は、意思があるかのようにコナンの喉に入っていく。

飲み干した後、それでも足りなかったのか、もう一度水をコップに注いだ。

突然、先刻の映像が蘇ってくる。

どちらが現実なのかわからなくなり、再び彼は恐怖に呑み込まれそうになった。

普段の彼なら、こんな夢を見たところで慄然とすることも、錯乱することもない。

しかし、数時間前にFBIで聞いた事態のせいなのか・・・。

それとも、この世で一番遭遇したくない状況を見せられたせいなのか・・・。

いつも心にある、自分に対する絶対的な自信。

それが脆くも、支える力を失って壊れそうになっている。

大切な人を失うと思っただけで、人間はこんなにも脆弱ぜいじやくになってしまふものなのか・・・。

コナンは自分の弱さを目の当たりにし、自嘲的な笑みを浮かべた。

そんな時、ポケットから振動を感じた。

コナンは、慌てて振動の原因である携帯電話を取り出す。

携帯の画面に表示されたのは、ジンに囚われていた幼馴染。

彼は安堵した。

（蘭は生きている・・・。）

あれは夢だとわかっているのに、その事実を確認できたことに喜びを感じていた。

変声機のダイヤルを回し、ひとつ深呼吸をして準備を整えると、通話ボタンを押した。

「もしもし・・・。」

『あ！新一？良かった・・・出てくれないかと思った。夜遅くにごめんね。』

彼女の明るい声が聞こえる。いつもと変わらないやさしい声音。^{こわね}それを耳にすると、彼の心は落ち着きを取り戻していく。

「なんか用か？」

心とは裏腹に、彼はそっけない返事を返した。

『何よ、その言い方。せつかく人が電話してあげてるのに・・・』

少し怒った彼女の声も心地よい。

あの時壊れた心が、元に戻っていくような感覚だった。

『何かあったの・・・？』

黙り込んでしまった彼を心配した彼女が尋ねる。

「いや・・・別に何にもねーよ。」

この気持ちをどう表現して良いのかわからず、また話すのも可笑^おしいことで、そう答えた。

しかし、今度は彼女が無言になる。

「蘭こそ・・・どうした・・・？」

問うてから、現実を思い出した。

そうだ。

蘭の元から『コナン』がいなくなったのだ。

『うん・・・。コナン君がご両親のところに帰っちゃったの・・・。』

沈んだ声から、彼女の寂しさが十分過ぎるほど伝わってきた。

「そうだったのか・・・。」

それ以上の言葉をどう掛けて良いのかわからない。

その寂しさの原因は自分なのだ。

自分を責めながらも、何か言わなければと言葉を探していると、
彼女が呟いた。

『ねえ・・・。新一・・・帰ってこれない？ 私・・・もう
辛い・・・。』

13. 夢と現実の狭間で（後書き）

いつも読んで下さって、ありがとうございます。

前回の後半部分は、新一の夢という設定でした。

多分、既にお気づきの方も多数いらっしゃると思います。

だんだん暗くなっていますが・・・次回も暗いです。

早く、明るい話を書きたいと思っている今日この頃ですが、それもいつになることやら・・・。

この雰囲気もうしばらく続きますが、最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

14. 決断（前書き）

第13話を一部修正しております。

14. 決断

『私・・・もう辛い・・・。』

彼は絶句した。

そしてその言葉が、彼女の無事に安心し一時^{ひととき}忘れていた、彼の現状のすべてを呼び覚ました。

つい数時間前まで、FBI本部で何を話していたのか。

大切な幼馴染がどういう状況におかれることになるのか。

それらが、走馬灯のように彼の頭を駆け巡っていく。

『あ・・・。ごめん！新一。今の冗談だから！！』

沈黙に気付いた蘭が慌てて訂正する。

彼女自身、その言葉が口から出たことに驚いていた。

（こんなこと言うつもりなかったのに・・・。）

後悔の念が彼女を襲う。

事実、彼女はコナンがいなくなったことが、予想以上に堪^{こた}えていた。

コナンがいなくなってからというもの、涙が零れない日がないのだ。

この10日ほどで、あの少年にどれだけ自分が寄り掛かっていたのかを思い知らされていた。

（知らないうちに、コナン君が新一のいない寂しさを紛らわしてくれていたのかも・・・。）

そう思うようになっていた。

だから、コナンが自分の許を去った後の寂しさに耐えられない。

そして、新一が傍にいないことがこんなにも辛いことだったのだと、身に染みて理解させられる。

『ホントにごめんね……。新一、私大丈夫だから……。』

（怒ってるのかな……。どうしよう……。）

何も言わない彼が怖くなる。

（嫌われたかも……。新一……。お願い、何か言って……。）

蘭は、祈るような思いで彼の言葉を待っていた。

「もう・・・辛いかな？」

彼女が待ち望んだ返事は、今まで耳にしたことのない暗い声で返ってきた。

『え・・・？』

「そうだよな・・・。オレ、お前を泣かせてばかりで・・・苦しめてばかりで・・・何もしてやれない。蘭が辛いと思うの

当たり前だよな・・・。」

『そんな事ないよ・・・！』

意外な彼の言葉に戸惑いながらも、彼女は必死で弁明する。

『わたし・・・新一のこと信じてるから・・・。』

懸命に自分の気持ちを伝えようとする。

『絶対帰ってくるって・・・言ってくれたでしょ？だから・・・』

そんな彼女の想いを感じながら、彼はあるものに囚われていた。

（この言葉・・・さっきもどこかで聞いたような・・・。）

彼は、記憶を辿る。

そして、再び思い出す。つい先程まで苦しめられていた夢を。

あの恐ろしい映像も、あの時感じた感情もすべて、頭に焼きついて離れない。

その途端、恐怖が体を駆け巡り、彼は悪寒と吐き気に襲われた。

彼は、決断すべき時がきたと悟った。

あの夢を現実にしないために、自分がやらなければいけないこと。

それは、組織へ突入し、やつらを倒すことに他ならない。

それを実行することは、自らの死を意味するのかもしれない。

それでも、

彼女の平穏な生活は・・・

彼女の笑顔は・・・

他の誰でもない自分が守りたい。

そう答えを出したのだ。

あの恐ろしい出来事は夢でも、見つけた答えは夢ではない。

『待ってて欲しい』

今も、その言葉で彼女を縛り付けている。

それが結局、彼女を苦しめている。

『もう辛い』

そんな事を言わせるくらいなら、彼女の中から苦しみの元凶で
ある自分がなくなった方が、彼女にとって

幸せなのだろう。

（限界だな・・・。）

彼は、そう思った。

「蘭・・・もういい・・・。」

『え．．．？』

「もう．．．待たなくていい。もう、自由になって．．．いいんだ．．．蘭。」

『な．．．に言って．．．。』

「オレのことは．．．忘れてくれ．．．。」

『し．．．んい．．．ち．．．．．。』

今にも消え入りそうになる彼女の声。

「今まで、ほんとにごめんな．．．蘭。」

彼は、精一杯の誠意を込めて彼女に謝罪する。

『じよ．．．だん．．．で．．．しよ．．．？お．．．ねがい．．．。嘘だ．．．って．．．いって．．．。』

徐々に彼の言葉の意味が、彼女の身体に浸透し始める。

『もう．．．戻ってこれないって事なの？もう．．．会えない．．．って事なの．．．？私、新一のこと．．．待っていたら．．．

いけない．．．ってこと．．．なの．．．．．？』

「．．．．．。」

『待っててくれって・・・言っただじゃない!! 何とか言っ
てよ!! 新一!!』

本当は、忘れてなど欲しくない。

本当は、自分の帰りを待っていて欲しい。

しかし、それはエゴなのだ。

そんなことを言えば最悪の事態が起きた場合、彼女は一生自分の影から逃れられなくなる。

自分が枷^{かせ}となって彼女の人生を狂わせてしまうくらいなら、忘れさせてくれるほうがいい。

(オレが蘭を守ってやる・・・。)

彼はもう1度、悪夢の中で手にした答えを確認した。

『おねが・・・い・・・もう・・・いちど・・・待ってろ・・・
って・・・言っ・・・』

彼女が懇願する。

「・・・ごめん・・・蘭。」

彼はそれを拒んだ。

『し・・・いち・・・』

彼女はきつと受話器の向こうで、涙を流している。

しかし、それが最後の涙であって欲しい。彼はそう願わずには
いられなかった。

「一つだけ約束してくれ・・・蘭。」

『や・・・くそく・・・?』

「必ず・・・幸せになってくれ。」

『・・・・・・・・・・』

彼女からの答えはない。

「じゃあ・・・な、蘭・・・。元気で。」

そう言うと、彼は通話を断ち切った。

そして、どうしようもない喪失感が彼を支配していった。

14. 決断（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

こういうシーンを書くのは、悲しいですね。

私は、新蘭を心から愛しているので、書いていてかなり落ち込みました。

更に、伝えたい彼らの気持ちがあまく書けない、自分の文章力の限界を感じ・・・（涙）。

いずれもつと力がついたら、この部分は書き直したいと思っています。

良いアドバイスがあれば、ぜひお願いします。

15. そのとき彼女達は・・・(Side Ran)

『もう・・・待たなくていい。』

『オレのことは・・・忘れてくれ・・・。』

彼女の気持ちに反して、次々と彼から紡ぎ出される嫌な言葉達。

『必ず・・・幸せになってくれ。』

その言い方は、まるでこれからの彼女の生きる道に彼は存在しないかのようだった。

(あなたなしで・・・どうやって幸せになれるっていうの!?)

そう叫びたかった。

伝えたい事はたくさんあるのに、あまりのショックに言葉がでてこない。

そして、いつしか手にした携帯電話からは、規則的な機械音しか聞こえなくなった。

その耳障りな音を切ってしまったら永遠に彼との関係も切れてしまいそうで、彼女はただ彼からもらった

電話を大切に握り締めて、座り込んでいた。

(し・・・んいち・・・。どうして・・・。)

彼女の瞳から流れる涙は、絶望の色をしている。

彼を責めるつもりなどなかった。

ただ、寂しかった。

傍にいて欲しかった。

その想いが、あんな言葉に形を変えてしまうとは思わなかった。

結果、彼を失うことになるなんて予想もしていなかった。

（あんなこと言ったから・・・新一怒っちゃったのかな？私に
愛想が尽きちゃったのかな？）

自問自答を繰り返す。

しかし、その問いに答えられる彼と話すことはもう許されない
のだろう。

どれだけ後悔しても、時間は元にはもどらない。

（わたし・・・これから・・・どうしたらいいの・・・
？）

彼女は、深い闇へ落ちていくように意識を失った。

翌朝。

空はどんよりと雲に覆われ、今にも泣き出しそうな天気だった。

小五郎は珍しく7時前に目が覚めていた。

欠伸をしながら寝室を出て、リビングへ向かう。

『おはよう、お父さん。早いわね。』

そんな娘の挨拶を聞けると思い、ドアを開けたが人の気配がない。

「蘭？」

声を掛けてみるが返答もない。

「アイツ、寝坊か？珍しいな・・・。」

そう呟きながら、蘭の寝室のドアをノックする。

「蘭！朝だぞ！」

「・・・・・・・・」

物音すらしない。

「全く、しょうがねーなー・・・。蘭！入るぞ！」

文句を言いながらドアを開けると、小五郎は予想外の光景を目にした。

「蘭!!」

ベットの傍で倒れている娘に駆け寄り、うつ伏せになっていた体を半回転させて更に驚いた。

泣きはらした彼女の目。

「おい! 蘭! しっかりしろ!! 蘭!!」

緊迫した小五郎の声が届いたのか、蘭はうつすらと瞳を開ける。

「お・・・とう・・・さ・・・?」

「どうした・・・。何があった!？」

父親の言葉からゆっくりと昨日の記憶が蘇り、彼女の瞳に再び涙が溢れてくる。

小五郎は戸惑いを隠せなかった。

コナンがいなくなって、彼女が寂しい思いをしていることは彼も気付いていた。

泣いたことを覗わせる時も、多々あった。

しかし、それに気付かない振りをしてやるほうがいいと思って

いた。

彼女自身、小五郎に心配させまいと彼の前では明るくして見せていたからだ。

そんないつも気丈に振舞う娘が、初めて見せた表情。

「わ・・・たし・・・。」

何か言いかけた蘭を

「もう・・・いい。とりあえず、少し眠るんだ・・・。」

と彼は娘に言い聞かせ、ベットに寝かせる。

彼女は素直に目を閉じた。

「具合は悪くないか？何か欲しいものはあるか？」

そう尋ねてみるが、彼女は首を振るだけ。

しばらく心配そうに様子を見ていた小五郎だったが、彼女が眠りについたことを確認すると静かに

部屋を後にした。

（一体、何があったんだ？）

小五郎は、リビングへ戻ると推理を始めた。

（朝いつものように起きて・・・朝食を食べて・・・。）

昨日の出来事を振り返り、原因になりそうな事柄を探す。

しかし、彼女があんな風になる理由など見当たらない。

であれば自分が夜、眠ってから何かが起きたのだ。

彼女の心にあそこまで影響を及ぼせる事、物、人・・・。

それは、たった一つしか思い当たらなかった。

父親の勘と言ってもいいかもしれない。

（あいつ・・・俺の娘に何かしたんじゃないだろうな・・・。）

ふつふつと沸いてくる怒り。

だが、それだって確証があるわけではない。

（まあ、後で話を聞くしかねーな。）

彼はそのため息をつくとき、電話の受話器に手を伸ばした。

15. そのとき彼女達は・・・(Side Ran)(後書き)

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

今回は、次の話とセットで2人の女性の心情を中心に書いてみました。

次回はもちろん、彼女です。

蘭の心情については、もう少し時間が流れたところでしっかり書ければと思っています。

最後の小五郎が誰に電話をしたのか・・・ですが、もう少し先でわかります。

(と言っても、話自体にそれほど影響があるわけではないのですが・・・)

引き続き、お付き合い頂けると嬉しいです。

16. そのとき彼女達は・・・(Side Ai)

ジョディと電話を終えた哀は、眠れない夜を紛らわすためパソコンに向かっていた。

解毒剤を作るために必要なたくさんの化学記号や方程式。

しかし、今夜はどうやったってそんなことに集中などできない。

彼女の中には、彼に拒絶された衝撃が残っていた。

彼に自分を否定されたら・・・

どうやって生きていけばいいのだろう。

自分の想いを受け入れてもらえなくていい。

ただ、そばにいたい・・・。

急に、胸が苦しくなった。

(バカだわ・・・私・・・。)

断ち切らなければならない、彼への想い。

そして、いつまでもできないでいる自分。

自分の諦めの悪さに嫌気がさしてくる。

それを忘れたくて、デスクに置いてあるコーヒーを飲もうとした時、中身がなくなっていることに気がついた。

彼女はため息をついて、考える。

博士はもう夢の中だろう。

誰もいない真っ暗のリビングへ行けば、自分が押しつぶされてしまいそうで。

自分の弱い心に負けてしまいそうで。

それでも、身体は欲していた。

しばらく悩んだ後、意を決したように立ち上がり、リビングへの階段を上り始めた。

「オレのことは・・・忘れてくれ・・・。」

哀は持っていたマグカップを落としそうになった。

その思いがけない彼の言葉に。

聞くつもりは無かった。

というより、彼がリビングで電話をしているなんて予想もして

いなかった。

電話の相手は、間違いなく彼がこの世で一番大切に思っている女性。^{ひと}

（何・・・言ってるの・・・？工藤君・・・。）

その女性^{ひと}は、彼の支えだったはずだ。

その女性^{ひと}に別れを告げているなんて、彼女には信じられなかった。

「今まで、ほんとにごめんな・・・蘭。必ず・・・幸せになつてくれ。」

彼の言葉は続く。

彼女は状況を判断することができず、ただ呆然としていた。

電話を切った彼は、力尽きたようにその場に座り込んだ。

その表情は、悲しみと苦しみで歪んでいるように見える。

（あっ・・・）

彼女は思わず彼に駆け寄ろうとして、足を止めた。

自分の心にふっと湧き出た感情。

（もしかしたら・・・彼の隣にしていることができるのは、彼女ではなく私・・・？）

一度湧き出ると、その感情は止まることを知らない。

（彼女にあんなことを言ったのなら、これから先・・・彼と私はずっと一緒に・・・。）

ずっと秘めてきた彼への想いが報われるかもしれない。

そんな淡い期待が彼女を包みこむ。

刹那、彼女は踵を返して階段を駆け下り、研究室へ逃げ込んだ。

震える身体を自分自身で抱きしめる。

（わた・・・し・・・なんてこと・・・。）

どうしようもないほどの自己嫌悪。

彼がどういうつもりで彼女から離れる決断をしたかは、わからない。

でも、その理由が組織であることは想像できた。

であるならば、自分が原因なのだ。

自分が、あんな薬を作ってしまったから。

彼を巻き込んでしまったから。

（全部・・・私のせいなのに・・・。彼が私を選ぶはずないじゃない・・・。）

改めて、自分の罪の深さを認識する。

工藤新一の17歳という1年間を奪い、彼女から工藤新一を奪い、そして2人の想いまでも引き裂こうと

している。

（わたし・・・は・・・どうしたらいいの・・・？）

彼女の心もまた、闇へ落ちていった。

16. そのとき彼女達は・・・(Side Ai)(後書き)

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

前回の蘭に引き続き、今回は哀の気持ちをテーマに書いてみました。よくよく考えてみると、哀の立場って切ないですね。

そういう部分が上手に表現できていないのが、悔しいところですが・・・。

それにしても、2人の女性にこんなにも想ってもらえる新一は、本当にうらやましい限りですね。

もっと明るく、ラブラブなシーンが書きたいと思っている今日この頃です。

17. 夜明け

気がつくと、空が白みがかっている。

壁に掛かっている時計が、彼女との電話から5時間近く経っている事を知らせてくれた。

（朝・・・か。）

コナンは、まだリビングから動けずにいた。

時間の経過の速度と、心が現実を消化する速度が連動していない。

FBIで知らされた事実も、あの恐ろしい夢も、彼女との電話も、全部幻のように思えてくる。

しかし、それはただの願望でしかなかった。

（蘭・・・。）

夜更けに散々傷つけた彼女のことを思い出す。

あれから、彼女はもうしただろう。

もう、彼女の瞳から涙が零れていないだろうか。

もう、自分のことを忘れてくれただろうか。

『私、新一のこと……待っていたら……いけない……つてこと……なの……？』

ふと、彼女の言葉が蘇る。

彼女の自分への気持ちは、自惚れない程度に自覚しているつもりだ。

以前、彼女の口から『工藤新一』に対する気持ちを聞いたこともある。

本当に彼女のことを思うなら……

本当に自分のことを忘れてほしいと思うなら……

『嫌いになった。だから待たなくていい』

このくらいのことを言ったほうが、良かったのかもしれない。

でも……

嘘でも『嫌い』という言葉は使えなかった。

自分自身よりも大切に思える彼女に、その言葉だけは言えなかった。

（結局……中途半端なんだよな……オレは……。）

そう思った頭が、座り込んだままの体が鉛のように重かった。

「おはよう……。」

ふいに聞こえた声。

その方向に目を向けると、哀が立っていた。

「ああ……。早いな。」

彼は少し驚いて答える。

「寝てないの……？ 工藤君。」

哀は、答えを知っている質問を彼に投げかけた。

「いろいろ考えてたら、朝になっちまった……。オメーも寝てねーのか？」

彼女も彼と同じような顔をしている。

目の下にクマを作り、悲愴な面持ちをして。

「ええ。データの分析に没頭していたら、朝になってたわ……。」

（お互い嘘つきね・・・。）

哀はそんなことを思いながら、コーヒーの準備を始めた。

「昨日は・・・悪かったな・・・。」

コナンの意外な言葉にドキツとして、彼女は振り返る。

「何のこと・・・？」

「昨日、ここに戻ってきたとき・・・オメーの事・・・。」

（気付いてたの・・・？）

思いがけない彼の言葉が、あの衝撃で傷ついた彼女の心を癒していく。

「気にしてないわ・・・。」

気にしてくれていた事が嬉しくて仕方ないのに、素直になれる訳でもなく無愛想に答える。

そして、用意したコーヒーを彼に手渡した。

「ねえ・・・。」

2人はソファァーに向かい合って座り、しばらく無言のままコーヒ―を飲んでいた。

その静かな空気の中で、彼女は無意識に呟く。

「ん？何だ？」

「昨日・・・どうして・・・。」

そこまで言って、哀は自分の言動に気付き困惑した。

思わず口に出してしまいそうになった言葉。

『どうして、彼女にあんな事言っただの？』

それは昨夜、哀が夜通し考えていた難問だった。

（どうしよう・・・。）

コナンと蘭の電話を哀が聞いていたことなど、彼自身知る由もない。

「何だよ・・・灰原。」

彼が怪訝そうに尋ねる。

「だからね・・・。」

哀は取り繕うと必死に頭を働かせるが、良い口実が浮かんでこ

ない。

すると、ため息と共に彼が少し顔を曇らせて言った。

「昨日、何があったか・・・知りたいんだろ？」

どうやら、コナンは昨日の件を哀に話さずにいることを気にしているらしい。

「ええ・・・。」

彼の誤解に、哀はホッとする。

本当の質問を隠して、彼の勘違いにのることにした。

「今日、帰ってきたら話す・・・。だから、もう少し待ってくれねーか？」

その表情は、哀が昨日の夜見たものと全く違っていた。

どこか憂いを帯びていながらも固い意志を持つ目。

何かが彼の中で動いたのだと、彼女は感じ取る。

「わかったわ・・・。」

そう答えると、彼女は再びコーヒーを口に含んだ。

17. 夜明け（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

今回は、『夜明け』と言う事で背景色と文字色を変えてみました。

この場面の時の空の色を表現したかったのですが、あまりイメージに合うものがなく、散々悩んだ挙句この色になりました。

いかがでしょうか？

さて、次回から物語がまたまた少し動きます。

あの人も登場予定です。

今後もお愛読、よろしくお願いします。

18. ジレンマ

朝食の後、コナンは出掛けていった。

お昼頃には帰ってくるかと昼食を用意したが、一向に戻ってこない。

博士は、昨日の出来事など全く気付く様子もなく、昼過ぎから外出していた。

昼前から降りはじめた雨が、次第にその強さを増していく。

「はぁ・・・。」

誰もいない家の中で、哀のため息と窓を叩く雨音だけがむなしく響いていた。

結局、コナンが帰宅したのは夕食の準備が整う頃。

リビングへ入ってきた時の彼は、疲労困憊だった。

「大丈夫・・・？」

哀が気遣って尋ねる。

「ああ・・・ちょっと疲れたただだよ。思った以上に大変だったからな・・・。」

そう言いながら、コナンはソファに腰を下ろした。

「でも・・・やっと結論が出たから・・・。」

その表情は、ほんの少しだが晴れやかなものだった。

彼女も、そんな彼を見てほんの少し安心する。

「じゃあ・・・話してくれる？何があったのか・・・。」

コナンの話を聞き終わった時、哀は耳を疑った。

彼が話した内容とは、

『FBIの特別チームのメンバーが組織の奴らに捕まった。そこで、例の計画を早めることになった。』

それだけだった。

もっと詳しく話す事ももちろんできたが、それは哀の不安を助長させるだけだと判断したコナンは、

要点だけを伝えるという結論に至ったのだ。

「何・・・言ってるの・・・？」

状況を呑み込めない哀は、彼に信じられないという表情を向ける。

「どういう・・・こと？」

「どうということも何も・・・そういうことだよ。」

彼は、悠然たる面持ちで返答する。

「どうして中止じゃないの！？そんな状況で、無事に帰ってこれる訳ないじゃない！！」

彼女の中で動揺が広がり、自然と声が大きくなる。

「そんな事、わかんねーじゃねーか。」

「なっ・・・。」

哀には、どうしても信じられなかった。

自ら危険を冒す選択をした彼が、どうしても理解できなかった。

（何考えてるの？工藤君・・・。）

哀がもう一度疑問を投げかけようとした時、ガタツつと物音が窓越しに聞こえた。

瞬時に二人の視線は、カーテンの奥にある窓へ向けられる。

コナンはしばらく聞き耳を立て様子を伺った後、慎重に窓を開

けて外を確かめた。

「誰かいるの？」

恐怖を感じた哀の声が震えている。

コナンが窓の付近やその周りを調べると、ベランダに置いてあったガーデニング用のスコップが

倒れているのを見つけた。

「いや・・・大丈夫みたいだ。風が強くなってきてるからな。」

コナンは、片付けるのは雨が収まってからと思ったのかスコップをそのままにし、カーテンと窓を閉めると

話を元に戻す。

「この事は・・・FBIとも今日1日話し合って、決めたことなんだ。」

「帰ってきた時に言った『思った以上に大変だった』って・・・そのこと？」

「ああ・・・。」

「じゃあ、彼らも反対してたって事よね？なのに・・・どうして？」

事実、FBIとの話し合いは8時間を越えるものだった。

コナンの想いを理解してもらうのには、必要な時間だったと言える。

ジェイムズとジョディは、最後の最後まで反対だった。

しかし、コナンの意思の固さと、今日は珍しく本部にいてなぜか自分の意見に同意してくれた赤井秀一の説得に

折れたのだった。

「みんな・・・オレの気持ちを理解してくれたからな・・・。」

彼は、FBIでの会話のすべてを彼女に説明するのも煩わしく思い、その一言だけで返した。

「帰ってこれない・・・かもしれないのよ・・・？わかってるの・・・？」

憎んでいるかのような哀の視線が、コナンに突き刺さる。

「ああ・・・。」

彼はそれを諸共せず、平然と答えた。

「そんな・・・他人事みたいに言わないでよ！自分のことなのよ！・・・もし、万が一のことがあったら・・・。」

（私は・・・どうなるの？）

そう言いたかった。でも、哀の口から出た言葉は別のものだった。

「・・・蘭さんはどうなるの？」

『蘭』という言葉聞いた時、彼は遣り切れない表情を見せる。

「あなた、蘭さんに必ず戻ってくるって・・・言ったんでしょ？！その約束を破るの？あんなに一途に・・・」

あなたのことを想って・・・ずっと待ってるのよ・・・？」

蘭の気持ちと自分の気持ちは、立場が違えどきつと同じだ。

彼を想う女性として・・・。

哀はそう思っていた。

彼女の気持ちを代弁しながら、その言葉には自分の想いものせてしまう。

その哀の激しい口調に対して、コナンは含み声で応じた。

「蘭の・・・ためなんだ・・・。」

「え？」

『ため』という思いがけない言葉に、彼女は問い返す。

「奴らにFBIのメンバーが捕まったって事は、こっちが何か

仕掛けてくるかもしれないってバレたって

ことだろ？ そうしたら、いつ奴らが先手を打ってくるかわからねーじゃねーか……。その場合、蘭が

標的にされる可能性だってあるんだ。オレは、アイツがそんな目に遭うかもしれねーのに、何も

しないで見てるなんて、できねーんだよ……。」

彼の顔が遣り切れない表情から、決意に満ちたものへと変わる。

「蘭を守るためには……。たとえオレが帰ってこれなくなるとしても、奴らを倒すしかない。だから、

この方法を選んだ……。オメーにもわかって欲しい……。」

「

哀は、蘭を引き合いに出した事を後悔した。

彼の行動のすべては彼女に起因する。

わかりきっていることのはずなのに、哀の心はまた傷を作る。

「なに……。カッコつけてるのよ……。」

心の傷が、怒気を含んだ声となってコナンにぶつけられる。

「一人でヒーロー気取りって訳？ 彼女を守るため？ ふざけないでよ！ もし、あなたが死んだら……。残された者は

どうなるの?! そういう事・・・考えたことあるの?」

(あ・・・。)

哀は、自分の言葉で気が付いた。

彼の昨夜の言動の理由が。

夜通し考えても出なかった難問の答えが。

(だから・・・彼女に別れを告げたのね・・・。)

あの時、座り込んだ彼の苦しそうな表情を思い出す。

(彼女のために無理して・・・自分自身も傷ついて・・・。
でも・・・それが本当に正しいの?)

誰かのために誰かが命を落とすことが、仕方ないとは思えない。

まして、それが自分の大切な人なら・・・。

何とか思い留まって欲しい。考え直して欲しい。

その気持ちが増強し、自分でも抑えられなくなる。

すると、それを増長するかのような彼の呟きが聞こえた。

「オメーの言うとおりだよな・・・。」

その顔は、苦渋に満ちている。

「結局、オレの我儘なんだ……。もし、蘭に何か遭ったら、オレはきつと自分を許せない。一生、自分を

責め続ける。蘭のためって言っておいて……。結局、自分のためなのかもしれねーな……。」

（あの夢で……。ジンにも同じ事を言われたな……。）

ジンの思惑通り動いているように思えて、コナンは嘲笑を浮かべた。

「ホントに勝手よ……。工藤君……。」

（お願い……。行かないで……。）

「最低……。だわ……。」

（危ないことしないで……。死なないで……。）

次から次へと哀からコナンへ放たれる非難の言葉。

でも、その裏にある自分の素直な気持ちを言えないジレンマに、哀も苦しんでいた。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

18. ジレンマ（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

ついに、名前だけ登場した赤井さん。

彼についてはジン同様、今ひとつ掴みきれていないのですが、今後は登場回数も増えていく予定です。

そして、博士の家を訪れたのは誰か。

これは、当然ですが次回わかります。

若干、執筆のペースが落ちてきているのが不安なのですが、更新は遅れないように頑張りたいと思います。

19. 救世主

(こんな時間に誰だ・・・?)

時間はすでに、20時を回っていた。

突然の来客に、コナンは自分の顔が徐々に固くなっていくのがわかる。

博士がまだ戻ってきていないが、自分の家に入るのにチャイムを鳴らすはずがない。

それ以外でここに誰か来るとなると、火急の用件を従えたFBIか自分達の居場所を見つけた黒の組織・・・。

どちらにしても、あまり歓迎できる事態ではない。

「どう・・・するの?」

危惧の念を含んだ哀の言葉に覚悟を決めたコナンは、静かに玄関へ行き、扉ののぞき穴を確認して目を疑った。

慌てて開けられたドアの前に立っていた少年は、ずぶぬれの顔に不敵な笑みを浮かべて言った。

「救世主登場・・・やろ?」

「なんで、こっちは雨やねん！ほんま、最悪やったわ！」

タオルで身体を拭きながら不満を言う彼は、言わずと知れた西の高校生探偵。

「オメー・・・なんでココにいるんだよ・・・。」

唾然としているコナンと、何も言わずに彼の冷えた身体を温める為のココアを取り敢えず用意している哀。

「なんで・・・って、2～3日で連絡くれ言うたんは、お前やろ？」

「連絡って、フツー電話だろ？！なんで、わざわざ東京まで来るんだよ！」

文句を言いながらも、コナンはどこかホッとしている自分に氣付いていた。

正直、チャイムを鳴らした犯人が平次で良かった。

組織に見つかったのではないかと、冷汗をかいていたのも事実だった。

だが、いつ奴らが踏み込んでくるかもわからない状況で、平次をここに置いておく訳にはいかない。

「とりあえず、明日朝一で大阪へ帰れよ！」

半分怒ったような口調で言ったコナンに、平次が飄々と言っている。

「それはできんひんな。しばらく、厄介になるつもりやから。」

「ちょっと、どういう事なの？」

平次にココアを渡した哀が、二人の話に割り込んできた。

「あなた・・・彼に何か話したの？」

哀は懐疑的な眼差しをコナンに向ける。

それに気付いた平次は、横からフォローした。

「いや、コイツは何も言うてへんで。オレに嘘つきよったくらいやからな。」

「うそ？」

話が見えない哀は聞き返す。

「ああ。コイツ、オレに組織のこと調べるから春休みの間、あの姉ちゃんの事預かってってくれて

大阪まで頼みに来よったんや。でも工藤・・・、やっぱり組織との間に進展があったんやな・・・。」

知っている素振りで話す平次と今し方の出来事が、コナンの頭の中で繋がった。

「さっきの物音・・・オメーか？」

コナンの言葉に、平次はしてやったりという表情を見せる。

「アタリ。お前とこの姉ちゃんの話は、しっかり聞かせてもらったで。」

「なっ・・・。」

コナンと哀は愕然とし、言葉を失う。

「念のため言うとかくけどな、盗み聞きするつもりはなかったで。チャイム鳴らそうと思ったらな、この

姉ちゃんの大きな声が聞こえたから、入りにくくなってしまったんや。」

「だからって・・・オメー・・・。」

あの時、確かに窓の外に人の気配も不審な点もなかった。

組織かもしれないという疑念を持っていたコナンは、隈なく周辺を観察したつもりだった。

しかし、相手は平次だ。うまく誤魔化されたのだと悟った。

「まあ、大阪に来た時のお前の話なんか、ひとっつも信じて

へんかったからな、オレは。お前がオレに

あの姉ちゃん預けて、組織をぶっ壊しに行くことくらい簡単に推理できたわ。そやから、オレはココに

来たんや。正直、事態がそんなに緊迫しとるとは思わへんかったけどな。」

（コイツ、最初からそのつもりで……。）

大阪で平次と別れた時の、何かを企んでいるような表情を思い出す。

「オレが来たからには、もう大丈夫や。工藤。」

余裕綽々と言っている平次の言葉に、コナンは苛立ちを覚えた。

「バーロ！オメーが考えているほど、簡単な話じゃねーんだ！オメーにできることなんてねーよ。大阪へ帰れ！」

怒鳴った彼に平次は臆する事もなく、コナンに向かって真正面から尋ねた。

「お前は……オレのこと、そんなに信用できひんのか？」

「服部……。」

その真剣な眼差しにコナンは気後れする。

「この姉ちゃんの言う通りや。一人で悲劇のヒーローになって、満足なんか？ そんなん、オレが絶対許さへん！」

何が何でも、お前を連れて生きてココに戻ってきたる！」

『生きて・・・』

そんな可能性があるなら、コナンもそれに賭けたい。

しかし、限りなく低いその希望に縋^{すが}って全てを壊してしまうくらいなら、自分が犠牲になったとしても

大事な人達の生活を守りたい。

だから、やるせない思いを抱えていながら・・・それでも大切な幼馴染に別れを告げた。

そして、あんなに傷つけてしまった彼女を託せるのは、平次しかない。

彼を巻き添いにするわけにはいかないのだ。

「そんな事されるかよ！ オメーは関係ねーんだ！！」

（頼む・・・あきらめてくれ・・・。）

祈るような思いとは裏腹に、コナンの口調がきつくなる。

すると、平次は一呼吸置いた後、コナンを見据えて言った。

「お前がオレの立場やったら・・・どうするんや？お前は、黙って待ってられるんか？」

「・・・・・・・・。」

「お前の気持ちもわかるで。オレがお前の立場やったら、お前を巻き込みたくないと思うやろうからな。」

そやけど・・・、オレが危ない目に遭うかも知れへんのに、なんもせえへんなんて・・・お前もできんやろ？」

それはまさに、大阪行きの新幹線の中で考えた事だった。

だから、平次の気持ちはわかる。

でも、自分と蘭のような思いは、やはり彼らにさせたくない。

一瞬、コナンの脳裏に涙を浮かべた蘭の顔が浮かぶ。

「オメーに何か遭ったとき、悲しむのは・・・和葉ちゃんなんだぞ。そういうことも考えてんのかよ。」

「オレは、必ず生きて帰ってくるからな。そんな心配はしてへん！」

思わずコナンは、目を細める。

自分自身を信じて疑わない平次の強さが、眩しく見えた。

ほんの数日前までは、自分にも平次と同じものがあつた気がする

る。

どこに置き忘れてきたのだろう。

急に、自分がちっぽけでつまらなく思えた。

「工藤、お前・・・いつからそんなヨワなったんや」

悲しそうに呟いた平次に、コナンは何も言い返すことができなかった。

19. 救世主（後書き）

いつも読んでくださって、ありがとうございます。

今回の投稿で、20話目となりました。

自分でもここまで書き続けられたことにビックリしています。
これも、読者の皆様のお陰です。ありがとうございます。

さて、今回哀の出番がほとんどない・・・。

一応、この場面にはいるんです！ですが、3人の描写を同時に書く
という高度な技術を持ち合わせておらず・・・。

次回、哀にはしっかり登場して頂く予定です。

20. 平行線の探偵たち

結局、コナンと平次の話し合いは平行線のまま終わり、時間も遅いという事で平次は博士の家に

泊まっていくなかった。

夜遅くに帰ってきた博士は平次の存在に驚いてはいたが、彼の滞在を快諾した。

3人はかなりの疲労を感じていたため、平次の部屋が決まると各々自室へ戻っていった。

博士はその様子を黙って見ていたが、リビングに一人になると一抹の不安を覚えた。

帰宅後から気になっていた異変。

なぜ、この部屋に陰悪な雰囲気が残っているのか。

なぜ、3人ともあんなに疲れた顔をしていたのか。

そして、なぜ平次がここにいたのか。

疑問はどんどん膨らんでいく。

よく考えてみれば、昨日のコナンの様子もおかしかった。

あの時、気付けなかったことを後悔する。

話を聞いてやっていれば、あんな顔の二人を見ないで済んだのだろうか。

いや聞いたところで、何かが変わる事はなかっただろう。

考えるほど、自分の無力さを痛感させられる。

「大丈夫かのう・・・。」

そう呟いた声に、答えは聞こえてこなかった。

部屋に戻ったコナンは、携帯電話を手に入っていた。

特別な事態が発生した時は要報告とFBIとの取り決めがあったため、平次の来訪とその状況をジョディに

伝えるためだ。

『さすが、西の高校生探偵服部平次ね。あの時も、そう思ったけど。』

以前彼女のマンションで起こった事件でも思い出しているのか、受話器の向こうで驚きつつも納得して

いるようだった。

詳細と今後については明日話し合うことにして、電話を切る。

降り続く雨が更に激しさを増し、窓を打ち付ける音が大きくなっていた。

その雨音がコナンを苛立せる。

「まったく・・・、何にもわかってねーくせに。」

窓の外の闇に向けて、そう呟いていた。

突然の彼の訪問は、コナンにとって正直不快なものだった。

しかし、重苦しかった空気が少し和らいだのは事実。

コナン自身、平次の存在が心強く思えたのも事実だった。

『工藤、お前・・・いつからそんなヨワなったんや。』

その言葉がコナンの頭の中で何度もこだまする。

平次の言うとおりであった。

だから、何も言い返せなかった。

弱くなった事を認めたくない自分を、納得してしまった自分が
呑み込もうとしている。

（くそっ・・・。）

焦燥感が自分の意思に関係なく、増殖していた。

それと一緒に心の一番奥に封印したはずの感情が湧き出てくる。

このままでもいいのか……。

蘭を悲しませたままで、あんな嘘をついたままで、本当にいいのか……。

いつの間にか自分の唇を強く噛み締めていた。

そのせいで出血した唇を舐めると、血の味が口中に広がる。

その味が、コナンを少し冷静にした。

今の自分にはこれ以外の最善策など思い浮かばない。

考えて考え抜いて、やっと決めたことなのだ。

どんなに平次に言葉を尽くされても、そう簡単には変えられない。
い。

「これでいいんだ。これで……。」

組織の居所がわかった頃から、何度も自分に言い聞かせている
言葉を無意識のうちに口にしていた。

その頃、平次はベットの上に寝転がり、ため息をついていた。
大阪でコナンに話を聞いた時から、東京に行こうと決めていた。
今日までに、思いつく限りの事態を予測してきた。
もちろん、コナンが自分をそう簡単には受け入れない事も含め
て。

そして、それなりの対応策を考えてきたつもりだった。
しかし、現状はその予想を遥かに上回っている。

何よりも驚いたのは、コナンの変貌ぶりだった。

自分の知っているコナン・・・工藤新一は、『完璧』だった。

探偵としての資質も、自分の中にゆるがない信念も持っている。

自分もいろんな意味で平凡な高校生とは違うのだろうが、彼は
それ以上。

口が裂けても本人には言いたくないが、平次は新一のことを稀
有な才能の持ち主だと思っていた。

そして、その才能に驕ることなく彼なりに努力していることも
わかっていた。

だから、彼をライバルと認めた。

だから、彼と一緒に推理をしていると、他では味わえない充実感が得られるのだと思っている。

そう信じてきた平次にとって、今の彼は違和感を感じていた。

「なんでや・・・。」

隣で寝ずに悶えているだろう親友に向かって、届かない声が漏れる。

もし彼と同じ立場だったとしても、自らが犠牲に・・・という選択肢を選ぶ自分を想像できない。

それは、自分が組織の事を理解していないからだだろうか。軽く考えているからなのだろうか。

でも相手がどんな危険なものでも、自分を信じたい。

悪行の限りを尽くしている奴らに自分が負けるとは思いたくない。
い。

新一もそう思っていたはずだ。

しかし、彼の頭には負けることが決定付けられている。

そうなった時のことを考え、その対処のことしか頭にない。

だから、腹が立った。弱くなったと感じたのだ。

そんな『工藤新一』は見たくない。

「はぁ……。」

平次は、この部屋に入って何度目かの深いため息をついた。

（そうや……。アイツもオレもなんだかんだ言うたかて、高校生やったな……。）

ため息とともに、急に現実を思い出す。

所詮、相手は姿こそ違えど、自分と同じ17歳の少年だ。

ましてこの世には、完璧な人間などいないのだ。

自分の思い描いている工藤新一など幻影にすぎないのかもしれない。

今、自分がここにいるのは、彼の力になるためなのだ。

そんな当たり前のことを忘れていた自分が滑稽に思えた。

（さあ、何とかして考えを変えさせなアカンな……。）

平次は身体を起こし伸びをすると、明日以降のコナン対策に考えを巡らせ始めた。

20. 平行線の探偵たち（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

更新が遅くなりまして、本当に申し訳ありませんでした。

忙しかったのと、なかなか納得のいくものが書けず、悩んでいたため遅くなってしまいました。

と言っても、この文章に満足できている訳でもないのですが・・・。そんな状態だったということで、前回の後書きで「哀のことを書く」と宣言していましたが、見事に予告破りになってしまいました。すみません・・・。

次回こそは、哀中心に書く予定です。

更新の方も、遅れずにできるように頑張ります。

21. 彼と彼女への想い

二人の探偵がそれぞれの思いに耽っている頃、哀はベッドにもたれかかり、途切れることのない

雨音を聞いていた。

その静かな水の音が、今日1日の記憶を呼び起こす。

コナンと蘭の電話を聞いてしまった事。

FBIのメンバーが組織に捕まり、計画が早まった事。

コナンが自分を犠牲にしても、組織を倒そうとしていると知った事。

その彼を助けに、平次がやってきた事。

いろんなことがありすぎて、身体も精神からだ せいしんも疲れていた。

そして、更にその疲労を増長させているのは、どうしようもない孤独感。

コナンと平次の間で交わされた話の中に出てくるのは、彼らの大切な幼馴染だけ。

自分の存在など忘れ去られていた。

（何を期待してるっていうの？）

哀は、感情をコントロールできていない自分自身に苛立っていた。

ふと窓に目をやると、真っ暗な夜の闇が広がっている。

その闇は、自分の心の闇と同じように果てしなく続いていた。

呑み込まれそうになって、目を背ける。

この一件の元凶は、ほかの誰でもない自分。

その自分が、気に留めてもらうことを望んでいるなんて、どうかしている。

わかっている。

頭ではわかっているのに、心が悲鳴を上げていた。

（もう・・・イヤ・・・。）

すべてを忘れてしまいたくて、彼女は枕に顔を押し付ける。

何をどうすればいいのか、自分自身がどうしたいのかさえわからない。

ただ、ひとつだけはっきりしている事は、彼を失いたくないと思っていること。

今の彼は、すべてを捨ててでも組織を倒そうとしている。

周りの人間ために、自分を犠牲にすることを厭わない。

哀には、それが何よりも怖かった。

（どうすれば・・・いいの？）

昨日、彼に拒絶された時の苦しみの方が幾分もマシに思える自分が悲しかった。

気がつくと、激しかった雨も少し弱まっている。

枕に押し付けていた顔を上げて時計を見ると、もうすぐ日付が変わろうとしていた。

あれから自分の意思とは関係なく、頭の中で何度も繰り返されるコナンの言葉。

『もし、蘭に何か遭ったら、オレはきっと自分を許せない。』

それは、哀にも当てはまるものだった。

（私も・・・工藤君に何か遭ったら、一生自分を許せない。）

だから、彼を危険な目には遭わせたくない。

（その気持ちは理解できるけど・・・彼が犠牲になることではないわ。）

この件の発端は自分が作り出したもの。

彼にはない責任が自分にはある。

そして、工藤新一の本当の居場所へ・・・彼の帰り待ち望んでいる人たちの許へ戻す義務も。

そう考えた時、最悪の場合自分と同様に苦しむであろう彼女のことを思い出した。

（彼女は今頃、どうしているのかしら？）

彼女は、彼が現在どういう状況なのか知らない。

もちろん、あの彼の言葉の理由など思い当たらないはずだ。

彼の目に留まらないという事だけでも、自分はどうしようもない程のショックを受けるのに、理由もわからず彼にあんな事を

言われたのだから、彼女の衝撃は計り知れないものだろう。

（彼女は・・・彼の事・・・忘れるのかしら？）

ふと、疑問が沸き起こる。

普段の彼女なら、そんなことはないだろう。

（でも、彼にあそこまで言われたら・・・。）

彼への想いが強ければ強いほど、苦しみも深いはずだ。

その苦しみに耐えられなくなった時、彼の仕向けた選択肢を選ぶ可能性がないと言いきれないのかもしれない。

考え始めると、どうしてもその答えが知りたくなった。

（彼女に会わなくちゃ。）

自分でも驚くほどの衝動に駆られ、抑えられなくなっていく。

どうやって会うのか、会ってなんて言うのかなど考えられない。

ただ、彼女に会わなければならないという使命のようなものしかなかった。

哀は手元に置いていた携帯電話のダイヤルを押すと、相手の応答を待った。

数コールして相手が電話に出ると、彼女は間髪を入れずに言った。

「ねえ・・・ジョディ先生・・・お願いがあるの・・・。」

21. 彼と彼女への想い（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

更新が遅くなり、本当に申し訳ございません。

ちよっと忙しくなってきました、11月の中旬までは執筆に専念できる環境ではなくなっていました・・・。

できるだけ頑張って更新していきますが、今までのようにコンスタントに行っていく事は難しくなります。

ご了承ください、お付き合い頂けると嬉しいです。

そして・・・初めてスランプというものを体験しております。

表現したい事が思うように書けないという辛さに悩みながらも、もうどうにもできない状態です・・・。

長い間お待たせした上に、駄文で本当にすみません。

次回は、もう少しマシな文章が書けるといいんですけど・・・どうなってしまうのやら・・・（涙）。

とりあえず、頑張ります！！

22. 交錯する思惑

カーテンの隙間から差し込む光が眩しくて、コナンは目が覚めた。

昨日までの雨が嘘のように晴れ、雲ひとつない空が広がっている。

目を擦りながらリビングに下りていくと、既に平次は起きていて新聞を読んでいた。

「おはようさん。」

昨日の言い争いなどなかったかのような、普段とかわらない態度の平次。

それにつられて、コナンもいつもと同じように挨拶する。

「おはよう。」

お互いの顔に寝不足の兆候が見られたが、あえてそこには触れない事にした。

テーブルには朝食の準備が整っているが、哀の姿が見当たらない。

「灰原は？」

そう尋ねるとキッチンの奥から、博士の声が聞こえた。

「今日1日、一人になりたいそうじゃ。」

昨日初めて事実を聞かされた哀には、それを消化するための時間が必要なのだろう。

そう納得したコナンは、椅子に座り朝食を食べ始める。

「おい！お前を待ったったのに、なに先に食べてんねん！」

平次は読んでいた新聞を放り投げると、コナンの隣に座った。

この日のメニューは、トーストと目玉焼きにウインナー、それにサラダとヨーグルト。

いつもと変わらない食事の時間が、平次がいる事で少しだけ明るくなった気がした。

「それで・・・お前、今日FBIとの打ち合わせはあるんか？」

トーストをくわえながら、さらっと聞き出そうとした平次。

「・・・関係ねーだろ。オメーは今日、大阪に帰るんだからな。」

「

こちらもさらっとかわすコナン。

そんなやり取りを心配そうに博士が見ている。

博士は今朝、現在の状況を平次から聞いていた。

「相変わらず、強情なやつだなー。」

平次はコナンの言葉など気にもせず、朝食を食べ進める。

「服部……頼むよ。蘭のことを任せられるのは、オメーしか
いねーんだ……。」

今度は、泣き落とし作戦に出るコナン。

何とかして平次を大阪に帰そうと、必死になっていた。

「ああ、それなら心配せんでええで。オトンに頼んできたから。」

「何だって!?!」

せっかく繰り出した作戦も、思わぬ人物の登場にあえなく頓挫
する。

「まさかオメー……親父さんに全部話したのか?!」

組織の事を知る人物が増えれば、それだけ危険にさらされる人
数も増えることになる。

不安を覚えたコナンが、平次を問い質す。

「そんなことするかい！ただ・・・悪いけど工藤、お前に悪モンになってもろたで。」

悪ガキのような笑みを浮かべて、平次は答えた。

「どういうことだよ・・・。」

「『工藤が厄介な事件に巻き込まれて、その連中に追われている。で、オレに助けってくれと連絡が入ったから

東京に行くてくる。で、オレらが関わっていることで和葉やあの姉ちゃんに危険が及ぶ可能性は捨てきれん

から、二人の警護を頼む』って言うてきたんや。組織の事は一言も言うてへんけど、状況としてはまあ、

大体おうてるやろ？」

コナンは、開いた口が塞がらない。

「どうせ、姉ちゃんにはFBIの警護が本人に気付かれへんようついてんねやろ？FBIと警察と両方で警護して

るんやったら、何とかなるんとちゃうか。」

確かに、FBIは組織にも動きを見張られている可能性があるため、日本の警察が動いてくれるのは願ってもない事だ。

少しでも、蘭を安全な場所に置いておきたいと考えていたコナンにとっては、安心できる材料の一つになる。

蘭を思い出したと同時に、もう1人の女性がコナンの頭に浮かんだ。

「今更だけだよ・・・、オメー彼女に何て言ってきたんだよ。」

長期間平次が帰ってこないとなると、和葉も心配するはずだ。

どうしてもコナンは、蘭同様和葉のことも気になってしまう。

「あ？普通に東京行ってくるしか言うてへんで。別にアイツも『いってらっしゃい』って言うとしたし、なんとも

思うてへんはずや。どうせ、実行までに多少の時間あるやろ？その間にでも、1回大阪に帰るつもりでおるしな。

ある程度段取りを聞いてから、それを踏まえて和葉にどう説明するか考えようと思っとなる。」

和葉も蘭と同様、平次の事となると心配性が過ぎるところがある。

できるだけ、不安な思いはさせたくないと平次も考えていた。

「親や学校はどうするんだよ。」

平次は、ある程度の手続きを終えたコナンと違い、問題が山積する高校生だ。

コナンは、次々とその現実を並び立てる。

「そこは、確かに問題やな。親はどうにかして説得するとしても、学校がな……。でも、まあもうすぐ春休みやし、

何とかなるやろ。仮に休むことになっても、お前程の欠席日数にはならへんしな。」

皮肉たっぷりの平次の言葉に、コナンもムツとした。

「何とかなんて、ならねーだろ。」

何を言っても否定的な意見しか返ってこないコナンの言葉に、平次も次第に苛立ちが募る。

「お前もしつこいなー。何て言われても、帰るつもりなんてないで！いい加減、あきらめろや。」

「オレだって、オメーをここに置いておくつもりなんてねーよ！！」

「あのなあ、工藤……。」

結局、昨日と同じような言い争いになっている事に気付いた平次が、少し間を置き冷静さを取り戻す。

「今のお前を一人で行かせることは出来ひんで。お前、死ぬつ

もりやからな。」

急に、真剣な表情で平次に言われたコナンは、一瞬彼から目を逸らした。

その横で、平次の言葉に驚いた博士が声を上げる。

「新一！そんな事を考えておるのか？！」

「バーロ！違うよ。服部が勝手に言ってるだけだ。」

そう言うと、居た堪れなくなったコナンは席を立った。

部屋に戻っていく彼の背中を、博士は悲しそうな目で見送っていた。

「新一は、すぐに一人で抱え込んでしまうからのう・・・。」

博士は、空席になった椅子を見つめながら呟く。

「わかってるって、じいさん。せやから、オレが来たんやないか。心配しなや。」

笑顔とともに発せられた平次の言葉が、博士には頼もしく思えた。

22. 交錯する思惑（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。
更新が遅くなっており、申し訳ございません。

更になのですが・・・

次の更新は、明日から1週間ほど家を空けるため、来週の中ごろになると思われます。

ここでしっかりリフレッシュして、なんとかスランプを脱したいと思っています。

23. 運命の真意

朝食を終えた後、平次は自室に戻らずリビングに残っていた。

ソファに寝転がりながら、先刻の出来事を振り返る。

あの時、確かにコナンは自分達の前から逃げ出した。

そう見えた。

（アイツにも後ろめたさが残ってんねやな。）

自分の選択に自信がない、もしくは悩んでいる証拠だと思った。

（やっぱ・・・もう1回ちゃんと話さなあかな。）

平次は意を決すると、コナンの部屋へ向かった。

コン・・・コン・・・

「工藤・・・オレやけど・・・。」

ドアをノックし声を掛けるが、返事がない。

（今は、一人になりたいんかもしれん。）

その場を離れようとした時、不機嫌そうな顔をしたコナンがドアを開けて現れた。

「・・・なんだよ。」

そんなコナンの様子を伺いながら、遠慮がちに平次が尋ねてみる。

「ちょっと・・・話できひんか？」

コナンは無言のまま、彼を部屋へ迎え入れた。

部屋に入った平次はベッドの上に腰をかけたものの、机の椅子に座っているコナンにどう話を切り出したら

いいか考えあぐねていた。

沈黙が重たく感じる状況にも関わらず、コナンは不思議と不快を覚えていなかった。

彼が来てから、それ以前よりも自分の精神状態が安定しているような感じを受けているが、それはきつと気の

せいではないのだろう。

そんな事を考えていると、平次が声を掛けてきた。

「お前・・・何があったんや？」

真意が読み取れず、コナンは尋ね返す。

「どういう・・・意味だよ。」

「昨日も言ったけど・・・お前、なんかおかしいで。いつものお前とちゃうねん。何か理由があるんとちゃうか？」

いつもの自分と違う。

その違いは、昨日平次に感じた眩しさのことだろうか。

その眩しさとは、自分にもあった絶対的な自信のような気がしていた。

いつ、失くしたんだろう。

昨日の夜、一晩中考えた。

あの夢。すべては、あそこから始まった。

そう結論づいていた。

「夢を・・・見たんだよ。」

ぼつりとコナンが話し始める。

「夢？」

「大阪から戻ってきて、組織にFBIのメンバーが捕まったことを聞かされた夜にな。その夢で、蘭がジンに

殺された……。」

あの夢を見てから、もう3日経つ。

それでも、何一つ傷は癒されていない。

今でも、感じた恐怖が自分の身体を駆け巡る。

「あの時、蘭は言ったんだ。『新一が助けにきてくれるって信じてた』って。でも、オレは……蘭を助けられ

なかった……。アイツは、オレの目の前で崩れ落ちていったんだ……。」

平次は、その瞬間のコナンの周りの空気に驚いた。

彼がまるで陽炎のようで、今にもあっけなく消えてしまいそうな気がする。

このまま放って置くと二度と戻ってこない気がして、平次は慌てて声を掛けた。

「工藤！でも、それは『夢』なんやろ？」

敢えて、『夢』という部分を強調してみる。

「ああ。確かに『夢』だ。でも、現実になるかもしれないー夢だとも思ってる。オレは、もう2度とあんな蘭は

見たくない・・・。」

そう言うと、コナンは目を閉じた。

あの夢は、長いものでも壮大なものでもなかった。

しかし、コナンの精神を打ち砕くには十分だった。

「もう2度と、蘭を助けられねーなんて、傷ついたアイツを見るだけなんて耐えられねーんだ。だから、

オレは組織を倒す。どんな犠牲を払ってでも。」

自分の言葉でもう一度決意を新たにしたコナンに、平次がせがんでみる。

「そこまで覚悟決まってるねやったら、オレを連れてけや。」

そのセリフにコナンは、彼が来てから何度目になるかわからないため息をついた。

「服部・・・オメーには、蘭を頼みてーんだ。」

蘭が心配で仕方がないコナンは、それを譲るつもりはなかった。

「だから、姉ちゃんはFBIと警察と和葉に任せといたらええ。でも、お前には誰もおらんやろ？」

平次の言葉の意味を理解できずに、『?』がコナンの頭を飛び交う。

「は？ FBIがいるじゃねーか。」

「ちゃうちゃう。精神的な支えちゃう意味や。FBIにそれはできひんやろ？だから、オレが行くんや。」

それに・・・お前になんかあったら、和葉にも姉ちゃんにも一生口きいてもらわれへん気がするからな。」

そう言った平次の目が遠い彼方に向けられる。

「オレな・・・、今回の件で安心した事があるんや。」

「安心？」

「『工藤新一』も普通の高校生やったってことや。完璧だったお前が初めて弱いとこ見せたやろ？なんか

妙にホッとしてな・・・。人間は、一人では生きられへん。誰かの助けがいるモンや。今がその時やろ？」

（そうなのかもしれねーな。）

コナンは、平次の意見に妙に納得してしまっていた。

無意識のうちに、平次の存在に甘えている自分がいるからかもしれない。

だから、彼が来てからの自分は少し落ち着いていられるんだろう。

(でも……。)

その甘えに歯止めをかけるものが、心の中に存在するのも事実だ。

「あの夢でな……ジンに言われたんだ。『これがお前の運命だ』ってな。確かに、そうなのかもしれない。」

結局、大切に思ってるヤツでさえ泣かせてばかりなんだからな。もし、これが本当にオレの運命だったら……

オメーを巻き込むわけにはいかねーんだよ。」

どこか諦めを感じさせる目をしたコナンを見る平次の顔が、怒りに歪む。

「工藤……お前、何言ってるねえ。」

怒気を含んだ声に平次自身も少し驚いていた。

しかし、制御できずに言葉が口からついて出てくる。

「ほんまに運命なんて、信じてんのか!? 運命はな、最初から神様に決められてるもんやない。人間が決める

もんなんや! お前、もし死ぬことになったら……もう二度とあの姉ちゃんに会えなくなるとしたら、それを運命

なんて割り切れるんか!? そんなん、運命のせいにして逃げ

てるだけやろ！結局、自分に負けただけやないか！！」

そこまで言うてから、平次は感情に任せてしまった自分を反省した。

（あかん……。落ち着かなあかん。）

平次は心を沈めると、コナンに言い聞かせるように語りかける。

「人間は、生きる道を変えていける。そういう力を持ってるんや。自分が望まないものを運命って言葉で諦めて

しまうくらいやったら、抗って抗って何が何でも幸せになるための道を掴みとらなアカンのや。」

（運命に抗って・・・）

その言葉がコナンの心に深く突き刺さる。

そして、刺さったものがほんの少し光を放った気がした。

伝えなければならない事はすべて伝えたと思った平次は、ベツトから立ち上がりドアノブに手をかけた。

「工藤・・・もう1度よく考え。今のままやったら、たとえお前の命が犠牲になっても、組織は倒されへんで。」

戸口で振り返った平次は、コナンにその一言を残して部屋を後にした。

23. 運命の真意（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

1週間程お待たせして、申し訳ありませんでした。

そして、その1週間の間にアクセス数が5,000件を突破致しました！

家に戻ってきて、読者数を見た時は驚きと喜びでいっぱいになりました！

本当にありがとうございます！！

これからも日々精進して参りますので、引き続き読んで頂けると嬉しいです。

さて、今回の話の中で12話から3日しか経っていない設定である事に自分でビックリしました。

現実世界ではもう1ヶ月以上も経過していると言うのに・・・。
いかに更新が遅いかという事ですよね。

頑張っていきたいと思えます。

24. 切願の先に待つもの

探偵たちの内談の翌日の昼下がり。

ジョディは、車を運転してある場所へ向かっていた。

スモークガラスが装備されているその車の後部座席に、若い年頃の女性を乗せて。

女性は、サングラスをかけ帽子とマスクをしているため、顔を窺うことはできない。

その女性は、車窓から見える風景を眺めながら、これから会いに行く人物のことに思いを馳せていた。

昨日、ジョディは阿笠邸を訪れていた。

応対したのは、博士。

「哀はいる？」

「今日は1日、独りになりたいと言っておるんじゃない。」

暗い顔をして答える博士。

コナン同様、一人で抱え込んでしまう哀を博士はとても心配していた。

「そう。ちょっと顔だけ見てくるわ。別に病気な訳じゃないんでしょ？」

「ちょ……、ジョディ先生！」

半ば強引に家に上がりこむと、彼女は哀の部屋へ向かった。

コン……コン……。

ドアをノックするが、応答がない。

「哀……私よ。」

声を掛けてみると、すぐにドアが開いた。

「先生……。」

沈み込んでいた哀の表情が、少し明るくなる。

そして、部屋に入るなり、哀は待ちきれないというようにジョディに尋ねた。

「例の件、調べてくれた？」

「ええ。あんまり、良い状態とは言えないわね……彼女。」

そう。

哀がジョディに依頼したのは、毛利蘭の現在の状況について。

哀は蘭が今、どうしているのかどうしても知りたかったのだ。

「彼女はここ3日、体調不良を理由に学校を休んでいるわ。家からも1歩も出ていないようよ。かと言って、

病院に行った形跡もないわ。彼女の母親が毎日様子を見に来ている状態よ。」

蘭が倒れた朝、小五郎は妻の英理に助けを求めていた。

父親には話したくないことも、母親になら言えるかもしれない
と思つてのことだった。

ジョディは話を続ける。

「鈴木さんが毎日お見舞いに行っているようだったから、彼女
が友人にしている話を探ってみたけど・・・彼女も

詳しいことは聞けていないみたい。毛利さん、何かを話そう
とすると、突然泣きだしてしゃべれなくなるって

話していたわ。」

（蘭さん・・・。）

彼女にとって、彼の言葉がどれだけショックだったのか。

学校にも行けなくなるくらいの・・・誰かに助けを仰ぐことも
ままならないくらいの衝撃。

彼女の気持ちを考えると、哀も胸が苦しくなる。

「哀・・・何があったの？」

事情を知らないジョディも、蘭の状況をさすがに不審に思っ
ていた。

「ちょっとね・・・。」

（このままじゃ・・・いけない。やっぱり彼女に会わなくちゃ。

）

昨夜の衝動が蘇る。

「ねえ・・・先生。もう1つお願いしてもいい？」

「え？」

「私・・・蘭さんに会いたいんだけど・・・。」

ジョディは驚いた。

灰原哀は既に、米花町から引越した事になっている。

その彼女がこのこ現れたら、誰だって混乱するに違いない。

もちろん、組織の連中に見つかる可能性もある。

そうなれば、危険度はさらに増していく。

何よりも、そういうことを哀自身がわからないとも思えない。

「どうということ?」

「どうしても、彼女に会って聞きたい事があるの。」

彼女の真剣な眼差しに混乱しながらも、ジョディは努めて冷静に状況を説明する。

「わかってると思うけど・・・あなた、もうこの街にいない事になってるのよ?」

「ええ。だから、この姿では会わない。」

「え?」

ますます哀の言っている意味が理解できないジョディ。

「『灰原哀』としては会わない。『宮野志保』として会うわ。」

「何ですって?!」

それこそ自殺行為だ。

組織は裏切り者のシェリーを見つけようと必死になっている。

そのため、哀は小学生の姿であっても、なかなか外に出ようと

しなかったくらいだ。

それなのに、『宮野志保』で外に出るということがどれだけ危険か、想像しただけでも身の毛がよだつ。

加えて、もう一つ疑問が残る。

「『宮野志保』で会って・・・どうやって?？」

「解毒剤の試作品が残ってるのよ。私は、工藤君と違って一度も飲んだ事はないから、多分元に戻れるわ。」

哀の今までと正反対と言っているいい言動に、ジョディは戸惑いを隠せない。

「哀・・・それがどういうことかわかってるの?」

「わかってるわ。それでも、どうしても彼女に会わなくちゃいけないのよ!」

哀の見た事のない切迫した表情に、ジョディは圧倒される。

「お願い先生・・・彼女に会わせて。」

懇願する哀の顔を見据えながら、ジョディはひとつ大きなため息をつく、観念したように頷いた。

「わかったわ・・・。一度、チームで相談してみる。それにしても・・・あなたたちは、ほんとに次から次へと我儘ばかり

言うんだから・・・。」

そして、ジョディは約束どおり段取りを整えてくれた。

彼女と会うための準備も、その場所も。

どんな無理をしても、彼女に会いたかった。

そして、彼女に尋ねたい。

スモークガラス越しの風景が、約束の場所が近づいていることを教えてくれていた。

抑えられなかった願望がもうすぐ叶うと思うと、嫌でも冷静な自分が戻ってくる。

これから、そこへ向かって自分はどうするのだろう。

自分の心の奥底にある感情が燦^{くすぶ}る。

その感情と、彼女に向けられている感情は、相反するものだ。

どちらの感情が本当の気持ちなのだろう。

自分は、何を望んでいるのだろう。

彼女に会いたいと思った時から、その自問自答が始まっていた。

解毒剤を目の前にしながら、自分がこれからしようとしている事は正しいのかと悩んだ。

それでも、そうしなければ前に進めないと思ったのだ。

（だから、私はここにいるのよ。）

逸る気持ちを抑えながら、彼女が待つ場所はまだ目の前だった。

24. 切願の先に待つもの（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

前話投稿から、半月も経ってしまいました。

相変わらず更新が遅くて、申し訳ございません。

ただ、少し余裕が出てきたような気がするので（あくまで、気がするだけかもしれませんが・・・）

もう少し、スパンを短くしていければと思っています。

今回のサブタイトルは、悩みに悩みました。

こんなに困ったのは、初めてかも・・・。

内容とかみ合っていないくて、すみません。

25. 壊れかけの心

ジョディが志保を乗せた車を走らせている頃、毛利蘭は杯戸シティホテルの1室で深い眠りについていた。

その1時間程前・・・

彼女は、自分の部屋の窓から見える空を眺めていた。

学校を休むようになって、今日で3日目。

元来真面目な彼女が、こんなに長く学校を休んだのは初めてだ。

どこか体に表立った疾患があるわけではない。

でも、普通の生活することは不可能だった。

体が食べ物を受け付けず、日増しにやつれていく。

あの日。

最後に彼と話をしたあの夜から、自分が自分でなくなってしまった。

何をしていてもどんな状況でも関係なく、突然涙が溢れ出す。

自分をコントロールできなくなるのだ。

そんな自分を、両親が心配してくれている。

友人が気遣ってくれている。

皆の気持ちはわかっていたが、誰にも理由を話すことさえできずにいた。

あの出来事が自分にとって、どれだけショックだったかを認識させられる毎日。

辛い。

苦しい。

この3日間は、それ以外のことを感じることはなかった。

一体どうしたら、この状態から解放されるのだろうか。

彼を忘れたら、楽になれるのだろうか。

（新一のこと、いつそ忘れてしまえたら。）

忘れる事などできないと心の片隅で解っているのに、悩みすぎた心が安楽を求めている。

そんな事を考えていると、事務所のチャイムが鳴った。

今日は、母親の英理が休みで事務所に来ていたため、来客の応対をしてくれているようだった。

しばらくすると、二人分の足音が階段を上がってくる。

その足音がドアの前で止まり、ノックと一緒に英理が声をかけてきた。

「蘭。起きてる？」

「うん。」

短く答えると、英理が顔を覗かせた。

「お客様だけど、どうする？」

「誰？」

「先生ですって。外国人の。お名前は・・・」

そう言うと、英理が振り返って確認している。

「ジョディさん。」

「え?!」

意外な名前に蘭は驚いた。

確か、彼女は英語教師と偽って来日していた、FBI捜査官のはずだ。

そして、アメリカに帰ったと聞いていた。

なのに、なぜその彼女がここにいるのだろう。

いいようもない不安が蘭を包み込む。

（この不安の正体を知りたい。）

そう思った彼女は、意を決して英理に言った。

「入ってもらって。」

その答えを扉の外で聞いたジョディは、優しい笑みを浮かべながら蘭の部屋に入ってきた。

「久しぶりね。毛利さん。」

高校教師だった頃とはうって変わり、流暢な日本語を話している事にびっくりする。

「先生・・・どうして・・・。」

啞然としている蘭に向かって、ジョディは穏やかに話しかける。

「あなたが学校を休んでいるって聞いて、心配になってね。それで、お見舞いに来たの。これどうぞ。」

そう言うと、手にしていた花束を蘭に渡した。

「だって、アメリカに帰ったんじゃない？」

当然聞かれるであろうその問いに、ジョディは用意していた答えを口にする。

「ええ。今回、また捜査で来日していたのよ。」

「そう・・・だったんですか。」

考えてみれば当たり前の答えに納得しながらも、蘭は先刻感じた不安を拭えない。

（捜査って何の捜査かしら？）

答えてはもらえないであろうその問いをジョディへ投げかけようとした時、彼女の方から問いかけられた。

「ところで、もう4日もこうして部屋に閉じこもっているんですよ？少し外に出て、気分転換しない？」

「え？」

ジョディの突然の提案に、蘭は困惑する。

「でも・・・。」

自分をコントロールできない蘭は、家から出る事を恐れていた。

それを察したジョディが言葉を続ける。

「大丈夫よ。私がフォローするから。それに・・・あなたに会いたいって言ってる人がいるのよ。」

「私に会いたい人？」

一瞬、彼の姿が浮かぶ。

しかし、そんな事起こるはずがない。

もう二度と彼に会うことはできないのだ。

浮かんだ期待を慌てて消し去ると、蘭の瞳から涙が零れ落ちた。

それを見たジョディが、蘭の肩に手を添えながら優しい声音で語りかけた。

「ね。毛利さん。このままここにいても、辛いだけでしょ。外の空気を吸ったら、気持ちが落ち着く」

かもしれないじゃない？」

そんな事はない。

この苦しみから救い出す事ができるのは、この苦しみを自分に与えた彼以外あり得ない。

答えは明確だった。

しかし、自分に会いたい人がある。

それが気にかかった。

このタイミングで、自分に会いたい人とは一体誰なのか？

（もしかしたら、新一に関係があることなのかもしれない。）

彼女の第六感がそう訴えかけていた。

「わかりました。行きます、先生。」

その蘭の言葉に、ジョディは安堵の表情を見せた。

心配する英理をよそに、蘭は出掛ける準備を整え、ジョディの車に乗り込んだ。

「どこに行くんですか？」

「内緒よ。」

ジョディはハンドルを握りながら、助手席に座る蘭にウィンクをした。

（私に会いたい人って誰なんだろう。）

ふと窓の外に目をやると、久しぶりの見慣れた景色が色褪せて

見える。

まるで壊れかけの蘭の心が、見るものから色を奪っているようだった。

（こんな景色だったかしら。）

そんなことを考えていると、腕に冷たいものが当たった。

見ると、ジョディが缶コーヒーを差し出している。

「約束の場所に着くまでにちよっと時間が掛かるから、これでも飲んで。」

蘭は手渡されたコーヒーを開け、口を付けた。

（しばらくコーヒーも飲んでなかったな。）

久方ぶりのその味が、妙に新鮮に感じられる。

二口ほど飲み、また窓の景色を見ると、蘭を突然睡魔が襲ってきた。

（あれ・・・どうして・・・。）

そして、そのまま蘭の意識は遠のいていった。

25. 壊れかけの心（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

なんと・・・前回の投稿から1ヶ月以上、時間が経ってしまいました。

ビックリするほどの予告破り、本当に申し訳ございません！

思いのほか忙しく、なかなか簡単に時間は作れなさそうです。

以前も後書きに書きましたが、やはり11月中旬まではかなり更新が遅くなると思いますが、見捨てずに読んで頂けると嬉しいです。

これからも頑張りますので、宜しくお願いします。

26. 2度目の初対面

「らん……さん。」

ベットに横たわった蘭を目の前に、志保は呆然と立ち尽くしていた。

ここは、ジョディが用意したホテルの部屋の1室。

数週間ぶりに見た彼女の予想以上の変貌ぶりに、志保は驚きを隠せずにいた。

「本当に、可愛いそうなくらいやつれているわよね。」

ふいに、後ろからジョディの声が聞こえる。

「ええ。」

志保は振り返ることもなく、相槌を打った。

「ねえ、何が起きているの？」

ジョディは、志保の背中に問い掛ける。

彼女の疑問はもつともだ。

誰であったって、こんな彼女を見れば理由を知りたくなるだろう。

蘭を見つめながら、志保は呻くような声で答えた。

「・・・私のせいなのよ。」

「どういうこと?」

今現在、蘭と志保の間に何の係わり合いもない。

志保はともかく、蘭は志保の存在すら知らないのだ。

彼女の言っている意味が理解できず聞き返したジョディをとらえる事もせず、志保は言葉を続けた。

「私が、彼女をこんな風にしてしまったの。」

その彼女の苦しそうな声音から、深い自責の念があることをジョディは読み取った。

「何があったか知らないけど、またそうやって自分を責めているの?」

返事もなく、ただ重い空気だけが流れる。

「諸悪の根源は、組織の連中よ。あなたのせいじゃないわ。それなのに、どうして自分を苦しめるの?!」

ジョディが自分を想って言ってくれているのは、よくわかる。

でも、志保はこの罪悪感から逃れる事などできなかった。

「だって!!」

思わず大きくなった志保の声に、蘭が目を覚ました。

「ん・・・あれ・・・ここ・・・？」

意識がまだ朦朧としている蘭は、状況が把握できずに辺りを見回していた。

そんな彼女に向かって、ジョディがベットに近づき声をかける。

「大丈夫？毛利さん。」

ジョディの顔を見て安堵の表情を浮かべた蘭だったが、それまでの事を思い出したのか、慌ててベットから起き上がり

自分の状況を尋ねる。

「先生！私、いったい・・・。」

「突然、車で意識を失ったのよ。ちょっと驚いたけど、呼吸も脈も正常だし、取り敢えずそのまま約束の場所へ

連れてきたの。」

ジョディは来日の理由同様、用意していた言葉を口にした。

本当は、車中で蘭に渡したコーヒーには睡眠薬が入っていた。

それは、彼女にここがどこであるか知られないために、少しで

も蘭を危険に近付けないために、ジョディが

講じた事だった。

「そうだったんですか。すみません。ご迷惑お掛けして。」

蘭はそんなジョディの言葉に何の疑いも持たず、素直に自分の非礼を詫びている。

「そんなに気にしないで。無理やり外に連れ出したのは私なんだし。こちらこそ、ごめんなさい。」

ジョディも嘘を悟られないように笑顔でそう答えると、志保に目線を移して言った。

「それより、彼女なの。さっき話した、あなたに会いたいって言ってる人。」

ジョディの目線の先に立っていた女性は、蘭と目が合うと軽く会釈した。

赤みがかった髪に端正な顔立ち。

『美しい』という言葉がぴったりの人だった。

（きれいな人。この人、誰？）

「あの・・・」

蘭がその女性のことをジョディに尋ねようとした言葉に重ねる

ように、ジョディは志保に向かって話しかけた。

「それじゃ、私は隣の部屋にいるから。何かあったらすぐに連絡して。」

事務的にそう言い残すと、ジョディは部屋を後にした。

見知らぬ人と二人きりにさせられた蘭は、居た堪れずに俯いていた。

家を出る前に感じた不安の正体を知りたくて、自分に会いたいという人が誰なのか知りたくて、ここまで来た。

それなのに、いざこういう状況になると何もできない自分が恨めしかった。

(どうしたら・・・?)

言いようもない焦りが蘭を襲う。

その様子を見た志保は、慣れないながらも努めて笑みを浮かべながら、蘭に話しかけた。

「ごめんなさいね。蘭さん。突然、呼び出したりして。でも私、あなたにどうしても聞きたい事があったの。」

その言葉は、2つの疑問を蘭に残した。

『蘭さん』

確かに彼女は、そう言った。

その呼び方にしても、口調にしても、蘭にはとても初対面ではないように感じられていた。

彼女は自分を知っている。

そう確信が持てた。

でも蘭自身、彼女を見た記憶は、どれだけ遡ってみても思い当たらない。

（この人はいったい？）

湧き上がった謎を蘭は、思い切って志保にぶつける。

「どちらかでお会いしたこと・・・ありましたか？」

「そうよね。あなたは私と今日初めて会ったんだものね。」

彼女の問い掛けに、志保は思わず苦笑した。

自分は『灰原哀』として、何度も彼女に会っている。

でも、『宮野志保』として対峙するのは初めてなのだ。

当たり前のことを妙に納得したように、志保はうなづく。

でも、彼女に自分のことは話せない。

「ごめんなさい。私のことは何も話せないの。あなたに迷惑をかけたくないから……。」

自分の正体を明かせないという彼女に不信感が募るが、蘭は不思議と危険な人とは思っていなかった。

それは、彼女のもつどこか寂しげで、切なさを感じさせる雰囲気
気のせいかもしれない。

さらに言えば、FBIであるジョディが連れてきた人物なので
あれば、悪い人であることもないはずと思えた。

そして、もう1つの疑問を蘭は発する。

「あの……私に聞きたい事って？」

その言葉に志保は覚悟を決めると、彼女にとって今、一番聞き
たくて聞きたくないのであろうその名を口にした。

「工藤新一のことよ。」

26. 2度目の初対面（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

大変お待たせして、申し訳ありませんでした。

その間、温かいメッセージも頂戴し、とても感謝しています。

その言葉に、どれだけ励まされたかわかりません。

本当に、ありがとうございました。

さて、今回の話の中には、蘭・志保・ジョディが登場する訳ですが、やっぱり話の中に3人の人物描写をするのは難しいものですね。前にも同様のことがあったのですが、全く成長しておらず、ガックリ・・・。

まだまだ、精進が足りないようです。

もう少しこの状態が続きますが、頑張って執筆していますので、今後ともどうぞ宜しくお願いします。

27. 一筋の光

一瞬、空気が固まった。

そして、志保が放ったその名前が蘭の心を揺さぶった。

一筋の涙が蘭の頬を伝い、それを見た志保は、確信した。

（やっぱり、まだ・・・。）

「大丈夫？ 蘭さん。」

志保は、テーブルに置いていたバックからハンカチを取り出し、彼女に手渡す。

「ごめんなさい。私・・・。」

蘭は、必死に自分を取り戻そうとしていた。

いくらなんでも初対面の人にまで、迷惑をかけたくはない。

（お願い。止まって！）

必死に自分に言い聞かせ、溢れる涙を抑えようとしていた。

「いいのよ。気にしないで。こちらこそ、ごめんなさいね。辛い事思いださせてしまって・・・。」

予測できた状況ではあったが、目の当たりにするとさすがに辛

い。

自分の願望だけでここに来て、目的を果たそうとしているが、やはり間違いだったのかもしれない。

後悔の念が襲い掛かり、志保は蘭から目線をはずした。

（でも、もう引き返すこともできないじゃない。）

前に進むしかない。

そう思い直すと、志保は再び蘭を見据えた。

志保と目が合った蘭は、大きく息を吸い込んで言葉を発した。

「あの・・・あなたは新一を知っているんですか？」

当然のその質問に、志保も一呼吸置いて答える。

「ええ。知ってるわ。」

それを聞いた途端、蘭の形相が一変した。

ふいに立ち上がり、志保に掴みかからんばかりに捲くし立てる。

「新一は今、どこにいるんですか！？どうしているんですか！？無事なんですか！？」

必死に彼のことを聞き出そうとする蘭に、志保は居たたまれない気持ちになる。

でも今は、彼女にすべてを話すときではない。

「ごめんなさい。本当にあなたには、何も教えられないのよ。」

自分の態度に動じる事もなく冷静に話す志保に対し、蘭の動きが止まった。

「ど……うして……。」

「さっきも言ったけど、あなたを危険な目に遭わせたくないから。ひどい事してるってわかってるわ。でも、

ごめんなさい。それは、彼も望まない事だと思うから。」

失望の表情と共に、蘭はベットに座り込んだ。

そんな彼女に対し遣り切れない思いを抱えながら、それでも志保は話を続ける。

「何も言えないのに、申し訳ないんだけど……あなたに聞きたい事があるの。時間もないから単刀直入に聞くわね。」

それに対して、蘭からは何の反応もなかった。

しかし、次の言葉で今日何度目かの動揺が彼女の中を走り抜ける。

「彼のこと、忘れる事にした？」

予想もしない質問に、蘭は思わず顔を上げて志保を見つめた。

（この人・・・どこまで知っているんだろう。）

その問いは、自分と彼との間にあったことを知っているという事を意味している。

正体不明で、どこにいるかも何をしているかもわからない新一のことを知っていて、そして蘭が誰にも話せないでいる

苦しみの内容を知る唯一の人物。

そして、なぜかその人物と対峙させられている自分。

何一つ理解できないこの状況が、蘭を混乱させていた。

そんな彼女を置いて、次の言葉が襲ってくる。

「私、その答えが知りたくてあなたに会いにきたの。彼を忘れて、新しい人生を歩く？」

志保は自分の心と戦いながら、蘭から目を逸らさず話し続ける。

「もちろん、その道を選んでも誰もあなたを責めないわ。だって、あなたはこの1年、『待ってて欲しい』と言った

彼の言葉通りに、彼の帰りをただ待ち続けてきた。それなのに理由も知らされず、『もう待たなくていい』って

言われたんだもの。あなたがその言葉にどれだけ傷ついてい

るか、わかっているつもりよ。もう、楽になっ

ていいと思う。だから、あなたがどうしたいのかを知りたいの。」

その言葉に、蘭はこの数日間の思考へと引き戻された。

あの電話の時から、蘭に残った微かな違和感。

それは、彼が『忘れてくれ』と言った時の苦しそうな声だった。

何か危険な事に関わっていて、自分を巻き込みたくなくて、そう言ったのではないか。

そんな僅かな可能性に縋ろうとしたこともあった。

でも、それは今の彼女には辛すぎた。

そう考えれば考えるほど、もしそれが違ったとき、本当に自分が自分の事を嫌いになってそう言ったのだと

知ったとき、自分の体は心はどう動くのだろう。

それが、怖かった。

だから、自分の気持ちに背を向けた。

自分自身を守るために・・・。

沈黙が続いていた。

質問を投げ掛けられた女性は、膝の上にある両手を強く握り締め、そのこぶしの上に一雫の涙を落としていた。

質問を投げ掛けた女性は、ただ彼女からの答えを待っていた。

そして、彼女のたぎる思いがその沈黙を壊した。

「そんな事・・・そんな事ができたら・・・こんなに苦しんでない！」

俯いていた顔を上げ、蘭は志保に向かって、この数日間無理やり押さえ込んでいた気持ちをぶつける。

「忘れたくても、忘れられる訳がないの！新一のいない人生なんて、今まで一度も考えたことないもの！！」

だから・・・だから・・・私・・・」

感情と一緒に堰をきったように溢れ出した涙が、彼女の声を詰まらせた。

「そうよね。やっぱり、あなたが工藤君のことを忘れるなんて、ありえないわよね。」

蘭の本心を聞いた志保は、安堵のなかに、どこか寂しげな表情

を浮かべ呟いた。

そして、一度目を閉じ、気付かれないほど小さく深呼吸した後、志保は蘭に力強い声で言った。

「じゃあ、蘭さん。彼の事、待っててくれる？」

その言葉に蘭は目を見開いた。

「え？」

「私が必ず、彼をあなたの元へ返すから・・・無事に連れ戻すから、だから、彼の事待っててあげて欲しいの。」

ふいに、絶望の淵から僅かに見えた希望の光を、蘭は疑わずにはいられなかった。

「でも・・・新一は『待たなくていい』って・・・。」

「彼は強がってるだけなの。今までだって、あなたが待っているから、彼は頑張ってた。本当は、待ってて

欲しいと思っているのよ。」

それを聞いても尚、信じきれずにいる蘭を志保は、諦めずに説得する。

「今は、今だけは、彼よりも私の言葉を信じて！お願い、蘭さん。」

志保の真剣な面持ちに、その強い意志が蘭に伝わっていた。

「私・・・本当に、新一の事・・・待ってていいんですか？」

恐る恐る聞いた蘭に、志保は張り詰めていた顔を緩めて答える。

「ええ。今の彼には、『あなたが待っている』っていうことが必要なの。」

刹那、先程とは違う思いを含んだ涙が、蘭の瞳から零れ落ちる。

志保は確度の高い推量を確信に変えるために、もう一度蘭に尋ねた。

「蘭さん。待っててくれるわよね？」

「はい。」

涙で声が擦れながらも、ハッキリとした意思ある返事に、志保は胸を撫で下ろした。

「良かった・・・。その言葉が聞きたかったの。それでね、それが聞けたら、渡そうと思っていたものがあつて。」

そういうと、バックからある物を取り出し、蘭に差し出した。

「携帯電話？」

それは、最新型の桜色をした、蘭のイメージにぴったりのものだった。

「そう。この電話の番号は工藤君しか知らないわ。彼があなたのところに帰って来る時、この電話に連絡させるから。」

あなたには、肌身離さず持っていて欲しいの。」

「新一から？」

「ええ。彼以外から着信があることはないわ。でもいつ連絡がくるかわからないから、どこに行くにも必ず持っていてね。」

新一と自分だけの連絡手段を授けられた蘭は、この4日間でも番幸せな気持ちになっていた。

「ありがとうございます。」

そう言って嬉しそうな表情を見せた蘭に、志保は無理してでも彼女に会った意義を感じていた。

「少し喉が渴いたわね。何か飲まない？」

話が一段落ついたところで、志保が蘭に休憩を申し出る。

確かに、ずっと緊張状態が続いていた蘭の喉は、水分を欲していた。

「はい。」

その返事を聞いた志保はおもむろに立ち上がると、備え付けの冷蔵庫の上に置かれていたコーヒーマットの前に立ち、

手早く準備を始めた。

そして、出来上がった紅茶を蘭に手渡す。

「どうぞ。」

「ありがとうございます。」

そして、志保自身もイスに腰を下ろし、コーヒーマットに口をつける。

蘭は紅茶を口に含み、気持ちが少しずつ落ち着いてきたことを確認すると、どうしても知りたい答えを得たいがため、

躊躇いがちに志保へ問い掛けた。

「あの・・・やっぱり教えてもらえませんか？あなたは一体・・・だれ・・・なんで・・・すか？」

言い終わらないうちに、蘭は再び急な睡気を催す。

（あれ・・・また・・・。）

そのまま、蘭は座っていたベットに崩れていった。

志保は立ち上がり、ベッドに横たわった蘭が完全に堕ちたことを確認する。

「ごめんなさいね。蘭さん。」

寝息を立てている蘭に向かってそう呟くと、志保は電話を手にした。

「あ、先生？終わったわ。」

27. 一筋の光（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回も、更新が大変遅くなりまして、申し訳ございません。

当初の予定で、11月の中旬頃まで忙しいと皆様にお伝えしておりましたが、もう少し長引きそうです。

ご迷惑をお掛けしますが、今後もしっかり読んでいただければと思っています。

よろしくお願いします。

28. 敵わない相手

何も知らないコナンと平次が哀の不在を聞かされたのは、彼女が蘭との対面を果たした日の夜遅く。

その日は、組織への突入に関する議論が長引き、本部から帰宅できたのは日付が変わる頃だった。

哀の行動を心配した博士は、2人の帰りを待って事情を説明した。

「どこに行ってんだ？ あいつ」

「それが『気分転換しに』としか……。詳しい事は何一つ話してくれなくてのう。」

博士の報告を訝^{いぶか}しげに聞いたコナンに対し、平次はさして気にしていないようだった。

「あの姉ちゃんかて、一人になりたい時もあるんじゃないか。」

「まあ・・・な。」

ここ最近、哀の様子がおかしい事には、コナンももちろん気付いていた。

ただ、それは組織との対決が近づいていて、ナーバスになっているだけだと思っていた。

しかし、奴らに見つかる危険を冒してまで外出したことを考えると、理由はそれだけではないような気がする。

（何、考えてるんだ？）

疑問は膨らむ一方だが、彼女の行動や思考が理解できないのは、今に始まったことではない。

手がかりのない難問に取り組むのを諦めたコナンは、早々に自室に引き上げた。

深夜2時。

コナンは携帯電話を片手に、『010』から始まる電話番号を滑らかな手つきでダイヤルする。

数回のコール音の後、聞きなれた声が受話器の奥から聞こえてきた。

『Hello?』

「あ、母さん？オレだけど。」

電話の向こうは、ロンドン。

日本との時差は9時間だから、先方は午後の5時頃だろう。

『まあ、新ちゃん。新ちゃんから電話なんて、珍しいわね。どうしたの？寂しくなったの？』

「そんなんじゃないよ!!」

いつもと変わらない母親とのやり取り。

目下それに付き合うほどの余裕を持ち合わせていないコナンは、早々に本題へ移る。

「父さん、いる？」

『ええ。ちょっと待ってね。』

久しぶりの息子からの電話の目的が自分でない事を知り、名残惜しそうな声でそう言うと、有希子は近くで本を

読んでいた優作に声を掛け、受話器を渡した。

『どうした？新一。』

「ちょっと大事な話があつて。時間いいかな？」

『ああ。大丈夫だが……。』

優作は、いつもと違う息子の控えめな発言に少し戸惑いを覚えながらも、彼の申し入れを快諾する。

承諾を得たコナンは、ここ2週間ほどに起こった事のあらまし

を、重要な部分だけを抽出して説明した。

『それで、突入はいつの予定なんだ？』

黙って最後まで聞いていた優作は、今後のことを尋ねる。

「まだ、やらなきゃなんねー事があるから・・・1週間後くらいかな。」

FBIと完全に詰まっている訳ではないが、彼なりの予想日時を答えた。

『そうか。で？新一。蘭君のことはどうするんだい？』

「え?!」

突然、現段階の一番の難題を突きつけられ、コナンは間誤付く。

この短い会話の中で、的確に核心を突いてくるところは尊敬に値するが、今はそれに敬意を表せる気分にはコナンは

なれなかった。

しかし、この父親を前に誤魔化したところですぐに見抜かれてしまう事を思い知らされている彼は、ある程度正直に

答えることにした。

「蘭には、何も伝えてない。話すつもりもない。巻き込みたくないんだ。あいつには、幸せになって欲しいからな。」

その言葉で息子の考えていることのおおよそを感じ取った優作は、複雑な感情を抱いた。

そして、その感情を彼なりの言葉で表白する。

『新一。最後は、お前が決めるしかない。だから、よく考えるんだ。本当にそれでいいのか。』

父親の真意を読み取ったコナンは、ただ黙ることしかできなかった。

沈黙から自分の思いが伝わったことを確信した優作は、話を続ける。

『それで、何か頼みたい事があるんじゃないのかい？』

「ああ。父さん、インターポールに知り合いがいるって言うって？ 突入までのわずかな時間でも何か情報がつかめたら、

教えてもらいてーんだけど。」

『ああ。わかった。頼んでおくよ。』

当初の目的を達成したコナンは、これ以上の長話は無用と判断し会話を切り上げた。

「それじゃ。」

『新一。』

その意向を優作の鋭い声が阻む。

そして、息子を心配する父親の気持ちを明確でない短い言葉で伝えた。

『最終的な予定が決まったら、必ず連絡するんだぞ！』

「わかってる。」

通話を終了させた後、コナンは自分が想像以上に緊張していた事に気がつく。

（やっぱり、父さんにはかなわねーな。）

優作の言葉を思い出しながら、コナンの胸の奥にはモヤモヤした感情が渦巻いていた。

「ふう……。」

大きなため息をつくとき、優作は静かに受話器を置いた。

（さて、どうしたもんかな。）

たった今聞いた状況を消化しながら物思いに耽っていると、不安そうな声が背中から聞こえた。

「優作。新ちゃん、大丈夫なの？」

息子の話は聞こえていなかったが、夫の言葉で大方の流れが理解できていた有希子は、続けるような目で優作に

問い掛ける。

そんな妻の表情を明るくしてやりたいところだが、それが出来るほど優作も現在の息子の状況を楽観視はできなかった。

「どうかな。まあ、FBIの全面協力があるから、緻密な計画が練られているようだ。ただ、服部君を巻き込んで

しまっているようで、それが気がかりだな。」

「蘭ちゃんは？」

親友の娘で、自分の娘のように大切にしている、息子の幼馴染。

ただ、息子の帰りを待っている彼女の心情が手に取るようにわかる有希子は、息子同様に蘭のことを案じていた。

「それも、問題の一つだな。しかし、それは新一が自分で答えを見つけないといけない事だ。」

そう言うと、優作はシステム手帳から目当ての電話番号を探し出し、再び受話器を手にした。

28. 敵わない相手（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回は、1ヶ月空けずに更新できました！

それでも、遅いですね。

このままの調子だと、書き終えるのに何年かかるんだか・・・。

もう少し、ペースを上げれるように頑張ります！

さて、今回は工藤夫妻が登場です。

私の文章力があれば、優作と新一の多くを語らずとも思いが伝わる親子関係が表現できたのでしょうか、

現段階ではこれが限界です（涙）。

また、良いアドバイスなんぞありましたら、是非お願い致します。

29. 手にした希望と結論

再び、蘭が目を覚ましたとき、見慣れたはずの天井に違和感を覚えた。

「あれ？私・・・どうして？」

部屋の窓からは、夕日が差し込んでいる。

オレンジ色に染まった部屋をぐるりと見回し、ここが自室であることを確認した。

ベッドから体を起こすと、突然襲ってきた僅かなめまい。

ぼんやりとした頭が覚醒してくると、ある記憶のかけらが呼び起こされる。

ついさっきまで、ジョディに連れられて別の場所にいたはずだ。

（どうして、家に？）

記憶の糸口を必死に辿っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「蘭？気がついたの？」

ふとドアの方を見ると、英理が水と薬を持って立っていた。

「気分悪くない？」

手にしていたものを机の上に置くと、英理は蘭の額に手を当てる。

「熱はないみたいね。だから、無理しないでって言ったでしょ。」

「ごめんなさい。」

おそらく、かなり心配させただろうとの予想がついた蘭は、素直に謝罪した。

そして、今し方までの出来事を確認する。

「お母さん。私、ジョディ先生と出掛けたよね？」

「覚えてないの？先生にまで、ご迷惑掛けといて。」

「え？迷惑？」

娘の思いも寄らない言葉に、驚きと心配が英理に押し寄せる。

「本当に覚えてないの？大丈夫？蘭。あなた出先で倒れたのよ。」

「倒れた？」

「ええ。それで『申し訳ありませんでした』って、つい30分程前に先生がここに連れてきて下さったの。」

（あれ？　そういえば、さつきも同じようなことが・・・。）

そう思った瞬間、今日初めて出会ったあの女性が蘭の脳裏に浮かんできた。

そして、彼女と話した内容も。

一気に記憶が蘇った蘭は、英理にもう1度確認する。

「先生、一人だった？　他に、ショートボブの綺麗な女性が一緒じゃなかった？！」

「いいえ。先生お一人だったわよ。」

期待とは裏腹な答えが、蘭を落胆させた。

「そう・・・。」

そんな娘の表情が気になりながらも、体を案じた英理は蘭に薬を手渡す。

「とりあえず、この薬を飲んでゆっくり休みなさい。もう、無理しちゃダメよ。」

そう言い残すと、英理は部屋を後にした。

誰もいなくなった部屋で、蘭はもう1度思い出したことを頭の中で再生する。

（あれは、夢だったの？）

そんなはずはない。

新一を待って欲しいといった彼女が幻だなんて、思いたくない。

でも、それを現実だと証明するものもなかった。

（私の願望が見せた・・・夢？）

その思考が蘭の涙腺を崩壊させた。

（バカみたい。また、新一を待てると思うなんて。）

失って、改めて思い知らされた。

彼を『待てる』ということが、どれだけ幸せなことだったのか。

蘭は、その幸せを想像してしまったことを心から後悔した。

頭を枕に押し付けると、蘭はひたすら啜り泣いた。

どのくらいの時間が流れたのだろう。

いつの間にか、すっかり部屋は暗闇に包まれていた。

（寝ちゃったんだ、私。）

泣きすぎて重くなった頭を持ち上げて、体を起こす。

サイドテーブルにあるライトをつけると、ぼんやりと部屋が照らされた。

そして、夕方に母親が机に置いていった水を体へ流し入れる。

水が体中に染み渡り、それによって脳が覚醒してきた頃、聞き慣れた音が部屋に響いた。

バックの中で振動している音源を手にとると、携帯電話のディスプレイが光っていた。

それを操作し、受信したメールを確認する。

『蘭。大丈夫？今日、お見舞いに行ったけど、外出していないって言われて会えなかったから。』

外に出れたってことは、少しは元気になったってことかな？

また、明日様子見に行くね。 園子』

（ありがと。園子）

いつも気遣って、自分に元気をくれる親友の言葉に、冷え切っていた蘭の心が少し温まる。

その刹那、蘭の頭の中を過ぎったもの。

（あれ、携帯電話・・・あの時！）

もう一度バックの中を探ると、見慣れないモノを目にする。

（これ、彼女にもらった・・・。）

桜色の携帯電話。

新一しか番号を知らないといわれた携帯電話。

（夢じゃなかった！やっぱり、あれは現実だったんだ。）

数時間前に彼女の心に射した光が、再び輝きを取り戻す。

そして、その光が彼女の中で張り巡らされていた氷を徐々に溶かしていく。

（新一、私・・・待ってるからね。）

決意を新たにし、希望をのぞかせる蘭の瞳には、窓から見えた美しい月が写っていた。

一方、哀は蘭との対面を果たした2日後の夕方、阿笠邸へ向かう車の中にいた。

彼女は薬の効果が消え体調が元に戻るまで、FBIが用意したホテルに滞在していた。

薬の効果が表れていたのは、およそ2日間。

以前、コナンが飲んだ時とほぼ同じ時間、元の体に戻っていたことになる。

その間に得た外界から隔離された独りの時間は、哀にとって必要なものだった。

自分のこと、組織のこと、新一や蘭のこと・・・。

家では行き詰っていた考えも、環境の違う場所では別の視点で考えられた。

そして、ある『結論』に辿りついていた。

行きの不安とは打って変わり、ほんの少しの清々しさを携えて帰宅する。

チャイムを鳴らす前に意識して普段どおりの顔を作ると、指先に力を入れてボタンを押した。

鍵の開いているドアを開けて中に入ると同時に、博士がリビングから顔を覗かせる。

「哀くん！無事じゃったのか？！」

彼女を識別した博士が、慌てて飛び出してきた。

そんな彼の様子に、少し呆れた声で哀が返事をする。

「なに言ってるの、博士。2・3日で帰るって、ちゃんと帰ったでしょ？」

「それは、そうなんじゃが・・・出て行ったきり1度も連絡がないから、心配しておったんじゃ。」

哀は博士はもちろんジョディ以外誰にも、今回の事を何一つ話していない。

宮野志保に戻ると言えば、心配を掛けることは目に見えていた。勝手をする自分のことで、気をもませたくないと思っていたのだ。

「大丈夫だから。心配しないで。」

そういう哀に全ての不安を取り除けた訳ではなかったが、何より無事に帰ってきたことで博士は自分自身を納得させた。

「そうじゃな。疲れておるじやろう。コーヒーでも飲まんか？」

博士が何とか黙認してくれたことを察すると、哀も彼の提案に同意した。

「そうね。頂くわ。」

リビングに入ると、意外な人物がソファ―に座っていた。

「よう！姉ちゃん。久しぶりやな。」

「あなた・・・！まだココにいたの？」

既に、大阪に帰っていると思っていた関西弁の少年が、右にコーヒーを左に新聞を手にして座っていた。

「随分やな。オレがここにおったら、なんか都合でも悪いんか？」

彼女の返答にふて腐れながら、平次は嫌味を返す。

「別に、そういうわけじゃないわ。ただ、もう帰っていないと思ってたから・・・。工藤君は？」

「ああ。なんやもう少し計画を修正したいとか言うて、まだ本部におるわ。」

哀は、平次の向かいのソファ―に腰を下ろした。

それとほぼ同時に、博士が彼女のコーヒーをテーブルに置く。

そして、「夕飯の買い物に行ってくる」と言い残し、リビングを出て行った。

用意されたコーヒーを飲んだ哀は、3日ぶりの博士の味にホッとす。

そして、平次の顔も見ずに尋ねた。

「で？帰らないの？」

「ああ、アイツのせいで予定がめちゃくちゃ。意外と工藤が強情でな。ほんまやったら、とっくに大阪帰って、

準備始められとるはずやったのに・・・。」

平次の声は、語尾になるほど小さくなり、ぶつくさとぼやいている。

（彼は相変わらずってことね。）

平次の様子から、自分がいなかった間コナンの状況は何一つ変わっていない事を悟る。

敢えていうなら、組織が確実に自分達に近づいてきている事以外。

そして、2日前の出来事を思い出した。

自分がしたことを近いうちに、彼に話さなければいけない。

しかし、どう話せば彼が聞き入れてくれるのか、哀にはわからなかった。

彼の本心は、理解しているつもりだった。

ただ、ああまで頑なになっている彼を見るのは初めてで、だからこそ、その決意の固さを感じていた。

（どうしたものかしらね。）

そんな事を考え込んでいると、ふと平次の声が耳に入った。

「ところで、この3日間、何しとったんや？」

さっきまでのふて腐れた様子から一変した探偵の顔に、哀は少したじろぐ。

「別に。あなたには関係のない事よ。」

努めて平静を装って答え、哀は再びコーヒーを口にした。

「まあ、素直に答えてくれるとは思ってへんかったけどな。」

「じゃあ、この答えで傷ついたりしてないわね。疲れたから、少し休むわ。」

雲行きの怪しさを感じ取った哀が、話を切り上げて立ち上がった途端、平次に呼び止められた。

「ちよお、待てや。一度、あんたと話したい事があったんや。」

「話したい事？」

彼と彼女の接点など、皆無とっていい。

お互い存在は知っているが、話をしたことはほとんどないのだ。
その二人の間に会話など成立するはずがないと、哀は思っていた。

「私にはないけど？」

相変わらずの口調で返すと、彼は含み笑いを浮かべる。

「まあ、ええやないか。つれない事いうなや。これから仲間になるわけやし。」

その彼の表情に、哀は嫌な予感がした。

そして、それは次の彼の言葉によつて的中する事になる。

「あんた・・・工藤のこと好きやろ？」

29. 手にした希望と結論（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

11月中にもう1本と想っていたので、何とか間に合って良かったです。

本当にギリギリでしたが・・・。

希望としては、年内に組織との対決直前までいきたいところなのですが、そこまで辿り着くのはちょっと難しい・・・かな。

とりあえず、このペースでいくと完結まで何年かかる分らないということに気付いたので、

できるだけ早く進めていけるように頑張ります！！

30. 西の名探偵vs黒づくめの女

平次の言葉が、リビングを凍りつかせた。

予想もしない台詞を耳にし、哀は思考が停止する。

「な・・・に言ってるの？」

辛うじて返された彼女の言葉に対して、平次は当たり前といわんばかりの顔をして答えた。

「こっち来てからのあんたの言動を見とったら、そんなんすぐにわかったわ。」

依然反応のない哀をそのままに、平次は自分の第六感で感じ取ったことを口にする。

「あんたの行動は、前から気にはなっとったんや。最初は、工藤への罪悪感がそうさせてるんやと思っとった。」

そやけど、オレがここに来た時の話を聞いて確信したんや。あんたは工藤を想ってるってな。」

確かにあの夜の哀は、突然決まった彼の危険な計画を聞いた後で、感情が昂たかまっていたのは事実だ。

彼を死なせたくなくて、何とかやめさせたくて、その一心でしゃべっていたことを覚えている。

でも、その様子を彼への愛情に繋げられるとは、思ってもみなかった。

自分でさえ、これが『愛』なのかどうかはつきりと認識できていない感情。

哀のことをよく知らない平次だからこそ、そう思ったのかもしれない。

しかし、今それを議論することは不毛だと思えた。

「で？もし、そうだったとして、それが何なの？」

結局哀は、否定も肯定もしないという手段を取る。

「もし仮に、私が工藤君のことを好きだったとして、それがあなたに何か関係あるの？」

「それは、そうやけど・・・。」

彼女の正論に、平次も思わず言葉が詰まった。

さして親しくもなく、お互いの名前を知っているだけの関係。

その人が誰を好きだろうと本来なら関係のない話で、彼自身も通常なら首を突っ込むことはありえない。

でも、平次のなかに芽生えていたある予測が彼を深入りさせていた。

「だいたい、彼には大切な彼女がいるじゃない。他の人なんて、入る隙間すらないんじゃないかしら。」

さらに追い討ちを掛けるように言葉を続ける哀に、平次が反論する。

「そんな関係ないやろ。相手がおろうとなんだろうと、好きになるんは自由や。それに恋愛の結果に、絶対は

ないとも思うしな。」

新一と蘭との間に第三者が入り込めないのは、火をみるより明らかだ。

それを他の誰よりもわかっているだろう平次の意見には、哀も一瞬たじろいだ。

結果、その動揺が作用して、哀に否定的な言葉を発言させる。

「どちらにしても、私は工藤君のことなんて、何とも思っていないわ。」

そう言って、自分から目を背けた彼女をみて、平次はため息をついた。

「あんたも、強情やな。別にええやないか。オレは工藤に言ったりせいへんし。」

呆れるような彼の声に苛立ちを覚えた哀は、思わず強い口調になる。

「あなたに言う必要もないじゃない！」

相手の語調に負の感情を読み取った平次は、ここで会話を打ち切られると誤解が生じると判断し、彼女の不在時に

考えていた予測を端的に話し始めた。

「オレは、これでも一応心配してんねやで。あんたにとっては、どっちに転んでもしんどい結果ってことやろ？」

工藤の望み通り組織を倒せば、工藤はあんたの元を離れていく。倒せなければ、工藤に対する責任を一生

背負い続けることになる。まあ、その場合は命がないって言うた方が正しいやろうけどな。」

哀は、目を見開いて固まっていた。

平次はその様子に、自分の推理がまったく的外れではないことを確信する。

「あんた・・・それに悩んどったんやろ？だから、この3日間一人になりたかったんやないか？」

意外だった。

どうして、ほとんど話したことのない人に自分の胸中を見抜かれたのだろう。

いつも側にいる幼馴染の気持ちにも気付かないような人が、自分の苦しみに感付いている事が不思議だった。

（探偵ってそういう人種なの？）

そう思ったら、なんだか可笑しかった。

ほんの少しだけ、気持ちが出来になった気がする。

持ちきれないほどの重い荷物に気付いてくれた平次に、頑なに閉ざされていた哀の心はわずかに動いた。

諦めたような、観念したような、そんな面持ちで彼女は彼の質問に答える。

「いいのよ……。自分で招いた結果だから。彼や彼女には、何の責任もないことなの。だから、私は罪を購^{あがな}わ

なければなければならない。彼らの時間を奪ってしまったことを償わなければならないわ。」

先程まで見せていた敵対心が消え、哀の口調は自然と穏やかになっていた。

「この3日間は、一人になりたかった訳じゃないの。実は……、蘭さんに会ってきたのよ。」

彼女の意表をついた行動に、今度は平次の声が思わず上擦^{うわす}った。

「何やて?! なんで、そんな危ないこと……。あの姉ちゃん

に、あんたがまだここにおる事、なんて説明したんや？」

「この姿では会ってないわ。」

「は?!」

「本来の姿で会ってきたの。宮野志保として。もちろん、名前は明かしてないけどね。」

平次がコナンから聞いている彼女は、いつも地下室に閉じこもってパソコンと向き合っている内向的な少女

というイメージだった。

その彼女のどこに、こんな行動力があつたのだろう。

(それも、工藤のためならできることなんか?)

推測を立ててみるも、動揺は隠せない。

そんな平次に、哀はさらなる驚くべき事実を伝える。

「そして、彼女に伝えてきた。『彼を待って欲しい』って。」

哀の話は、平次の頭脳を持っても理解しがたいものだった。

その言葉は、新一自身が以前彼女に伝えているはずだ。

それを哀が身の危険を顧みず、蘭に伝えたとはどういうことなのか。

話の脈絡が掴めない平次は、怪訝そうな顔で哀に聞いた。だした。

「どういう意味や？」

彼の問いに、思いも寄らない答えが返ってくる。

「知ってた？ 工藤君は、蘭さんに別れを告げてたの。この1年待ち続けた彼女に『もう待たなくていい』って言ったのよ。」

もちろん、理由も言わずに。それを偶然聞いてしまった時、耳を疑ったわ。だって・・・今まで彼は、彼女のところへ帰る

ために頑張ってきた。これまでの彼の原動力は、彼女だったのよ。それを断ち切るなんて、考えられなかった。」

哀は、そこまで言うと言を閉じた。

今でも忘れる事のできない、コナンの言葉を聞いたときの衝撃。

思い出す度に起こる身震いに、自分の腕を体に絡めて自身を落ち着かせ、再び話し出す。

「そしてその後、彼女は体調を崩した。学校にも行けないほど、普通の生活を送れないほどにボロボロだった。」

「それ・・・工藤は知ってるんか？」

「いいえ。私も彼女の状況を調べた後、すぐに会いに行ったから。彼にはまだ何も。」

そこまで聞いて平次は、今までのコナンの言動の理由がなんとなく納得できた。

「あいつ、そんなことしとったんか。」

（せやから、あないに片意地張っとるんやな。）

それを知らずにコナンを説得しようとしても、度台無理な話だったのだ。

真実を呑み込んだのと同時に、平次は自分の中に怒りが徐々に沸き起こってくるのを感じていた。

そして、尚も続けられる哀の話に耳を傾ける。

「このままじゃ、いけないと思った。彼にとっても、彼女にとっても、そして・・・私にとっても。私は、彼女に彼を

返さなくちゃいけない。例え、どんな犠牲を払ったとしても。だから、彼に生きて戻ってきてもらうためには、

『彼女が待ってる』ってことが必要だと思ったわ。それで、どうしても彼女と会って話がしたかったの。」

平次は、ここまでの彼女の話の中で浮かんだ一つの疑問をぶつけてみる。

「なんでや？オレがこんな言うんも変やけど、そのままにしたら、工藤があんたのものになる可能性も残っと

たかもしれへんのやで？最後にアイツがどんな決断をするかなんて、誰にもわからへんやろ？」

彼の言葉に自嘲気味に笑った哀は、首を横に振った。

「わかるわ。彼の頭には、彼女のことしかないもの。だから彼女が待っていないのに、彼が元に戻るために、自分の

命を大切にするわけじゃない。このままじゃ、彼は生きて帰ってこない。そのことの方が、耐えられないわ。

彼が・・・死ぬなんて・・・。」

「そう思っとったんか、あんたも。」

平次もここに来てからのコナンを見て、哀と同じ思いを抱いていた。

自分の置かれている状況に苦しんでいても冷静な判断力を失わない彼女に、平次は感服していた。

同時に、哀が想像以上の罪悪感に苛まれているということも感じ取る。

不意に立ち上がり窓のそばへと足を進めた哀は、真っ赤に染まる夕日を眺めながらこの3日間得た『結論』を

口にした。

「あの夜から、ずっと考えてた。そして、一昨日蘭さんに会ってわかった事は、あの二人が幸せにならないと、

私は前に進めないってこと。私が犯した罪が許される事は一生ないかもしれないけど、この闇から抜け出して

新しい道を歩くための必要最低条件が、あの二人の幸せなだよ。」

わずかに辛そうな表情で話す哀の言葉に、平次も彼女の心情を垣間見た。

「ほんまにそう思えるんか？」

「・・・ええ。前にね、彼に言われたの。『運命から逃げるな』って。だから、どんな結果が待っているとしても、

逃げないって決めたのよ。これ以上、後悔しないように。やっど・・・やっど見つけた答えだから、それが正しい

と信じたいの。」

言い切った哀を見上げて、平次はそのまま一言呟いた。

「そうか。」

張り詰めた空気がほんの少し和らいだ頃、再び平次の向かいに座った哀は1枚の白い紙を平次に差し出した。

「ここまで話したんだから、あなたにお願いしようかしら。」

そこに書かれてある、11個の数字。

それが何を意味するのか、彼にはすぐ理解できた。

「携帯の番号か？」

「ええ。これは、私が蘭さんに渡した携帯電話の番号よ。博士に頼んで、GPSを内蔵してあるの。彼のメガネで、

彼女の居場所を常に確認できるようにしてるわ。それを渡して、工藤君に電話させて。そして、彼女に彼の

口から『待ってて欲しい』ってちゃんと伝えるように言って。彼女には、この携帯に彼以外から電話はくること

はないと伝えてあるから。」

平次は、並んだ数字を眺めながら彼女に尋ねる。

「そこまでしてきたんは、あんたやろ？なんで、自分で言わへんねや？」

「私は・・・どう話したらいいのかわからないのよ。蘭さんに会ってきたなんて言ったら、もう口も利いてくれないかも

しれないしね。だから、きっと彼は勝手なことをしてきた私の言う事なんか聞かないわ。それに、あなたの言葉の

方が同じ大切な幼馴染をもつ男同士として、彼に伝わるはずよ。」

その意見は腑に落ちないが、彼女の気持ちの整理は簡単にはつかないことも推し量れた平次は、彼女の申し出を

渋々受け入れることにした。

「まあ、やれるだけやってみるわ。あんたの決意を無駄にせんためにもな。」

「ありがとう。」

哀は平次に承諾してくれた事に感謝し、安堵の表情を浮かべる。

そんな彼女に、平次は恐らくコナンに聞かれるであろう質問を投げ掛けた。

「ほんで、あの姉ちゃんはまだ具合悪いんか？」

「今日の午後の報告では、少し回復したみたい。まあ、来週から学校も春休みに入るし、取りあえず今学期中は大事を

とって休むらしいけど。」

「そうか。そら良かった。」

顔を綻ばせながら言った平次とは対照的に、哀は遠い目をして
呟く。

「彼を失ったと思えば体を壊し、彼を待てる希望を掴めば元氣
になれる……。本当に、素直な体よね。彼の影響力は

凄まじいわ。その点から言えば、工藤君も同じね。あの夜か
ら、工藤君から笑顔が消えたわ。それを取り戻せるのも、

きっと彼女だけ。本当に、お互いがお互いを必要としている
のね。」

その呟きにこめられた感情の切なさに、平次は彼女への言葉を
見つけられない。

そんな哀に、平次に話したことによる安心感からか、成就する
ことのない想いへの虚無感からか、疲労がどっと

押し寄せてきた。

急に重くなった体を何とか立ち上がらせ、平次に声を掛ける。

「さすがに疲れたわ。私、少し休むから。」

「ああ。今日はゆっくりしいや。後のことは、なんとかしたる
さかい。」

笑顔とともに発せられた彼の力強い言葉に促され、哀はリベン
グを後にした。

30. 西の名探偵VS黒づくめの女（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

この作品も、今回で第30話。

ここまで続けられたのも、読者の皆様のおかげです。

本当に感謝しております。

相変わらず更新が滞っておりますが、今後ともこの作品をどうぞよろしく願います！

31. 難問の答え

（まさか、あのちっさい姉ちゃんが、そんなことしとったとはな。）

平次が託された紙を眺めながら物思いにふけること数十分、玄関で物音がした。

買い物から戻ってきた博士かと思いきや、姿を現したのはコナンだった。

「なんや、お前やったんか。意外に早かったな。」

聞こえてきた愛想のない挨拶に、帰宅早々コナンはムツとする。

「疲れて帰ってきてんのに、そんなことしか言えねーのかよ。」

そう言うと、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、勢い良くグラスに注ぎ入れ一気に飲み干した。

そして、玄関で気付いた変化を平次に向ける。

「そういえば、灰原の靴があったけど、あいつ帰ってきてるのか？」

「ああ。小1時間ほど前に帰ってきたわ。今は、疲れた言うて休んどるけど。」

平次は、無意識のうちにコナンに対して牽制球を投げていた。

哀があんな話をした後で、コナンに会うのは辛いだろうと思っ
ていたからだ。

コナンはこの3日間、口にこそ出さなかったが哀のことを心配
していた。

だから、顔を見て安心もしたいだろうし、文句の一つも言っ
てやりたいだろう。

でもそれは、彼女の無事を確認できているのだから、いずれも
急ぐものではない。

彼女の気持ち少しは落ち着くであろう明日で十分な事なのだ。

平次の思惑を知る由もないコナンは、彼の向かいに座ると気
にかかっていたことを尋ねた。

「何してたか言ってたか？」

それは、2日前に考えるのを諦めた難問。

今すぐ本人に会って答えを聞けないのであればと平次に問い掛
けたコナンだったが、その回答は自身を悩ますものだった。

「ああ。それで、後でお前に話があんねんけど、時間もらえる
か？」

夕食後、舞台をコナンの部屋に移した2人は、以前と同じように椅子にコナン、ベットに平次が腰掛けた。

そして、平次があの手紙をコナンに差し出す。

「なんだよ？」

不審そうに受け取ったコナンは、数字の配列からわかった答えを口にした。

「携帯の番号か？誰のだよ、これ？」

「毛利の姉ちゃんのなんやて。ちっさい姉ちゃんに渡してくれて頼まれたんや。」

コナンは、全く事態が読めずにいた。

現在蘭が持っている携帯は、自分がプレゼントしたものだからもちろん番号は知っている。

（オレと決別するために、携帯を変えたのか？）

可能性の一つとして考えてみる。

考えただけで、コナンにどうしようもない寂しさが押し寄せてきた。

しかし、もしそれが事実だとしても、なぜ哀が新しい番号を知っているのか。

どうして、それを自分に教えるのか。

大きくなっていく悲壮感と戦いながら、短い時間の中で考えを巡らせてみるも、疑問は何一つ解決できない。

「どういう意味だよ。もっとわかりやすく説明しろよ。」

コナンは降参とばかりに、平次に答えを求める。

「あのちっさい姉ちゃんな・・・お前と姉ちゃんの話、偶然聞いてもうたんやて。」

彼の返答を聞いても何のことか分からないコナンは、さらに首をかしげた。

「オレと蘭の話？」

「お前、姉ちゃんに『もう待たんでええ』って言うたんやろ？」

（あの電話・・・聞いてたってことか？）

あの晩のことを思い出し、絶句しているコナンに平次は話を続ける。

「その後、姉ちゃんがどうなったか知ってるか？」

その先は悪い事柄であることを予感させる言葉。

コナンの背中に悪寒が走った。

「蘭に・・・何かあったのか？」

そう言った声が自然と震えてしまっていることに、コナン自身も平次も気が付く。

明らかに平静を失い始めているコナンに対して、平次は哀から聞かされた事実を告げた。

「体調を崩したんやて。酷かったらしいで。今も学校休んでるそうや。」

その言葉に、コナンは自らの罪を認識させられる。

（オレのせい・・・だな。）

彼女をこれ以上悲しませたくなくて、すべてを終わらせたはずのあの夜。

しかし、結局彼女は苦しんでいた。

こうなるであろうことは、あの言葉を言う前から本当はわかっていたはずだ。

それでも、自分の行動を肯定するために、自分の行動が最善策だと信じ込むために、気づかないふりをしていた

だけなのだ。

知らされた事実が、コナンの胸を締め付ける。

そのはけ口を求めるかのように、コナンは平次に掴みかかった。

「それで、蘭は?!」

突然、胸倉をつかまれた平次は、臆することなくコナンを見据えた。

そして、コナンの細い手首を強く握り締め、自分から引き離す。

「その先は、会うたちっさい姉ちゃんに聞くんやな。」

「蘭に会った?! 灰原が?!」

思いも寄らない事実、コナンの手から力が抜け落ちていく。

「元の体に戻って、素性を隠して、会いに行ったらいいで。」

「なんだって?!」

（元の体に・・・って解毒剤の試作品を飲んだってことか?!
なんで、そんな危険なことを・・・。）

そのままコナンは、放心したように椅子に座り込んだ。

平次は、敢えて哀から聞いた蘭に関する経緯をコナンに伝えないことにした。

もちろん、急を要する事態であればそんなことはしなかっただろう。

ただ、平次には危惧していることがあった。

それは、今後のコナンと哀の関係。

コナンは、自分の知らないうちに蘭に会いに行った哀のことをどう思うのか。

彼女は、自分の行動をコナンは受け入れないと言っていた。

そんな事はないと信じたいが、彼がいつもの精神状態ではないことがどのように作用するかは予測できない。

最悪の場合、コナンは哀のことを責めるかもしれない。

それは、今の彼女には辛すぎる。

だから、哀の要求を受け入れた。

それに蘭のことは、中立な第三者から知らされたほうがコナンにとっても幾分かマシだろうと思った。

でも、これから話す自分の言葉では哀の思いを理解してもらえないかもしれない。

出来る限りのことはしてやりたいと思っているが、結局は当人同士でなければ解決できないこともあるはずだ。

あらゆる可能性を考慮した上で、平次はあの2人に会話するきっかけを残しておきたかったのだ。

いまだ呆然としているコナンに向かって、平次は哀から話を聞いた時から湧き出していた怒りをあらわにする。

「お前、ええ加減にしいや。」

平次の憤りを抑えられずに放たれた言葉に、コナンは正気に返る。

「お前のその態度が女を2人も苦しめてんのやで。ほんま最低の男やな。」

「2人って、蘭は分かるけど・・・灰原もってことか？」

（自分のこととなると、ほんまにとことん鈍いな、コイツ。）

平次はそう思うと、深いため息をついた。

ある一人のための行動が、他の誰かを傷つける。

それは、よくあることだ。

事実、『蘭のため』である彼の言動に、これまでも哀は心を痛めてきたのだろう。

しかし、今コナンがしようとしてることは、どちらも傷つける事になる。

それに気が付かないことがどうしても許せなくて、平次の感情はストレートにコナンにぶつかっていく。

「あのちっさい姉ちゃんは、お前ら2人に責任感じてんねや！こんな事に巻き込んだんは、自分のせいやって。そう思って

たんは、お前も気付いてんねやろ？だから、お前にキツイこと言われた姉ちゃんの事が心配で仕方なかったんや！！」

平次の言葉が、容赦なくコナンの心に突き刺さっていた。

哀がどれほどの罪悪感を感じているか、コナンは分かっているつもりだった。

でも、今のこの状況下で哀のことまで考えられていなかったのは、事実だった。

それが、結果的に彼女を傷つけていた。

『絶対守ってやる』と言っておいて、自分のことで精一杯だった。

哀への謝罪の気持ちを持て余しているコナンに、この話の核心が告げられる。

「ちっさい姉ちゃんな、お前の代わりに言うてきたらしいで。お前の帰りを待って欲しいって。」

「なっ……。」

予想外の事実にも、コナンはふたたび言葉を失った。

そんなコナンに、それまでの厳しい表情を少し緩め、平次はゆっくりと話し出す。

「なあ、工藤。ちっさい姉ちゃんも気付いたたで。このままやったら、お前は生きて戻ってこられへんて。お前には、

毛利の姉ちゃんが必要なんや。違うか？」

その問いかけにも、コナンの口は閉ざされたままだ。

平次は、コナンを揺さぶって彼の本来の意志を取り戻そうとする。

「工藤！しっかりせい！あのちっさい姉ちゃんは、自分の危険を省みずにそこまでしてきたんやで。お前は、それに

応えたらんとあかんのやないか？その気持ちを無視できるんか？！」

「オレは……。」

言いかけて、コナンはそのまま項垂れた。

彼の中で、再び巻き起こった葛藤。

蘭の元に帰りたいという気持ちと、自分が犠牲になっても彼女の未来を守りたいという想い。

両方を手に入れることなんて、本当に出来るのだろうか。

決心したはずなのに、平次の言葉と哀の行動が自分を迷わせる。

「お前、あのちっさい姉ちゃんに言うたらしいな。『運命から逃げるな』で。今、逃げてんのは、お前やで。」

その台詞で、弾かれるように顔を上げたコナンに対し、平次は真正面から思いをぶつける。

「あの子たちは、必死に自分の心と戦ってるんや。負けへんように前を向いて。お前かて、今までそうしてきたやないか。」

あの姉ちゃんの所に戻るために。それやなのに、なんでここで負けんねや。お前がそんなやつたら、あの2人は

救われへんで。」

彼の気持ちが心に染みとおり、コナンの表情に苦渋の色が浮かぶ。

「お前は自分の気持ちと、ちゃんと向き合なあかん。ほんで、それを姉ちゃんにちゃんと伝えな、絶対に後悔すんで。」

その番号はお前しか知らへんことになってるんやて。今、あの姉ちゃんは、その携帯抱えて眠られへん毎日を

過ごしてるやろ。そして、お前からの電話を待ってるんや。お前の『待ってて欲しい』っちゅう言葉を待ってるんや。」

すべてを知っているかのような平次の言葉が、コナンの頭に響いていた。

何の異論を唱えることも出来なかった。

「もう1週間もしないうちに、計画は実行されるやろうから、それまでに覚悟決めるんやで。」

無言のままのコナンを目の端で捕えながら、平次は彼に期限を言い渡す。

そして、ドアのノブに手を掛けると、思い出した連絡事項を彼に伝える。

「あ、1つ言い忘れとったわ。その携帯な、GPSが内蔵されてるんやて。新しいお前のメガネで、あの姉ちゃんの居所

確認できるらしいで。」

平次はそういい残すと、コナンの返事を聞くことなく部屋を出て行った。

ひとり、部屋に残されたコナンは、2人の少女達を思った。

平次が東京に来てからというもの、彼の言葉にどれだけ気付かされてきただろう。

苦しい選択ばかりを迫ってくる彼を疎ましく思ったことがないわけではない。

でも、それ以上に苦しんでいるのは、蘭であり、哀なのかもしれない。

（ほんと、サイテーだな。オレは。）

机に頭を打ち付けて苦悩する彼を月だけが優しく見守っていた。

31. 難問の答え（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

前回の投稿から1ヵ月半も経過してしまい、更新が遅くなりましたこと、

お詫び致します。

本当に申し訳ございません！

年末年始の忙しさに加えスランプに巻き込まれ、いつの間にか時間が経過して・・・。

（完全に言い訳です・・・すみません。）

今月もそこそこ忙しいのですが、何とかあと2回は投稿したいと思っています。

なかなか話が進めずにいますが、これからもご愛読よろしく願います。

32. 混迷する想い（前書き）

更新が大変遅くなりましたこと、お詫びいたします。

32. 混迷する想い

ぼんやりと月明かりが差し込むリビングに佇むひとつの影。

彼は、数時間前友人から手渡された紙を虚ろな目で見つめていた。

（蘭・・・。）

想いは、既に断ち切ったはずの彼女へと馳せる。

あの夜、彼女に別れの言葉を告げてから、彼の中から消える事のない喪失感。

失ったものの大きさをこれ以上ない程に思い知らされ、既に遅い後悔の日々。

それでも、あの悪夢を現実にしないうためだと言い聞かせる日々。

彼女のことを考えない日など1日もない。

きっと、今まで以上に彼女のことを想っている。

そんな自分が滑稽に思えてならなかった。

あきらめること以外の選択肢などないことを自分自身に言い聞かせてきたはずなのに、それが出来ずにもがき苦しんでいる。

『待ってて欲しい』

自分のこの言葉を彼女は待っていると、大阪の友人は断言していた。

彼の主張に心が揺らぎ、光が照らす道を選んでしまいたくなる。

でも、一度それを選択してしまえば、後戻りできなくなりそう
で。

抑えつけていたことで、余計に募ってしまった想いに歯止めが
かからなくなりそうで。

それが、結果彼女を傷つけることになりそうで。

気付かぬふりをし続けている自分の本心から、目を背けてしま
いたかった。

本来あるべき場所から外されて、テーブルの上に置かれている
ものを見つめる。

夕食後に博士から最新型と言われて渡され、リビングに置き去
りにしていたモノ。

その左側のガラスの部分から赤く点滅して知らされるのは、愛
しい人の居場所だった。

無事であることに安堵しながらも、聞かされた彼女の体調が彼を責め立てていた。

彼女に会ったという唯一の人物は、疲れたと言って休んでいる。

明日になれば、彼女の様子を知る事もできないのは十分分かっているが、悠長に時を過ごすことなど

彼には到底出来なかった。

そんな時、扉が開く音が聞こえる。

月明かりの届かない暗闇の中から現れたのは、待ち望んだ人だった。

「工藤君・・・起きてたの？」

わずかな光でぼんやりと浮かび上がる彼の姿が、憔悴しきっていることに哀は驚く。

「ああ。」

コナンは短く答えると、メガネのスイッチを切った。

その様子から、彼女は全てを察知する。

「眠れねーのか？」

こちらを見ずに尋ねた彼に、哀は冷蔵庫から水を出し、背を向けたままコップに注ぎ入れながら答えた。

「帰って来て、すぐに横になったから、自然と目が覚めたのよ。」

再びついてしまった嘘。

本当は、眠る事など出来なかった。

薬のせいもあって体は疲労困憊なのだが、精神が休まる事を許してくれない。

時に微睡むことはあっても、完全に意識を手放すことはなかった。

以前、同じような時間に同じ場所で彼と遭遇した時にも彼女は彼に嘘をついたことを、ふと思い出す。

（あの時も、そんな顔してたわね。）

すると、抑揚のない声が聞こえてきた。

「蘭の様子は・・・どうだったんだ？」

思いも寄らない言葉に、哀は質問で返す。

「大阪のお友達から聞いてないの？」

「オメーに直接聞けって言われた。」

（どういうこと？）

平次にはきちんと伝えておいたはずだ。

わざわざ確認しておいて、言わないというのはどういうことだろう。

平次の意図が分からず、哀は困惑していた。

「彼から全部聞いたのよね？」

一応確認してみるが、彼は何の反応も示さない。

無言は肯定と解釈し、哀は体をほんの少し傾けた。

「ごめんなさい。勝手な事して。」

彼女の謝罪が、コナンに平次の言葉を思い出させる。

そして、不甲斐ない自分に対する苛立ちを抑えられず、きつい口調で言い返してしまう。

「何で謝るんだよ。オメーを苦しめてるのは、俺だろ？」

彼の意外な言葉に哀は驚きながらも、それを肯定するわけにはいかなかった。

「違うわ！勘違いしないで。あなたたちを苦しめているのは、私よ。」

反論してみるも、それが今の問題ではないことに気付いた哀は、

当初の質問の答えを口にする。

「大丈夫そうよ。彼女の体調は戻りつつあるみたい。今学期中は、大事を取って学校を休むらしいけど。」

「・・・・・・・・そうか。」

コナンの全身から伝わってくる安堵。

彼女が彼の全てであることを、哀はただ思い知らされる。

それが、どうしようもなく切なかった。

コナンは、哀の言葉を噛み締めているのか、無言で窓の外に煌々と輝いている月を見上げていた。

彼女は、そんな彼を視界に入れることが出来ず、ただ手にしたコップの中の水を見つめていた。

混迷する想いを包み込む静寂の中、コナンが掠れた声で尋ねた。

「あいつ・・・何て言ってたんだ？」

自分では言えなかった言葉。

たった7文字なのに、喉まで出かかって、それでも無理やり吞

み込んだ言葉。

そして、そんな情けない自分の代わりに哀が伝えてくれていた。言わないことを決めたのは自分自身なのに、彼女の答えを期待してしまう。

哀は、何のことは敢えて聞かずに答えた。

「喜んでたわ。あなたを待てることが本当に嬉しそうだった。」

彼女は、携帯電話を渡した時の蘭の笑顔を思い出す。

それは哀自身が望んだものであるのに、ドロドロとした情念が湧き上がるのを制御できない。

「そっか……。」

コナンは望み通りの答えが返って来たことに胸を撫で下ろしたのと同時に、蘭への感情を持て余していた。

（オレは、どうすればいい？）

あの夜、自分の言葉が彼女を傷つけた。

それでも尚、待つという選択をした彼女に対してできることは何なのか。

どうすることが、彼女にとって一番いいことなのか。

彼の迷いは、どんどん増長していくばかりだった。

無言になったまま焦点のあっていないコナンを見て、哀は意を決して尋ねる。

「どうするの？ 工藤君。」

彼の返事は『YES』であって欲しいのに、『NO』をどこかで求めてしまう。

どこまでも諦めの悪い自分に、哀はウンザリしていた。

しかし、彼の答えはどちらでもなかった。

「もう少しだけ、考えさせてくれねーか。」

そう言いながら、彼は彼女が託した紙を大事そうに握り締める。

彼を見ることが耐え切れなくなった哀は、そのままリビングを出て自室へ戻った。

（夜が明けるのは、まだまだ先ね。）

部屋のドアを閉めた途端、彼女の瞳から涙が頬に一筋の跡を残した。

32. 混迷する想い（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

またまた、やらかしてしまいました・・・予告破り。

本当に、申し訳ございません。

更新速度を速めたいとは常々思っているのですが、なかなか思い通りにならず、読者の皆様には大変読みにくい環境を作っていると自覚しております。

次回はいつというお約束は出来ませんが、少しでも早くお届けできるように努力していきます。今後とも、どうぞよろしく願います！

33. 意義ある救世主

また、朝がやってきた。

赤く染まっていく東の空を視線の端でとらえた哀は、深いため息をつく。

胸裏とは関係なく陽射しを浴びて明るくなっていく町並みは、彼女にとって疎ましいものにしか見えなかった。

昨夜、この部屋に逃げ込んでから、疲れきった頭であれこれ思い巡らせた。

自分が手にした『結論』は、彼を苦しめているのだろうか。

彼の心の闇が消える時、自分の心にも火が灯るのだろうか、と。

しかし、考えれば考えるほど深みに嵌^{はま}っていく。

ただ、時間だけが過ぎていた。

大きく伸びをして時計をみると、針は6時を指している。

あと1時間もすれば、博士が呼びに来るだろう。

でも、あんなコナンの様子を見た後で、同居人たちにいつもと変わらない態度で接するには無理があった。

そこで哀は、朝食だと呼びにきた博士にドア越しで断りをいれ、

2人の探偵たちと博士が出掛けた頃を見計らって

リビングへ行き、ひとりきりのブランチを取った。

静かな空間と心を落ち着かせるコーヒーの苦味が、今の彼女にはちょうど良かった。

食事をしていても、ふと浮かんでくるのは昨晚の苦悩の色が滲んだ彼の顔。

あの顔をさせているのは、自分なのだ。

逃れられない罪悪感。

それでも、前へ進もうと哀に思わせてくれたのも彼だった。

夕方、コナンだけが先に帰宅した。

昨日のことが頭から離れず、重要な作戦を考えなければならない現段階では自分は役に立たないと自ら判断した

からだ。

夕食も取らずに早々に自室に引き上げていた。

そして6時を廻った頃、平次が帰ってきた。

その時、早めのお風呂に入っていた哀は、湯上りに平次と出くわした。

「ただいま。」

「・・・おかえりなさい。」

昨日の話のせいか、哀は少しぎこちない挨拶の後、居たたまれない表情を見せていた。

「大丈夫なんか？」

ソファーにドカッと腰を下ろすや否や、彼女の体調を氣遣う平次。

「ええ。」

答えた哀の様子から、彼は昨日とは違う憂いを感じた。

「なんかあったんか？」

彼女は平次の問いには答えず、昨日のことを確認する。

「昨日、工藤君に話してくれたのよね？」

その言葉から平次は自らの思惑の成功を察したが、予想以上の早い結果に驚く。

「そうやけど・・・、あんたがそれを知ってるってことは、あの後工藤と話したんか？」

「ええ。昨日の夜中に、偶然ね。」

昨日、平次と話した段階でもコナンはかなり滅入っていた。

あの状態で彼と話したのであれば、それは哀にも少なからずダメージを与えたであろう。

また、哀が自分を責めているのではないかと平次は心配になったが、そこには触れない方がいいと判断して

そのまま会話を続ける。

「あいつ、何か言うてたか？」

「もう少し考えさせて欲しいって。それだけよ。」

そう言って目を伏せた哀に、平次は遠まわしのフォローを入れた。

「そうか。まあ、後は工藤が決めることやかな。俺らは信じて待つしかないやろ。」

平次の言葉に哀は何の反応も示さない。

ただ、結局『コナンを信じて待つ』こと以外できないとお互いを感じていた。

「あ、そうや。」

突然、平次は何かを思い出したような比較的軽い口調で声を上げる。

しかし、次に聞こえた台詞はその調子には全く見合わない重いものだった。

「決まったで、作戦実行の日。」

その言葉に、哀の心臓が大きく波うつ。

「いつ？」

尋ねた彼女の声は震えていた。

「5日後の日曜や。」

いよいよ、最後にして最大の戦いが始まる。

恐怖から哀は戦慄を覚えたが、それ以上にこの戦いに勝たなければ、自分達の未来はないのだと自身に

言い聞かせた。

そして、やらなければならないことを思い出す。

「ちょっと待ってて。」

平次に言い残してリビングから出て行った哀は、数分後あるものを手に戻ってきた。

「これ、あなたの幼馴染の分。」

彼女から平次に手渡されたのは、オレンジ色の携帯電話だった。

「和葉の分か？」

「ええ。工藤君は、あなたに大阪へ帰るように言ってるけど、彼にも今回の計画にもあなたは必要だわ。」

私も・・・悔しいけど、あなたが来てから救われた。まさに救世主だったわね。」

そこで哀は一旦言葉を切ると、突然平次が現れたあの夜の事を思い出しながら微笑んだ。

彼女の表情に、彼もまた少し報われた気がした。

「このままあなたが計画に加わることになれば、彼女にも蘭さんと同じように危険な目に遭わせてしまう

可能性がでてくるわ。だから、これを渡してあげて。あなたの携帯電話で、彼女の居場所が確認できる

ようにするから。今晚にでも博士に頼んでおくわ。」

自分自身のこととで精一杯なはずの哀が、そんなことまで考えてくれていたことに平次は驚き、それが彼女を

さらに追い詰めていたのではないかと思うと心苦しくなる。

「・・・すまん。」

「謝らなければならないのは、私のほうよ。巻き込んでしまつて、ごめんなさい。勝手だってわかつてるけど、

あなたの力が必要なよ。私にできることは、こんな事くらいだから。」

平次に頼らざるを得ない自分の非力さへの怒りと、巻き込んでしまった彼への罪の意識。

それらを抱え、彼に心から申し訳ないと思っても、哀は『コナンを無事に連れ戻す』ことを最優先して

しまう。

そして、それが今の彼女を突き動かしていた。

「それで？実行までに、一度大阪へ帰るんでしょ？」

哀は、明日以降の平次の予定を確認するために尋ねた。

「そうなんやけど、その前に和葉をこっちに呼び寄せようと思うてんねや。」

平次の意外な計画に、哀は彼の大切な幼馴染の身を案じる。

「そんなことして大丈夫なの？」

彼女の心中を察してか、平次はこの次第を詳しく説明し始め

た。

「今日、遅なったんはそれをジョディ先生達と相談してたからなんや。体調の悪い姉ちゃんを1人で大阪に

行かすんは無理があるし、毛利のおっさんも説得せなあかんやろ？和葉がおったほうが、うまく事を

進められると思うんや。」

「でも、あなたの幼馴染の安全は確保できるの？」

「ああ。それは、もう先生達に頼んであるから大丈夫や。今すぐ、奴らが攻めてくる可能性は低い言うてた

から、このタイミングを逃す手はないやろ。和葉を危険な目に遭わすようなことは、絶対にせえへんから

心配しなや。」

平次の真剣な表情が、哀に彼がどれほど和葉を大切に思っているかを伝えてくる。

「ほんで、おっさんに姉ちゃんを預からしてもらうことを了解してもらったら、2人を連れて大阪に帰ろうと

思うてんねん。俺のオトンにも事情を説明せなあかんし。で、実行までに東京に戻ってくるわ。その方が

工藤も安心するやろ？」

確かに今、蘭一人を大阪に行かせることは危険である以上に不可能に近い状態だ。

平次と和葉が付き添ってくれば、これほど安心なことはない。

そして、それはきっとコナンも同じであろう。

「そうね。」

哀は、全てを熟慮し行動してくれている平次に心の中で感謝した。

彼女の同意に満足しソファから立ち上がって大きく伸びをした平次は、独り言のように呟いた。

「さて、和葉に連絡せなな。」

ところ変わって、大阪。

和葉は、いつも通りの学校生活を送っていた。

今日は終業式だったため、2週間ほど会えない友人たちと別れを惜しんで、夕方まで喫茶店で世間話に

花を咲かせた。

でも、たったひとつ、いつもと違うこと。

それは、平次がそばにいないこと。

突然、『東京に行くてくる』と言われ『いつてらっしゃい』と送り出したのは、もう1週間近く前のことだった。

いつもなら彼女もついて行くのだが、一緒に行こうと誘われなかったことと、事件ではないからすぐに戻って

くると彼が言っていたこと、さらに学校があるという3つの理由から同行を断念していた。

以来、電話もなければメールすら届かない。

彼の不在は日を追うごとに和葉の心を悩ませていく。

それでも、終業式までには帰ってくるだろうと言い聞かせて過ごしてきた。

しかし、結局彼は帰ってこなかった。

一体、何をしに東京へ行ったのだろうか。

事件でもないのに、終業式さえも出席しないとはどういうことなのか。

事件以外で平次がこんなに自分のそばを離れたことなど、今までに一度もない。

それが、どうしようもなく和葉を不安にさせていた。

「へーじ……。」

先程まで友人達と賑やかに過ごしていたのが嘘のように静まり返った時間と共に、薄暗くなっていく自室で

彼女の声が虚しく響く。

呼びかけた声に彼の返事はない。

それが、どうしようもなく悲しかった。

そんな時、突然鳴り響いた音。

平次専用の着信音。

和葉は慌てて携帯を取り出し、通話ボタンを押す。

『久しぶりやな。』

聞こえてきたいつもと変わらない彼の声に、和葉は安心感と怒りが同時発生した。

「久しぶりやあらへんわ！あんた、どこにいてんの？」

『東京や！そう言うたやろ？』

「そやけど、あんた今日終業式やってんで。事件でもないんに

出席せんと、何してんの？」

『あ・・・今日、終業式やったんか。すっかり忘れとったわ。こっちにおると、時間の感覚がめっちゃくちゃな。』

「忘れてたって・・・。」

和葉は、呆れて声も出ない。

だが、すぐにそれにも気付かないほどの出来事があったのではないかと思い直す。

「平次、何してんの？事件なん？」

2度目の同じ質問に、平次の声のトーンが少しだけ下がった。

『ああ、ちょっとな。』

「何なん？何があったん？」

はつきりしない平次の雰囲気、和葉は言いようもない胸騒ぎを感じる。

「ちょっと平次、ほんまにな・・・。」

『和葉、ちょっと頼みがあんねんけど。』

苛立ちをみせる彼女の言葉を遮って、平次は言葉を挟んだ。

彼が改まって和葉に頼みごとをすることは、そう頻繁にあるこ

とではない。

いつもと違うことが、なおさら和葉を不安にさせる。

「なに？」

『明日、朝一で東京に来てくれへんか？学校休みやろ？』

それは、意外な申し出だった。

今回、平次が学校を休んでまで東京へ行き、連絡が1週間近く取れなかったことには、なにか理由がある

はずだ。

それについて曖昧な態度をとり続ける割には、自分呼び寄せるとはどういうことなのだろう。

思いを巡らせてみるも、和葉には全くわからない。

唯一、今の自分にできることは、彼の望みを叶えることだけだ。

「それはかまへんけど、なんで？」

『毛利の姉ちゃんが、体調を崩したらしくてな・・・』

そこまで平次が言った途端に、和葉の声が割り込んでくる。

「ほんま?! 蘭ちゃん、大丈夫なん？」

『ああ、大丈夫らしいねんけど、一応様子見て欲しいんや。』

彼の言葉に安心し、その依頼を快諾しようとした時、彼女の脳裏に疑問がぼつぼつと浮かんでくる。

「でも、なんであたし？ 毛利のおっちゃんや、園子ちゃんもいてるやん。」

『そうなんやけどな、お前も心配やろ？』

「それはそうやけど・・・。」

平次は、電話の奥で苦笑いを浮かべていた。

さすが女の勘というか、平次と長年幼馴染をやってきているだけのことはある。

僅かな違和感を論理的ではなく、感覚的に察知しているのだろう。

「平次、何かあったんやね？」

3回目の和葉の言葉に、平次はこれ以上ごまかすのは無理と判断し、答えを先延ばしにするという方法をとる。

『まあ、詳しいことは和葉がこっち来てから話すわ。』

その言葉に、和葉は自分の不安が間違っていないであろうことを悟った。

(限界や・・・)

この不安を抱えて一晩過ごすことなどできない。

そう思った和葉は、思いついた名案を彼に提示する。

「あたし、今から東京へ行くわ！」

『なんやて?!』

思いも寄らない提案に、平次の声が飛び跳ねる。

「やって、行かな話してくれへんのやろ? だから、今から行くねん。」

『そやけど、お前・・・。』

「ええやん。蘭ちゃんのこと心配やもん。それに様子見て欲しい言うたの、平次やん。今からやったら

最終にも間に合うし。」

『ちよお、待て! 和葉!』

「ほな、時間ないから切るな。東京駅まで迎えよろしゅう。」

一方的に電話を切られた平次は、啞然としながら携帯電話のディスプレイに表示される『通話切断』の文字を

眺めていた。

「ほんま・・・しゃあないな。」

彼はため息をつきながらも、数日振りに和葉に会えることにとどこか嬉しさを覚えてしまう。

そして、彼女が来るまでの時間を利用して準備を整えるため、リダイヤルから目当ての電話番号を選択し

通話ボタンを押した。

33. 意義ある救世主（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

今回は、少し早めに更新できてホッとしております。

なかなか話が前に進まないの、ヤキモキしている読者の皆様が多数いらっしやるとおもいますが、少しでも更新のスピードを上げれる様努力していきたいと思っておりますので、お付き合いいただければ幸いです。

今回は、いよいよ平次vs蘭&和葉の前哨戦です。

上手に表現できれば良いのですが・・・。

皆様のご期待に添えるよう、頑張ります。

34. 違和感

『無事、最終の新幹線に乗ったよ。到着は、23時45分やからね。』
和葉』

21時20分発ののぞみへ飛び乗った和葉は、座席に腰を下ろすすぐに平次へメールを入れた。

もう、限界だった。

これ以上、彼がどうしているのか、何をしているのかわからな
いまま過ごすことなどできなかった。

とりあえず、適当なお泊りセットを持ち慌てて出てきたが、気
分が落ち着いてくると不安材料がゴロゴロしている

ことに改めて気付く。

事件でもないのに1週間も東京で何かをしていて、その理由を
問うてみても口を濁し、にも関わらず和葉に東京へ

来るよう指示してきた平次。

違和感のオンパレード。

何が起きているのかはわからないが、なぜだか悪いことだと
思えてならなかった。

東京でどんな出来事が待っているのかと想像した途端、和葉はぶるっと大きな身震いをした。

23時45分。

定刻どおり新幹線は、東京駅に到着した。

ホームに降り立つと、和葉は1週間ぶりの彼をすぐに見つけ出す。

「平次！」

わざと元気良く手を振って、彼に呼びかけた。

少しでも明るくしていないと、不安に負けてしまいそうだった。

和葉に気付いた平次は、苦笑いを浮かべながら彼女の近くへやってくる。

「ほんまにお前は、いきなり来よってからに……。こっちにも準備ってもんがあるやろ？」

「何があつたんか言わへん平次が悪いんやん。」

いつもの売り言葉に買い言葉。

緊迫した状況であるにも関わらず、1週間ぶりの和葉とのやり取りに平次はどこか心地よさを感じる。

それでも、彼の目の端に映る見知った人物達がすぐに現状を思い出させてくれた。

「とりあえず、行くで。」

不特定多数の人間が行きかうこの場所での長いは無用だ。

平次は、ホームから一番近い出口へ足早に移動する。

彼の歩く早さに必死に着いていこうとするが、和葉はなかなか追いつけない。

「平次・・・待って・・・。」

息も切れ切れな和葉の声が聞こえた平次は、立ち止まって振り返り彼女の荷物を持つと、それによって空いた手を

引いて歩き出す。

和葉はいきなり繋がれた手に驚きながらも、それさえも不安を増殖させていた。

八重洲中央口から少し離れたところに、1台の黒塗りの車が待機していた。

FBIが用意したものである。

平次は和葉が東京に來ると言って電話を切った後、ジョディに連絡し車の手配と警護を依頼していた。

そして、その後毛利家へ連絡をいれ、一晚泊してもらおう手はずを整えていた。

もちろん、いきなりやってくる理由は『人づてに聞いた、蘭の体調が心配で』というもので。

小五郎は突然の訪問にも関わらず、娘を心配してくれていることに感謝の意を示していた。

東京駅を出た平次は周囲の気配に警戒しながら、すばやく自分と和葉の体を車にすべり込ませると、同時に

車が動き出す。

和葉は、タクシーを使うものだと思っていたため、この状況に驚いていた。

「平次、この車どうしたん？」

「ああ。お前が突然来る言うたら、知り合いが送ったるって言うてくれてん。」

「そうなんや・・・。」

（こんな黒塗りの高級車に乗る東京の知り合いって、誰？）

またひとつ増えてしまった違和感。

和葉はこれらをどう処理したらいいのか、分からずに困惑していた。

「毛利のおっさんには、連絡入れてあるからな。そやけど時間も遅いし、怒られるかもしれへんで。」

和葉の空気を察知した平次は、他愛もない話で彼女の気を紛らわせようとしていた。

しかし、返ってきた愛想のない短い返事に効果がないことを悟る。

どうすることも出来ずに、平次と和葉はお互いに反対側の窓から東京の町並みを見ていた。

しばらくすると、和葉は流れている景色が見慣れたものと違うことに気付く。

「なんか、いつも通ってるとこと違わへん？」

彼女の言葉の通り、目的地までの最短ルートを通るのは危険と判断していたFBIは、後続車に注意を払いながら

走行していた。

再び、痛いところを突かれた平次は、それでも平静を装って答える。

「ああ、いつもの道な工事中なんやて。やから、遠回りやけどこの道使うてるとちやうか。」

「ふうん……。」

（あかんな。和葉のやつ、やっぱり不審に思おとる。）

平次はごまかし効かないところまで来ていることを感じ取っていたが、今すぐの解決策は見つけられない。

重苦しい雰囲気の中、いつもよりも30分以上かかって探偵事務所の前で車が停車した。

「ほな、和葉。姉ちゃんとおっさんに宜しくな。」

「え？平次は？」

一緒にここに泊まるのだと思っていた和葉は、平次の言葉に驚いた。

「お前がおらんのにオレだけここに泊まるんは、おかしいやろ。そやからオレは、都内のホテルにおるんや。」

今日はもう遅いし、話は明日な。」

確かに、もう日付が変わっている。

これ以上、平次を問い詰めても無駄だろう。

とりあえず彼の顔を見れたことで、彼の無事を確認できたことで、今夜は満足しようと和葉は自分に言い聞かせた。

「分かった。でも明日、ちゃんと話してくれるんやね。」

念を押した和葉に平次は、黙って頷いた。

そして、平次は思い出したように注意事項を口にする。

「それでな、和葉。明日、午前中にはここに来るようにするか
ら、それまで絶対に外に出るなや。コンビニ行ったり

するのめあかんぞ。」

「分かった。」

どうしてか尋ねようかとも思ったが、それは全て明日になれば
分かることなのだ。

それ以上のことは聞かず、素直に彼の言葉に頷いた。

「姉ちゃんのこと、頼むな。」

和葉とその言葉を残して、平次を乗せた車は夜の闇に消えてい
った。

深夜0時をとくに過ぎてしまっているというのに、明かりがついている2階の事務所のインターホンを鳴らす。

すると、恐らく彼女の到着を待っていたのであろう小五郎が出てきた。

「夜分遅くにごめんな、おっちゃん。」

勢いで大阪を出てきてしまったが、人の家を訪問するには常識な時間。

それを思った和葉の第一声だった。

怒られるかと思っていたが、小五郎の言葉は優しいものだった。

「いや。蘭も和葉ちゃんが来てくれて喜ぶだろう。部屋にいるから。」

「うん。分かった。」

短い会話を終えると、和葉は3階の蘭の部屋に行き、ドアをノックする。

「蘭ちゃん、あたしやけど・・・。」

少し小さめの音量で掛けた声だったが、蘭には聞こえていたようだった。

「和葉ちゃん。入って。」

言葉の通りドアを開けると、パジャマ姿の蘭がベットから起き上がっていた。

その様子に和葉は驚きを隠せず、目を見開いた。

志保が会った時ほどではないが、蘭の体調はまだ完全に回復していない。

もちろん、食欲は少しずつ戻ってきているのだが、以前ほどはまだ摂取できないでいた。

それに加えて精神的な部分も解決した訳ではない彼女のやつれた体は、なかなか元には戻らなかった。

見たことのない蘭の姿に思わずベットに駆け寄った和葉は、蘭の手を取る。

「蘭ちゃん！大丈夫なん？」

「ありがとう。和葉ちゃん。大丈夫よ。それでも、大分良かったんだから。」

得意そうに言う蘭の言葉に、和葉はさらに驚愕する。

「これで良くなったって・・・もっと悪かったん？」

安心して欲しくて言った言葉がやぶへびだったことに気付いた

蘭は、気まずい表情を見せた。

「本当に大丈夫よ。心配掛けてごめんね。」

「こっちこそ、こんな具合悪い時に突然来てしもうて、ほんまごめんな。」

「そんなこと気にしないで。和葉ちゃんに会えて嬉しいし。」

申し訳なさそうにする和葉に笑顔に向けた蘭は、いつもと違う何かを感じる。

それが、彼女が一人でここへ来た事だと気がつく、もう一人の行方を尋ねた。

「そういえば、服部君は？」

「都内のホテルに泊まってるんやて。」

「そうなの？」

蘭が知る限り、平次は基本的に和葉と行動を共にしている。

特に、東京に来るときは一緒ではないところを見る方が珍しいくらいだ。

だから、和葉の答えは思いも寄らないものだった。

「あれ？服部君って、一緒に来たんじゃないの？」

蘭がそう口にすると、和葉はもつと驚いた顔をして蘭に尋ねる。

「蘭ちゃん、平次が1週間前から東京におること知らんの？」

「え？知らないよ？」

あまりにも、いつもと違うことが起こっている現状に2人は混乱していた。

「どうなってんの？」

和葉は、平次の電話以降から感じている違和感がどこまで膨らんでいくのだろうかと恐ろしくなる。

一方、蘭は別のことを考えていた。

「ところで、和葉ちゃん。どうして私の体調のこと知ってたの？」

和葉がここに来ると小五郎から聞いたとき、最初に浮かんだ疑問だった。

「それも、平次から聞いてん。蘭ちゃんの様子見たってくれて言われて。」

「そうだったの？でも、どうして服部君、わたしのこと・・・。」

「そうやんな。あたしも、てっきり平次は蘭ちゃんに会ってるんやとばかり思ってたから。」

そこまで言って、数時間前の平次の言葉が和葉の頭を過ぎった。

（そっか。平次は、「らしい」って言うてたんや。ってことは、自分が会うたわけやなくて、誰かから聞いたっちゅう

ことやったんや。）

和葉は、あの電話の時に気付くべきだったと悔やみながらも、全く事態が読めないことに動揺する。

そして蘭は、和葉の言葉から考えられる状況を思案していた。

現段階で蘭の体調のことを詳しく知っている人物と言えば、両親と園子だけのはず。

（もしかして、彼女から？）

もう1人、具合の悪い自分と会っている人物を思い出した蘭の思考回路があわただしく動き出す。

そのとき蘭の思考を遮るように、和葉の見解が耳に入ってきた。

「なあ、蘭ちゃん。あたしな、平次のまわりで何かが起こってると思うねん。」

「うん。私もそう思う。」

和葉の言葉に、蘭は神妙な面持ちで頷いた。

（もし、私の推理があつたっているなら・・・。）

そして、たどり着いたある可能性を口にした。

「もしかしたら、服部君は新一に関わっているのかもしれない。」

┐

34. 違和感（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

4月中に投稿したかったんですが、1日遅れてしまいました・・・。
遅くなりまして、申し訳ございません。

さて、この作品の主役は一応新一のつもりなのですが、久しく出てきてないですね・・・。

この先しばらくは、蘭・平次・和葉のやり取りが続きます。

次話も出来るだけ早くお届けできるように頑張りますので、引き続きご愛読お願いします。

35. 東西女子高校生探偵の推理

『もしかしたら、服部君は新一に関わっているのかもしれない。』

』

久しぶりに聞いた人物の登場に、和葉の声が上擦る。

「どうということなん？何で、工藤君がでてくるん？」

「うん。和葉ちゃん、実はね……。」

そう言っ、蘭はあの夜から誰にも話せずにした出来事のあらましを和葉に話し出した。

新一からの電話、彼を知る女性との出会い、渡された携帯電話と約束——

黙って最後まで聞いていた和葉は、その内容に涙し俯いている。

話し終わった蘭は、和葉の手を取りそっと握り締めた。

「和葉ちゃん、泣かないで。」

「やって……もし、あたしが平次にそんな言われたら、辛くて耐えられへんもん。」

「ありがとう。」

自分のことのように思ってくれている和葉の優しさが伝わって

きて、辛そうに話していた蘭の表情が柔らかいもの

へと変わる。

「私ね、ずっとこの事を誰にも言えなかったの。でも、和葉ちゃんには話せちゃった。和葉ちゃんなら私の気持ち

分かってくれる気がして、だから話せたのかも。」

探偵を志す男性を幼馴染に持ち、恋に落ちた2人。

彼らと連絡が取れなくなることも、無事でいるのかと心配で眠れない夜を過ごすことも経験している2人。

想いを共感できるのは、目の前の相手以外いないのだろう。

蘭の言葉に和葉にも笑顔が浮かぶ。

それを確認すると、蘭は話を本題へと戻した。

「でね、私の体調のことを知ってるのは、お父さんとお母さんと園子くらいなの。もちろん学校みんなも、私が体調を

崩していることは知ってはいるんだけど、話を大きくしない為にも詳しいことは伝えてないはずだから。で、服部君と

お母さんは面識がないし、お父さんや園子に聞いたんだったら、2人が私にその事を話すと思うの。となると、その3人

以外で私の現状を知っているのはあの女の人だけだから、服

部君は彼女から聞いたんじゃないかな。」

「でもその人、蘭ちゃんの知らん人やったんやろ？」

「うん。最初はそう思ったの。でも、あれから考えている内にどこかで会ったことがあるような気がして・・・。」

その時は思い当たらなかったのだが、志保との対面以降いろいろと落ち着いて考えているうちに、蘭は彼女を知って

いるような感覚を覚えていた。

それが、彼女本人に会ったことがあるのか、それともただの他人の空似なのかはわからないのだが、それでも志保の

ことを全くの他人とは思えなくなっていた。

そして蘭は、志保が言った言葉の中で一番気になっていることを和葉に伝える。

「それに、彼女は新一のことを知ってるってハッキリ言ってたから。」

「平次とその女の人、工藤君でつながってるかもしれないってことやね。」

「うん。だから服部君は新一の事、何か知ってると思うの。」

そして、蘭には気に掛かっていることがもう1つ。

それは、あの女性を連れてきたのがFBI捜査官であるジョディだったということだ。

新一が言っていた『厄介な事件』にFBIも関係しているとしたら、それはとてつもなく危険なことなのではないか。

そして、その事件に平次も関わっているのではないか。

そう思うと辻褄が合っているようで。

でも、それがもし事実であれば、彼らの身に危険が迫っていることを意味する。

たどり着いた予測は、蘭にとって信じたくないものだった。

「全ては、明日やね。」

今はあれこれ考えていても、結論など出ない。

和葉の言葉に蘭は大きく頷いた。

そして、彼女たちは不安を抱えたまま夜を明かす事になる。

翌日、太陽も空高く昇り、もうすぐ影が一番短くなる頃、平次

は毛利探偵事務所へ向かう車中にいた。

昨日は何とか和葉の疑惑を振り切ってきたが、今日は避けられるはずもない。

（どう説明したら、納得するやろか。）

もちろん、彼女たちに全てを話す事はできない。

真実に近づけば、それだけ彼女達にも危険が迫る。

しかし、全てを隠して説得する事は、この状況下で不可能だと平次は考えていた。

ギリギリのラインを判断しその範囲内のことは話さないと、きっと彼女達は納得しない。

そのラインを昨晚から考えているが、彼女たちがどこまで感付いているかが今ひとつ掴めないため判断できずにいた。

（ポイントは姉ちゃんやな。）

志保と会っている蘭が、この数日間のことをどう考えているか。

それが鍵を握っている。

（まあ、会うてみなわからへんわな。）

あれこれ考えてみても、相手のカードがわからなければ対処しようがない。

そう結論付けたところで、車は目的地に到着した。

インターホンを押すと、中から聞こえてきたのは聞きなれない声。

そして、ドアが開いたかと思うと綺麗で聡明な女性が顔を覗かせた。

「あの……。」

平次が困惑していると、相手の女性は彼に笑顔を向ける。

「服部君ね。はじめまして。私、蘭の母で妃英理です。いつも蘭がお世話になっているそうです。」

（この人が、法曹界のクイーンか。）

「あ……はじめまして。服部平次です。こちらこそ、世話になってます。」

以前、蘭の母親のことを新一から苦手なタイプだと聞いた事があるが、それは理解できる。

平次も彼女から、なんとも言いようもない威圧感を感じていた。

「あの、毛利のおっさんは？」

「あの人は急に仕事が入ってしまって、私が代わりに蘭の様子を見に来たの。夕方には戻るって言ってたけど。」

「そうですか。」

小五郎の説得も必須事項である平次は、自分と親友の幼馴染みに気をとられ、彼が不在になる可能性を見落として

いたことを悔やんだ。

（しゃーないな。夕方、もう一遍来よか。）

諦めを込めたため息をついた平次に、英理が先程より表情を硬くして呼びかける。

「服部君。」

その先を言いかけて、彼女は口を噤んだ。

「なんですか？」

次の台詞は聞かない方がいいような雰囲気を感じながらも、平次は聞かずにはいられなかった。

彼に促されて、英理は迷った言葉を口にする。

「新一君って、元気にしてるのかしら？」

予想外の質問に驚き、一瞬目が泳いってしまったことを後悔しながらも、平次は平静を装って尋ね返す。

「何ですか？よう知りませんが、元気でやってるんじゃない

んですか？」

英理は黙って彼の顔を見つめた後、一言呟いた。

「そう。」

彼女は、それ以上は彼を追求しなかった。

そして、再び笑顔を見せると階段を指し示す。

「2人は、蘭の部屋にいるわ。どうぞ、上がって。」

「お邪魔させてもらいます。」

平次は英理の態度に少しホッとしながら、足早に3階への階段を上った。

「オレやけど。」

ノックと共に声を掛けた平次の前のドアが開き、姿を見せたのは和葉だった。

「どうぞ、入って。服部君。」

その奥から聞こえてきた声に従い部屋の中へ入って目にした蘭の姿に、覚悟していた平次でも驚かずにいられ

なかった。

一瞬呆然と彼女を見ていたが、すぐに意識を戻して声を掛ける。

「大丈夫なんか？」

「うん。心配掛けて、ほんとにごめんね。」

ベッドから上半身だけを起こして心苦しそうに微笑む蘭は、それでも志保と会った時よりマシになったのだろう。

予想以上に、彼女の表情が豊かであることに平次は安心するが、それ以上言葉が続かない。

重苦しい沈黙だけが蘭の部屋を流れていた。

それを破るかのようにドアを軽くたたく音と、その音の主である英理の声が聞こえた。

「蘭。入っていい？」

「う、うん！」

吃った蘭の返事で扉を開けた英理の手には、コーヒークップが3つとお茶菓子が載ったトレイ。

「どうぞ。」

そう言って、英理がベッドのそばにあるローテーブルにトレイ

の上のものを置くと、和葉と平次は自然とその前に腰を

下ろした。

そんな2人を英理は、申し訳なさそうな眼差しで見つめる。

「和葉さん、服部君。悪いんだけど、私も急な仕事が入ってしまって、急いで事務所に戻らなければならなかったの。」

あの人が帰って来るまでの間、蘭の事を2人に任せてもいいかしら？」

「お母さん。私、もう大丈夫よ。」

英理の言葉に最初に反応したのは蘭だった。

彼女の強がりとも取れる台詞に悲しそうな表情をした英理に向かって、和葉は力強く答える。

「心配せんとして下さい。あたしと平次でちゃんと蘭ちゃんのこと看ときます。」

「ありがとう、お願いね。」

幾分かホッとした様子を見せた英理は2人に頭を下げた後、蘭に視線を移す。

「蘭、無理しちゃだめよ。」

そう優しくいい残すと、彼女は蘭の部屋を後にした。

英理を目で見送った平次は、ひとり苦笑いを浮かべていた。

小五郎の不在もそうだが、英理の存在も彼にとっては誤算だった。

しかし、幸いなことに彼女はこの家を離れる。

（これで、この家にいるのは、ここにいる3人だけっちゅうことか。）

結果オーライともいえる状況に、自分の悪運が尽きていないことに感謝した。

そして、英理が階段を下りる音が聞こえなくなったと同時に口火を切ったのは、和葉だった。

「で、平次。話してくれるんやろ？」

彼女の言葉で、少し緩んでいた部屋の空気が堅くなる。

その変化を感じ取りつつ、どこから話そうかと平次が迷っていると、蘭がそれを遮った。

「和葉ちゃん。私に服部君と話させてもらってもいい？」

「え？」

彼女の申し出に憂慮の面持ちを見せた和葉は、蘭の眼差しから確固たる意志を見つける。

「これは、私と新一の問題だから。」

そう言うと、蘭は平次と目線を合わせ背筋を伸ばすと、少し震えた声で尋ねた。

「服部君。新一のこと何か知ってるよね？」

35. 東西女子高校生探偵の推理（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

ひと月に2回の投稿を久しぶりに出来て、ホッとしております。

もちろんこれに満足することなく、次話も早めにお届けできればと思います。

次回からはいよいよ平次vs蘭&和葉の戦い（？）です。

相変わらず苦手な3人以上の描写になりますが、頑張って執筆したいと思っています。

ご愛読お願い致します。

36. デッドライン

窓から見える空は、よく澄んで晴れ渡っている。

まさに、春を感じさせる陽気だ。

しかし、毛利探偵事務所の3階にある一室は、外界とは打って変わって重苦しい雰囲気に包まれていた。

平次の目の前には、真実に立ち向かおうとする果敢な女性達が、まっすぐ彼を見据えている。

そんな空気の中、彼はあまりにもストレートな質問に啞然としていた。

それ故に、駆け引きなしの勝負を挑まれた気がした。

（厄介なことになるかもしれんな。）

平次は、この先の展開の傾向と対策を考え始める。

そして、とりあえずその結論に至った経緯を聞くことが先決だと判断した。

「なんでや？」

彼の返答にあくまでしらばっくれるつもりなのだと思った蘭は、少し口調を強める。

「じゃ、逆に聞くけど、服部君はどうして私が体調を崩したのと知ってたの？」

「それを知っとることと、工藤のことと何の関係があるんや？」

お互いに答えを言わず、質問を質問で返す攻防が続く。

次第に感情が顕わになっていく蘭は、1枚目のカードをきった。

「私が、3日前に会ったあの茶髪の綺麗な女の人から聞いたんじゃないの？」

彼女から初めて示された情報に平次の口の端が上がる。

（あのちっさい姉ちゃんのことやな。）

哀と蘭の会話の内容について、平次はここに来る前にひと通り確認していた。

哀の話を聞く限り、現状に結びつくような情報は何一つ語られていなかった。

それを、蘭はどう分析しているのか。

今日の説得のポイントとなる局面に差し掛かっていることを察知し、平次は意識を集中させる。

「彼女は、新一のことを知ってるって言ってた。そして、私に新一のことを待っててあげて欲しいって言ったの。」

そんな事を言うってことは、私と新一の間に起こったことを知ってるってことだね？私はある時、彼女に

初めて会ったんだから、それは新一から聞いたんだと思うの。

」

そこまで話した蘭は、自信がないのか少し不安そうな表情を見せたが、平次は無言のまま先を促す。

「私と彼女の唯一の接点が、新一なの。そして新一と服部君は、時々電話で話すくらい仲がいいんでしょ？だから、

服部君が彼女のことを知っても何の不思議もないよね？」

相変わらず無反応の平次に向かって、蘭は畳み掛けるように質問する。

「彼女から、私のこと聞いたんでしょ？それで、心配してくれて和葉ちゃんを東京に呼んでくれたんだよね？」

平次は彼女の推理を聞きながら、頭を高速回転させていた。

どう答えれば、彼女は納得するのか。

しかし、それは昨日から考え続けていた難問だ。

なかなか答えが出るものではなかった。

「ねえ、服部君。彼女と話してるってことは、新一とも連絡取ってるんでしょ？」

「平次、何とか言うたらどうなん？」

無言の平次に痺れを切らした和葉も、蘭の援護に加わる。

それでも黙然として話さない彼の態度に焦れて、蘭は必死に訴えかけた。

「服部君、お願い。新一は、どこにいるの？何をしようとしてるの？どんな些細なことでもいいの。知ってることが

あるなら、教えて！」

新一への気持ちをいつも意地を張っていた隠してきた蘭が、初めて見せた素直な態度。

彼女がどれだけ新一を想っているかが、平次にも直に伝わってくる。

「心配なの。あいつのことが。お願い……。」

瞳に涙を溜め声が掠れながら、蘭は平次に懇願する。

その彼女の横で、和葉は縋るような目で彼を見つめていた。

平次はそんな彼女達を無視できるほど、冷徹に徹しきることはできなかった。

（しゃーないな。）

彼は大きくため息をつく、口重に話し始める。

「まあ、当たらずとも遠からず・・・やな。」

平次からの初めての回答に、蘭はすかさず聞き返す。

「どういう意味？」

一旦間を置きデッドラインを決めた平次は、高揚している2人を落ち着かせるように説明する。

「確かに、姉ちゃんの体調のことを聞いたんは、あんたの言う茶髪の姉ちゃんからや。それは当たつとる。そやけど、

工藤がどこにいるんかは、オレは知らへんってことやな。」

「そんなの、嘘よ。」

やっと掴んだ手掛かりを簡単に諦めたくない蘭は、平次の言うことを鵜呑みにするわけにはいかなかった。

蘭に疑いを持った眼差しを向けられた平次は、厳しい声で彼女を諭す。

「あの、茶髪の姉ちゃんからも言われてるはずや。何も教えられへんって。それは、オレも同じや。」

（やっぱり、何か知ってるんだ。）

蘭の確証のない確信は、当たっていた。

それが、彼女のもう一つの不安の的中を予感させる。

「ってことは、新一が何をしようとしてるのかは、知ってるってことだね？」

「・・・そうやな。」

これが平次の決めたデットラインだった。

『新一がどこにいるかは知らないが、何をしようとしているかは一応知っている。が、それを言う事はできない。』

これ以上の事は話せないが、それでも新一がひとりではないことを知れば、蘭が安心するだろうと踏んだのだ。

「それって、新一がずっと言ってる『厄介な事件』ってやつ？」

「ああ。」

平次の返事を受けて、蘭は2枚目のカードをきる。

「FBIが関わるような、危険なことなんだよね？」

蘭は平次に対して、鎌を掛けていた。

普通に聞いたところで答えてなどもらえないのだから、知っている振りをしてみた方が効果が現れるかもしれないと

思っただ。

その思惑通り、彼女の言葉はさすがの平次をも驚かせた。

（こら、想像以上に気いついてんのももしれへんな。）

これ以上の追求を避けるべく、平次はここに来る前から心に決めていた彼女への誓いを提示する。

「なあ、姉ちゃん。約束するわ。工藤は必ずオレが連れて帰って来たる。そやから、何も言わんとあんたの事、オレ

に預からせてくれへんか？」

突然の話の方向転換と思わぬ彼の申し出に、蘭は目を丸くする。

「どういう意味？」

「春休みの間、大阪のオレの家に来て欲しいねん。」

「え？」

それでも、意味がわからないという顔をしている蘭に向かって、平次は真実を少しだけ明かした。

「工藤から頼まれてんねん。あんたの事。」

その言葉に、蘭の全てが一瞬止まった。

固まっている蘭へ向けて、平次は新一の想いを代弁する。

「工藤の頭ん中はな・・・ほんまにあんたの事しかないねん。
あんたが無事でいてるように、幸せでおれるように

そればかりや。」

（新一が、私のことを？）

彼が自分のことを心配してくれていた事実が、蘭を困惑を含んだ至福の光で包み込む。

「あんた、工藤を待つて決めてくれたんやろ？」

平次の言葉を受けた蘭は、感情の戻っていない顔で僅かに頷いた。

「それやったら、ただ待つだけではあかんねん。あんたは無傷で工藤を待つてなあかんねや。そやからオレに、

あんたの事任せて欲しいんや。それが、今の工藤の望みやし、あいつにとって一番の安心材料になるはずや。」

彼の話の内容が徐々に消化され始めた蘭は、垣間見えた彼の意図を尋ねる。

「ここにいと危ないってこと？」

彼女の勘の良さに苦笑しながらも、平次は首を横に振る。

「ちやうちやう。あんたの両親はそれなりに忙しゅうて、ずっとあんたと一緒にはおられへんやろ？オレん家

やったら、おかんが傍についてあんたの看病もできる。それに、一人で東京にいてるより和葉と一緒にあった

方が、あんたも気が楽なんじゃないか？」

平次の言い分に不満そうな表情を浮かべている蘭に、黙って事の成り行きを見ていた和葉が声を掛ける。

「蘭ちゃん、あたしも平次の意見に賛成や。今の蘭ちゃんを一人にしておけへんもん。蘭ちゃんが大阪にいてくれたら、

あたしも安心やし、そうしょ？」

「毛利のおっさんにはオレから話させてもらうし、オレの両親も了承済みやから、心配せんでええで。」

大阪の2人が蘭を説得しているにも関わらず、蘭は消化しきった彼の言葉からある予感を感じていた。

「服部君・・・新一から私のこと頼まれてるって言ったよね？」

不意に話が変わったことに驚きながらも平次が頷く。

「ああ。それが、どないかしたんか？」

「ってことは、服部君は新一が今抱えてる『厄介な事件』に、直接関わりがないんじゃない？」

蘭の言葉に嫌な展開になるであろうことを感じ取った平次は、

表情を険しくする。

「新一に協力してくれているだけで、服部君には本来は関係のない事件なんじゃないの？」

（ええ着眼点やな。伊達に工藤の幼馴染やっくらんって訳か。）

蘭の勘のよさに感心しながらも、この場合はあまり歓迎できる話ではない。

再び頭をフル回転させて策をめぐらすが、蘭の攻撃は休まる事をしらない。

「でも、服部君が新一を連れて帰ってきてくれるって言ったってことは、服部君も新一と一緒に危険なことをしようと

してるんじゃないの？」

「いや……。」

齒切れの悪い平次に、和葉も青い顔で問い詰めた。

「平次、そうなん？」

同じような顔をしている蘭もさらに平次を追求する。

「そんなこと、新一が了承してるの？」

痛いところをつかれた平次は息を飲んだ。

その様子で蘭は自分の予測が外れていないことを確信する。

「してないよね？ 新一がそんな事、服部君にさせる訳ないもん。私だって、いくら新一のためでも、服部君に危険と

わかってることさせられない。和葉ちゃんに私と同じ思いをさせるなんて……。」

蘭の言葉と平次の身に迫った危険が、和葉の思考を停止させる。

止まったままの和葉を置いて、蘭と平次の会話は進んでいく。

「服部君。そんな危ないまねしないで。お願いだから、和葉ちゃんのそばにいてあげて。」

必死に訴えかける蘭から視線を逸らすことなく、平次は首を横に振った。

「できひんな。」

「服部君！ どうして……。」

彼の返事に疑問を投げ掛けた蘭に対して、平次はきっぱりと自分の意志を伝える。

「あんたが和葉を思ってくれてるのと同じや。オレも工藤のこ
と、これ以上放っておかれへん。これ以上アイツが

苦しんでるとこ、見たないんや。」

平次から知らされた新一の胸中。

事件とあらば他の何をも置いて向かっていく彼のことだから、
今も意気揚々と事件に取り組んでいるのだと

思っていた。

彼の電話の声がときどき切なく聞こえるのは、自分を待たせて
いることに対する負い目なのだと思っていた。

思いも寄らない事実言葉に失う蘭の脳裏に、突然ある記憶が
蘇える。

米花センタービルの展望レストランで、コナン伝えに聞かされ
た彼の言葉。

『いつか、いつか必ず絶対に、死んでも戻ってくるから・・・』

』

（あれって、本当に言葉の通りの意味だったってこと？）

良く考えてみれば、彼の代わりにその言葉を言った少年も、や
るせない顔をしていた。

もし、それが新一の心境をそのままトレースしたものだだったと
したら。

（やっぱり新一は、すごく危険な事件に関わってるんだ。）

蘭が、答えを聞くまでもなく真実に辿りついてしまったことを知らない平次は、辛そうな表情のまま言葉を続ける。

「こんな事になったんは、工藤のせいやない。そやけど、そのせいでみんな苦しんでるやろ。そやから、ここで

終わりにせなあかんねん。」

そこまで言い終わると、平次は時を動かせずにいる和葉に視線を移した。

蘭が言いたいことは、十分わかっているつもりだ。

自分が新一に協力するということは、和葉のそばを離れなければならぬ。

彼女を不安にさせて、悲しませるかもしれない。

今の蘭と同じように。

それでも探偵として、男として、新一を一人で行かせるという選択肢を選ぶ事はできなかった。

それぞれの想いに身動きが取れなくなっている3人の耳に、携帯電話の着信音が響き渡った。

36. デッドライン（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

何とか投稿できました。

1ヶ月に3回投稿できたのは、何ヶ月ぶりでしょう・・・。

少しずつ更新速度を上げられているので、この調子で進められるように、

頑張っていきたいと思っています。

37. 無力（前書き）

後書きに、サンデー今週号の若干のネタバレ（と言える程でもないとは思いますが、念のため）があります。
ご注意ください。

37. 無力

突然鳴り響いた携帯電話の音に、3人の意識が集中する。

持ち主である平次は画面を見て顔をしかめると、無言で部屋から出て行った。

彼の様子を焦点の定まっていない瞳で追いかける和葉を見て、蘭は彼女の肩を掴んで訴えた。

「和葉ちゃん。お願い。服部君のこと止めて!」

見たことのない蘭の真剣な表情と掴まれた肩の強い痛み、和葉は息を詰める。

「私、和葉ちゃんには、後悔して欲しくないの。」

蘭はそう言うと、和葉からゆっくりと手を離し言葉を続ける。

「私ね、あの日からずっと後悔してる。あの日、トロピカルランドでどうして新一を止めなかったんだらうって。」

あの時、新一とこれっきり会えないような・・・そんな予感がしたのに、何も出来なかった。もし、新一を止めて

たら、こんな思いしなかったかもしれないのに。だから・・・」

目に涙を浮かべる蘭の縋るような願いを受け止めながらも、和葉は静かに首を横に振った。

「蘭ちゃん。あたしには、無理や。」

ハッキリと言い切った和葉に蘭は呆然とする。

「さっきの平次の目、いつも事件に向き合うるときよりも真剣で・・・辛そうやった。あんな顔の平次は、見た

ことないねん。そやからきつと、あたしには止められへん。」

言葉を失ったままの蘭に和葉は諦めにも似た笑みを浮かべる。

「それにな、あたしも平次と同じやねん。これ以上、蘭ちゃんの辛そうなところ、見たくないねん。」

「和葉ちゃん!」

「あたしは大丈夫や。やって、蘭ちゃんがいてるんやもん。一緒に大事な人の帰りを待ってる友達がいてるんやもん。」

和葉の無理に作った笑顔が切なくて、蘭の瞳からぽろぽろと涙が零れ落ちた。

「ダメよ・・・和葉ちゃん。お願い・・・。」

泣きじゃくる蘭を和葉はそおと抱きしめる。

温かいぬくもりが更に、蘭の涙を溢れさせた。

自分と同じ想いを彼女にさせたくないという強い気持ちがあるのに、どうすれば止められるのかわからない。

蘭が、泣く事以外できない不甲斐ない自分に怒りを感じていると、電話を終えた平次が部屋へ戻ってきた。

自分がいない間に変わってしまった状況に困惑している平次をしっかりと見据え、和葉は決意を口にする。

「行ってきた。平次。」

「和葉ちゃん！」

意外な彼女の台詞に、何が起こったのかわからず茫然とする平次。

蘭は、和葉を止めようと大きな声を上げた。

和葉は、2人にかまわず言葉を続ける。

「行って、工藤君助けてきて。ほんで、蘭ちゃんに会わせただけ。」

「かず・・・は。」

「東西高校生探偵が揃い踏みやねんから、解決できひん事件なんてないやろ？」

涙を滲ませながら笑顔を向ける彼女に応えるように、平次は強い覚悟をみせた。

「ああ。必ず、工藤は連れて帰ってきたる！」

平次の力強い言葉に和葉は大きく頷く。

「待って！服部君！」

尚も、彼を止めようとする蘭の言葉を遮ったのは和葉だった。

「蘭ちゃん。ほんまに大丈夫やから。」

有無を言わさない気迫のある和葉に、蘭はそれ以上何も言えなくなっていた。

「ほな、また夕方寄らせてもらうわ。」

そう言って、平次は毛利家を後にした。

先程の電話の相手はジョディ。

急遽、作戦の練り直しが必要となり、本部へ戻ってきて欲しいという内容だった。

蘭は平次が去ってから和葉の説得が続けていたが、昨日の夜更かしと精神的な疲れからめまいを起こして

今はベッドに横になることを余儀なくされている。

和葉は、意識を手放している彼女に付き添いながら先程までのことを考えていた。

（もしあたしが彼女やったら、行かんといてとか言えるんやろうけどな。）

本当は、危険なことなどして欲しくない。

自分のそばにいて欲しい。

でも、彼にとってただの幼馴染である自分にそんなことを言う権利などない。

彼の決断の邪魔などできるはずがない。

それに、蘭をこれ以上見ていられないのも本心だった。

和葉は混在する気持ちをなんとか押さえ込んで、これ以外に道がないことを納得しようと努力してみるが、

帰ってこなかったら・・・そう考えただけで、体が震えてくる。

「これで、よかったんや。」

何度目になるかわからないこの言葉を呟くと、和葉の瞳から一

筋の涙が頬を伝っていた。

日がすっかり傾き、あたりをオレンジに染める頃、平次は再び毛利探偵事務所の前にいた。

重い足取りで階段を上りながら、つい数時間前の和葉が平次の頭を過ぎる。

本部での会議中も、和葉の表情が言葉が何度も平次の頭を支配して、なかなか集中できなかった。

（なんやねん！）

意識がまた別のところへ飛んでいってしまいそうになるのを阻止するかのよう、ためらいなくインターホンを

鳴らすと目当ての人物が顔を覗かせた。

「大阪の色黒ボーズか。」

「ちょっと、時間もろてもええですか？」

いつもよりも丁寧な口調になってしまうのは、後ろにある状況のせいだろう。

小五郎は少し眉間に皺を寄せたが、すぐに彼を中へ招き入れた。

平次が事務所に入ると、小五郎以外の人の気配がないことに気付く。

「和葉らは？」

「寝てんじゃないか？オレもついさっき帰ってきたところなんだが、上に声を掛けても返事がなかったからな。」

一瞬、平次の背筋に悪寒が走った。

（まさか・・・。）

「ちょっと、様子見てくるわ。」

そう言って平次は事務所を飛び出し、段飛ばしで階段を駆け上がる。

今日2度目になる部屋の前で深呼吸をして気持ちを落ち着かせた後、扉にむかって声を掛けた。

「和葉。姉ちゃん。」

しかし、返事は聞こえてこない。

さっき、想像してしまった最悪の映像が再びよみがえった平次は、勢い良く扉を開けた。

彼の目に飛び込んできたのは、ベッドに横たわる蘭とそのベッ

ドに寄りかかり腕を枕にして寝ている和葉。

彼女達の寝息から自分の心配が取り越し苦勞だったことが証明された平次は、大きくため息をついた。

「心配させよって。」

思わず口に出してしまっただが、2人はそれに気付くことなく熟睡している。

自然と和葉に足が向いて彼女のそばにしゃがんだ平次は、思いがけないものを目にし驚いた。

それは、彼女が流した涙の跡。

僅かに残るその雫を彼は、そっと親指の腹で拭い去る。

そして、その意味を考えた。

その時、突然聞こえてきた言葉。

「行かんといて・・・へ・・・じ・・・。」

驚いて彼女の様子を伺うが、瞼は閉じられたままだ。

「なんや。寝言か。」

平次は一旦安堵するも、その言葉によって彼女の涙の訳を知り絶句する。

知ってしまった彼女の気持ち。

先程彼女が言ってくれた言葉は、強がって自分のことを想ってのものだったのだと身に染みて理解する。

本当は、最初から気がついていた。

でも、平次は知らない振りをしていたただただ、躊躇せず前に進むために。

「すまん。和葉。」

それでも、どんなに大切な人がそう願っていても、自分には行かなければならない。

平次は届かない謝罪を残し、そばにあったブランケットを彼女に掛けた後、部屋を出て行った。

モヤモヤとした感情を抱えて階段を下りた先に、渋い顔をして煙草を啜える小五郎の姿が目に入った。

平次が戻ってきた事を背中で感じ取った小五郎は、煙草の火を消し平次に視線を向ける。

平次も彼と視線を合わせると、用意してきた言葉を並べ始めた。

蘭の体調のことを考えて、気分転換に春休み中大阪で預からせて欲しい旨を話す。

先刻、蘭に話した理由をそのまま使って。

小五郎は最初は少し渋っていたが、和葉が来たことで蘭の表情がいくぶんか明るくなったこともあり、大阪行きを

認めてくれた。

そして平次は、明日午前中に迎えに来ることを2人に伝えて欲しいと言い残し、事務所を出て行こうとした時

小五郎に突然呼び止められた。

「探偵ボーズは・・・新一は、どうしてるんだ？」

その質問に、平次は小さくため息をついた。

（夫婦そろってからに。やっぱり親ちゅうもんは厄介やな。）

これから事情を説明しなければならぬ自分の両親への説得もかなり手を焼く事が予想できている平次は、今日の

昼間英理にも同じ質問をされたことを思い出し苦笑いを浮かべる。

しかし、同じ答えを返す以外に術はなかった。

「元気なんでしょうか？よう知らんけど。なんも連絡ないし、

便りのないんが元気の知らせ言うやろ？」

小五郎は答えた平次の顔をじっと見つめていたが、目を逸らし煙草を手にながら一言呟いた。

「そうか。」

平次はこれで誤魔化せたのかどうかは読み取れなかったが、これ以上の長居は無用とばかりに明日のことを念押し

し、事務所を後にした。

帰り道の車窓から見える風景は薄暗く、靄がかかったように見えにくくなっている。

まるで、平次の気持ちをそのまま映し出しているかのように。

阿笠邸に着いた時には、太陽の姿は確認できなくなっていた。

チャイムすら鳴らさず玄関を開けた平次を、待ち構えていた哀が出迎える。

「おかえりなさい。どうだった？」

彼女には、毛利家へ行く事も明日大阪へ帰ることも伝えていた。

「ああ。予定通りや。」

平次は短く答えると、靴を脱いでリビングへ向かう。

「そう・・・で、蘭さんの様子は？」

彼の後について歩きながら、哀は一番気になっていたことを彼に尋ねた。

「あんたから聞いてたよりは、元気そうやったで。大分、よくなってるみたいや。」

彼の返事になぜか違和感を覚えた哀。

「何かあったの？」

「いや。」

彼はそれ以上何も言わず、自室へと戻っていった。

一人取り残された哀は、彼が上って行った階段をぼんやりと眺める。

哀は蘭のことも気になっていたが、同様に彼の幼馴染のことも案じていた。

彼の様子から察するに、彼女との間に何かがあったのだろう。

（やっぱり、彼にも辛い思いさせてるのよね。）

彼に助けを求めた時から、こうなる事は分かっていたはずなのに、結局成す術のない自分を思い知った

哀は唇を噛み締めた。

37. 無力（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

今回は、サブタイトルでかなり悩みました。

珍しく場面転換が多かったので、どれに絞ろうかと迷いに迷い、結局このタイトルに

なったのですが、いかがでしょう？

一応、蘭の和葉に対する、和葉の平次に対する、平次の和葉に対する、哀のみんなに

対する「無力」という意味に捉えていただければと思います。

さて、今回文章中に「東西名探偵揃い踏み」という言葉があります
が、偶然にもサンデー

本誌でそれが実現していますね♪

それは非常に嬉しいのですが、今回の話で何か進展があったら、小説の今後の展開を

どうしようかと困惑している今日この頃です。

38. 為すべきこと

翌朝、平次の気分は最悪だった。

夕べは早めに自室に戻ったものの、何もする気になれず布団に逃げ込んだ。

目を閉じれば浮かんでくる彼女の涙。

何度振り切ろうとしても叶わず、気がつくとも部屋が明るくなり始めていた。

平次は、あまり休められなかった体をなんとか起き上がらせ時計をみると、目覚ましをセットした時間よりも30分ほど

早い時間を針が指し示している。

それでも、予定の時間まで二度寝することは難しいと感じた平次は手早く準備を済ませると、帰省のための荷物を

詰めたスポーツバックを持ってリビングへ下りた。

リビングのソファアでは哀がコーヒーを片手に新聞を読んでいて、それ以外の人物は見当たらない。

彼の姿を確認した哀は、何も言わずに席を立ちマグカップを携えて戻ってくると、それを彼の前に置いた。

平次は一旦時計をみて時間に余裕があることを確認すると、出

されたコーヒーを無言のまま喉に通す。

5分ほどかけて飲み干すと、彼は空になったカップをテーブルに置き玄関へと向かった。

そして、彼女から自分の姿が見えなくなる寸前、平次は一言残す。

「ほな、行ってくるわ。」

その言葉を聞いた哀は、読んでいる新聞から顔を上げずに一言返した。

「気をつけて。」

彼女の返事に小さく笑みを零した平次は、阿笠邸の前で待機していたFBIの車で毛利探偵事務所へ向かった。

小五郎と軽く言葉を交わし、用意を済ませた蘭と和葉を車に乗せると、そのまま東京駅へと移動する。

予定していた新幹線に乗車した3人は、FBIが用意したグリーン車の個室で一息ついた。

2時間半の道中、彼らの間に会話はほとんどなく、窓を過ぎる景色だけがただ流れていた。

そして、3人はお昼を過ぎる頃滞りなく服部邸へと到着した。

彼らの帰宅を心配そうな顔で出迎えたのは、静華だった。

「おかえり。」

「いろいろすまんかったな、オカン。」

開口一番、素直に謝った息子を静華は目で許しながら、すぐにそばにいた蘭に声を掛ける。

「毛利さん。大丈夫なんか？」

久しぶりに外に出たことと長時間に渡る移動が重なり、蘭の顔色はかなり悪くなっていた。

「大丈夫です。すみません。お世話になります。」

「気にせんでええのよ。ここでゆっくり休んで、早く元気にならなね。」

平次の両親に迷惑を掛けてしまうことを気に病んでいる蘭の胸中を察してか、静華は優しく微笑みかける。

「和葉ちゃんも毛利さんがここにいる間は、一緒にお泊りしたら？」

突然、他人の家に泊まる事になった蘭を気遣った静華からの提案。

それは表向きのこと、本当は平次から和葉の面倒も頼まれていたのだ。

しかし、運良く和葉も同じ事を考えていた。

「うん。そうさせてもろてもええ？」

「もちろんや。そのほうが、おばちゃんも嬉しいし。」

「ほな、必要なもの取ってこな。」

「ほんなら、オレもついてったるわ。」

3人の会話を黙って聞いていた平次が、和葉の付き添いを買って出る。

もちろん、ひとりで和葉を出歩かせないためだ。

「ええよ、平次。すぐそこやし。」

「ええから、言う事聞け。」

和葉は彼と2人きりになることに抵抗があったのだが、自分の言い分などまるで無視の平次の言い草に仕方なく

従うことにした。

会話が一段落ついたところで、静華が平次へこの家の主からの伝言を伝える。

「そうや、平次。あの人が大阪着いたら府警に寄るように言うてたで。」

「わかった。」

真剣な表情で頷いた平次の目がわずかに揺れていたことを、和葉は見逃さなかった。

蘭を客間に寝かせた後、平次と和葉は彼女の家までの道を歩いていた。

お互いに言いたいことがあるのは、なんとなく感じている。

でも、いざ口に出来るかというとそれが難しい。

なぜなら、心の中に相反する気持ちが混在しているから。

この心境をどう相手に説明したらいいのか、わからないのだ。

考えているうちに和葉の家に着いてしまっていた。

「オレ、玄関で待ってるわ。」

平次にそう言われ、和葉は一人自室へとむかう。

2週間分の洋服などをカバンに詰め込みながら、自分の気持ち

を持て余したため息をついた。

憂鬱な気持ちも一緒に詰められたカバンを手に和葉が玄関へ戻ると、平次は何も言わず彼女の手からカバンを取り、

来た道に戻っていく。

彼の一步後ろを歩く和葉は、この背中が遠くに行ってしまうことに恐怖を感じ、それを彼に悟られまいと顔を上げら

れず俯いている。

平次もまた、彼女の辛そうな表情に気付いているのに、彼女の言葉を聞く勇気もなくどうする事も出来ないでいた。

平次は和葉を自分の家へ送り届けた後、そのままバイクで府警本部へ向かった。

いつもなら刑事部へまっすぐ進むのだが、今日の目的地はそこではない。

普段使わないエレベーターに乗り、最上階のボタンを押した。

誰もいない密閉された空間の中で、平次は壁にもたれ掛かり深いため息をつく。

これから会う人物は、一筋縄ではいかないキレ者だ。

自分にとって、幼馴染の彼女とは違った意味での、この世で一番厄介な人物。

昨日の小五郎とのことでさえ彼を納得させられているとは思えないのに、これから起こることも適切に対処できるか

自信はない。

（それでも、やらなあかんしな。）

決意を新たにしたところで、エレベーターの扉が開いた。

他のフロアとは違い絨毯張りの廊下を進み、突き当たりの部屋が決戦の場。

平次は大きく深呼吸をした後、ノックをした。

「はい。」

低い聞きなれた声を確認すると、ドアを開ける。

そこには、最強のボスが待ち構えていた。

一方、服部家にもどった和葉は、この2週間蘭の部屋となる客

間を訪れていた。

「蘭ちゃん。」

小さく呼びかけて襖を開けると、横になっていた彼女は目を開けて和葉を捕える。

「和葉ちゃん、ごめんね。迷惑掛けて。」

「そんな気にせんときよ。蘭ちゃん、昨日から謝ってばっかりやで。」

そう言って和葉は部屋の中に入ると、蘭の布団の横に正座する。

「服部君は？」

「府警行ったよ。」

「そう。それで、服部君と何か話した？」

蘭は、昨日から和葉が悩んでいる事に気付いていた。

言葉では強がっていても、和葉がどれだけ不安に思っているかわかっていた。

そして、平次が行ってしまう前に、2人が向き合う必要があるという事も。

昨日話を聞いてから、平次と和葉が2人つきりになる機会はなかったが、先程和葉の家についていくと言った平次に

そこで彼は彼女と話すつもりなのだと言は考えていたのだ。

「別に……。」

蘭の言わんとすることがわかったのか、和葉は首を振ってため息をつく。

期待が裏切られた蘭は、少し困った顔をしながら和葉に問い掛ける。

「ねえ、和葉ちゃん。本当にいいの？このまま、服部君が行ってしまったって後悔しない？」

俯いてしまった和葉の手をそっと握った蘭は、繋いだ手から自分の気持ちを伝えようと言葉で補足する。

「言葉にしなきゃ、伝わらないことはたくさんあるんだよ。」

蘭だから、説得力のある言葉だった。

「明日には、服部君、東京へ行っちゃうんだよ。」

さらに、期限が迫っている現実を突きつけられた和葉は、軽く頷くと顔を上げて答えた。

「そうやね。平次が帰ってきたら、ちゃんと話してみる。」

和葉の決断に満足そうに蘭は微笑む。

その笑顔につられて、和葉も自然と笑顔を浮かべていた。

「喉乾かへん？なんか持ってこよか？」

少し気分の吹っ切れた和葉の気遣いに首を振った蘭は、大阪に来ると決まってからずっと考えていた事を口にした。

「和葉ちゃん。お願いがあるの。」

ところ変わって、大阪の一等地に立つ巨大な建物の最上階の一室。

いつも以上に不機嫌そうな様子のボスが、先に口を開いた。

「無事、着いたようやな。」

「ああ。迷惑かけて、すまんかった。」

「で？」

その目は犯罪者を黙らせ威圧し、さらに悪事を喋らせる力を持っているという。

その功績が、彼の現在の地位に反映されている。

そして今、隠し事をしている自分も犯罪者と言えるのだろうか。

父親のものであるはずのその目に、平次は恐怖にも似た感覚を覚えた。

「で？って何やねん・・・。」

自然と平次の声は小さくなる。

「言わなあかんことがあるんやないか？」

大阪を出てくる時、おおよそ話した内容では納得していないと目の前の人物は暗に言ってきた。

だが、事情を説明せずに説得しなければならぬから、和葉たちにも辛い思いをさせているのだ。

元々、軽い空気を持ち合わせていない部屋がさらに重くなっていく。

平次は意を決し、切り札として用意していた言葉を口にした。

「オトン。何も言わんと、協力してくれへんか？」

彼の言葉に、平蔵の目つきが鋭いものへと変わる。

それに気付いた平次は一瞬怯みそうになるが、伊達にこの父親と17年付き合ってきた訳ではない。

平次は臆することなく本心をぶつける。

「どうしても、工藤を助けたいんや。でも、相手はかなりヤバイ奴らや。和葉らもオトンらも巻き込みたくないねん。」

だから、何も聞かんとあいつらの事守ってやって欲しいんや。

「

このボスは、建前やその場しのぎの言葉が通じる相手ではない。

正攻法しか方法がないことを平次が一番よくわかっている。

何も話せないのであれば、想いをわかってもらうほかないのだ。

まっすぐに自らの気持ちを吐露した息子の目を、平蔵は黙って見据えていた。

そこから、真実を読み取るように。

「勝算はあるんか？」

「ああ。FBIが特別チーム組んでるからな。」

FBIという言葉に、さすがの平蔵も反応を示す。

アメリカの特殊機関が日本で活動を余儀なくされるほどの相手に、いくら世間で『高校生探偵』ともてはやされて

いても、手に負える範疇を超えているのだろうと察しがつく。

もちろん、ダメだと上から押さえつけることもできるだろう。

でも、こうまでして自分を説得しにきた今の息子は、絶対に納得しないであろうこともわかっていた。

（仕方ないような。）

息子を信じる方へ賭けることに決めた平蔵は、全ての言葉を呑み込んで呟いた。

「わかった。」

思いの外あっさりと父親の了承を得た平次は、面を食らいつつもその懐の深さに感謝し頭を下げた。

そして、そのまま来た道を戻ろうとドアノブに手を掛けた時、声が聞こえた。

「帰ってこれるんやな？」

最終確認とも取れる言葉に、平次は父親を振り返らずに答える。

「必ず、帰ってくる。」

彼は、約束を残して本部長室を後にした。

ドアを閉めた後、安心からか平次は自分の体から力が抜けていくのを感じた。

『本部長の息子』と言われるのが嫌で、自分の力で事件を解決しているのだと誇示したくて、父親に反発していた

こともあった。

それでも、やっぱりこの父親には敵わない。

平次は、平蔵が言いたい事を押さえ込んで自分を信じてくれたことにもう一度謝意を表し、ドアに向かって頭を下げた。

38. 為すべきこと（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

今回は大阪が舞台ということで、服部夫妻が登場です。

調査不足で、静華さんが蘭の事をなんて呼んでいるのかも、大阪府警の最上階に本部長室が

本当にあるのかもわからず、完全に想像で書いております。

もし、何か情報がありましたら、お知らせ下さい。

さて、次回からは平和要素が強くなります。

原作では相変わらずな2人ですが、少しでもお互いの想いが近づくような展開を考えています。

今後とも、ご愛読お願い致します。

39. 後悔しないために

「ただいま。」

平次が寝屋川の自宅に戻ってきたのは、21時を廻った頃だった。

あの後、いつものクセで立ち寄った刑事課で事件の一報を受け、気分転換とばかりにそのまま現場へ直行。

解決して帰ってきたら、こんな時間になってしまっていた。

「おかえり、平次。」

出迎えたのは、母親ではなく和葉だった。

「オカンは？」

「府警に用事ある言うて、出掛けたよ。」

答えた和葉の顔は心なしか緊張しているようだったが、平次は気付かないフリをしてそのままリビングで遅めの夕食を取った。

和葉は、何も言わずただ平次の食事に付き合っていた。

そして、彼が食べ終えた食器を片付けると、彼女はそのまま客間へ消えていった。

和葉の背中を見送った平次は、階段を上がり行き着いた先のドアを開ける。

1週間ぶりの自分の部屋は、なんだか居心地が悪い気がした。

あんなにも平穏だった毎日とはかけ離れたところにいる今の自分の心が、そう思わせているのかもしれない。

部屋に入ると、電気もつけずにベットのそばに腰を下ろす。

そして、昨日の彼女の涙を思い出した。

『行かんという・・・へ・・・じ・・・』

彼女の言葉が耳から離れない。

起きていた彼女は、自分に『行ってこい』と言った。

でも夢の中の彼女は、『行かないでくれ』と泣いていた。

どちらが本心かは、確かめるまでもない。

「くそ・・・っ。」

漏れた声は暗闇に溶けていく。

（工藤は、こんな想いを1年も抱えとったちゅうことか。）

わかっていたつもりだが、全く理解できていなかった。

自分に降りかかってきて、本当に実感した。

これほどまでに、彼女を待たせることの、泣かせる事の辛さを。

平次は、自然と携帯電話を手に使っていた。

『はい。』

繋がった相手は、相変わらず塞ぎこんでいるようだった。

「なんちゅう声だしてんねん。」

『服部か。無事着いたんだな。』

着信の相手も確認せずに電話に出た様子のコナンは、相手が平次であると知るとさらに声のトーンを低くする。

平次はコナンに何も言わず大阪へ出掛けていたが、今回の大阪行きは全てFBIの協力の下で行われているため、コナンは事情を

ジョディから聞いていた。

「なあ、工藤。オレ、わかってへんかったわ。」

突然の不可解な彼の発言に、コナンは驚いて問い返す。

『どうしたんだ？服部。』

「いや。ただ、今のお前と同じ心境ちゅうことや。」

彼の言葉から和葉と何かあったのだと悟ったコナンは、何度となく彼に言ってきた言葉を口にする。

『・・・だから、言ったじゃねーか。オメーはそのまま大阪に残れ。』

今までとは違った感覚でその言葉を聞いた平次だったが、やはりそれを受け入れる訳にはいかなかった。

「それは、できひんな。」

『何だよ。オレの言ってる事、わかったんだろ？オメーはそのまま、蘭と彼女を守ってくれてれば良いんだよ。』

今なら彼を説得できるかもしれないと思ったコナンの思惑を察したかのように、携帯電話から平次の苦笑が漏れる。

「正直なところ、一瞬それも考えてもうたんや。和葉を泣かすくらいやったらってな。そやけど、やっぱりそれはできひん

ねん。このままお前を一人で行かせたら、オレは一生後悔するからな。」

『帰って来れずに、彼女を泣かせる事になってもかよ。そのほうが、よっぽど後悔するんじゃないのか？』

「それは精一杯やった結果やから、受け入れるしかあらへん。まあ、そんなつもりもないけどな。何もせんと指くわえて

待っとなるなんて、性に合ってへんねん。お前のためやない。自分のために行くんや。」

自分の辛さを知って尚、決意の変わらない平次の言葉に、説得しようとしていたはずのコナンの気持ち揺らいだ。

『・・・本当に、いいのか？』

「ああ。オレとお前がいてんねん。解決できひんことなんて、この世にないやろ？」

昨日、平次が和葉に言われた言葉。

今の自分は、それを信じるしかない。

『サンキュ』

かろうじて聞こえる声だったが、確かに平次の耳に届いた。

コナンが、平次を受け入れた証だった。

「明日、東京へ戻ったら直接本部へ行くわ。」

『ああ。わかった。』

そう言って、平次は電話を切った。

自分のなかでもモヤモヤしていたものが、晴れた気分だった。

迷っていた気持ちも口に出してみると、決意に変わる。

しかし、その扉の外で遣り切れない思いを抱えて涙している人がいることを平次は知らなかった。

盗み聞きするつもりはなかった。

彼が夕食を食べている間、何度も話しかけようとしたがどうしても声が出なかった。

結局、何も出来ずに部屋へ戻る事になってしまった。

戻った部屋で蘭の言葉を思い出し、このままではいけないと思った。

だから、少しでも素直になろうと思ったただけなのだ。

このまま、何も話さずに彼を行かせてしまえば後悔するから。

勇気を出して、部屋へ戻った彼を追いかけた。

そして、聞いてしまった彼の言葉。

彼が自分の涙を知っていた。

自分の気持ちに気付いていた。

それでも、行くと行った彼を自分にどうにかする権利なんてない。

『後悔したくない。』

今の平次の全てを表しているこの言葉が、和葉に重くのしかかる。

いつだって、彼はその状況下で最善の手段を選んできた。

だから、西の高校生探偵と称され、誰からも信頼されているのだ。

そんな彼だから、自分は好きになったのだ。

（やっぱり、あたしには止められへんね。）

和葉は平次の部屋のドアにもたれかかりながら、静かに流れ落ちる涙を止める術を見つけられなかった。

翌朝、まだ生活音が聞こえてこない早い時間、なんとなく眠れずとうとうとしていた蘭の耳に、小さい声が聞こえた。

「蘭ちゃん。起きとる？」

「和葉ちゃん？ うん。起きてるよ。」

体を起こして和葉を出迎えた蘭は、明らかに泣きはらした目の彼女を見て問いたです。

「どうしたの？ 和葉ちゃん。服部君と何かあったの？」

しばらく俯いていた和葉は、顔を上げずに話し出した。

「蘭ちゃん。あたし……。」

蘭には隠れて見えないが、明らかに涙声の和葉は恐らく泣くのを必死に堪えているのだろう。

まずは、状況を聞くことが先決と判断した蘭は、和葉に話の先を促す。

「服部君は、なんて？」

「ちやうねん。話も出来ひんかってん。」

「えっ……どうして？」

蘭の問いかけに和葉は、再び口を噤んでしまう。

これ以上話せば、決壊寸前の瞳から涙が零れ落ちてしまうそう
で。

でも、和葉はどうしようもできないこの気持ちを吐き出してしまいたかった。

「平次にばれとったんや、あたしの気持ち。行って欲しくないって気持ち。それでも、平次は行くって言うとった。後悔したく

ないって。そこまで覚悟決めてる平次を止める権利なんて、ただの幼馴染のあたしにはないねん。」

「和葉ちゃん。」

「でも、笑顔で送り出すんもできなくて、今日行ってしまうのに、会うんが怖くて・・・どうしようもないね、あたし。」

搾り出すように話す声でそう言って、嘲笑を浮かべる和葉は今にも消え入りそうな雰囲気だった。

蘭は、思わず和葉を抱きしめる。

「このままじゃ、和葉ちゃん絶対後悔するよ。」

「うん。わかってる。それでも、泣き顔だけは見せたないねん。」

「

どこまでも、平次のことを想って行動している和葉。

自分が泣く事で、彼に罪悪感を持たせたくないのだと悟った蘭は、抱きしめている腕を強めた。

彼女の気持ちをわかっていると伝えたかった。

蘭の胸の中の暖かさに、和葉の瞳から堪えていた涙が零れ落ちる。

「しばらく・・・このままでもいいさせてな。」

彼女に笑顔を取り戻せるのは、ただ一人。

それが、自分にとって新一だけであつたように、彼女にとっても平次だけなのだ。

（なんとかしなくちゃ。）

蘭は脳裏に浮かんだ考えを実行に移すべく、作戦を練り始めた。

39. 後悔しないために (後書き)

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回は早めに投稿できて、ホッとしております。

さて主役のコナンが、7話ぶりにしてやっと登場です。

最近、平次ばかり書いているので、主人公が誰なのかわからなくなっている気が

しないでもないのですが・・・。

そろそろコナンに活躍して頂くべく、執筆しておりますので、今後ともご愛読

お願いいたします。

40. 誓い

平次もまた、さして眠れないまま朝を迎えていた。

決意が固まっても、やはり和葉のことが気になって仕方がない。

このままでいいのかと何度も自問自答しているうちに、時間だけが過ぎていた。

ベッドから起き上がりカーテンを開けて見えた空は、灰色の厚い雲に覆われている。

気分も更に重くなってしまったことを自覚してため息をつく、平次は部屋着のまま自室を出た。

あまり活動していない頭を起こすように、首を回しながら階段を下りる。

居間の横にある台所で、静華が朝食の準備をしていた。

「おはよう。平次。」

顔を向けず気配だけで言葉を掛けた静華を見て、平次は大事な事が抜け落ちていたことに今更ながら気付いた。

昨日、平次が帰宅した時には静華の姿は見当たらなかったため、現状についてもこれからのことについても何の説明も

できていない。

和葉のことばかり考えていて、母親のことをすっかり忘れていた平次に焦りが押し寄せてくる。

「オカン、あんな・・・。」

言いにくそうに口を開いた平次の言葉を、静華はお味噌汁の味噌を溶きながら遮った。

「昨日、あの人から聞いたで。あの人が許したんやったら、私から言うことはありません。」

昨夜、静華が府警に行っていた理由がそれだった。

自宅では和葉や蘭がいるため、満足な話が出来ないであろうと考えた平蔵が、静華を府警に呼び寄せたのだ。

予想外の台詞に言葉が出なくなっている息子の顔を、静華はゆっくりと振り返って見つめる。

「和葉ちゃんらの事は、心配せんでええ。そやから・・・。」

そこで言葉を詰まらせた静華は、再び鍋へと向き直って小さく息をつくと最後の言葉を口にする。

「ちゃんと、帰ってきなさい。」

本当は、父親以上に心配を掛けているはずだ。

それでも、背中を押してくれた母親へ感謝の言葉の代わりに平

次は決意で返した。

「おう。わかってる。」

そして、いつものようにテーブルにつくと、しばらく食べられなくなるかもしれない静華の朝食に舌鼓を打った。

「姉ちゃん、ええか？」

「うん。どうぞ。」

出発30分前、平次は蘭のいる客間に声を掛けた。

彼女の返事を受けて襖を開けると、パジャマ姿の蘭が上半身を起こして出迎えた。

「行くの？」

「ああ。」

彼女の問いに答えた後、平次は蘭の布団のそばに腰を下ろす。

「心配せんと、ちゅうても無理なんやろうけど、それでもしっ
かり養生せなあかんで。」

「うん。」

「そしたら、行くわ。」

短い会話を終えて立ち上がろうとした平次を蘭が呼び止める。

「服部君、お願いがあるんだけど。」

「は？なんや。」

平次が再び座ったのを見ると、蘭はおもむろに枕のそばに置いてあった封筒を差し出した。

「何や？」

「もし・・・もし新一に会えたら、これを渡して欲しいの。」

彼女の不意をつく申し出に驚いた平次は、蘭に話している設定上新一と会っているわけではないことを思い出し、それに

合わせた言葉を返す。

「会えたらって、会われへんかもしれへんねんで。」

「それでもいいの。それでもいいから、これ持っていてくれないかな。」

控えめな言い回しでありながらも、決して引き下がるつもりのない強い意思を彼女から感じ取った平次は、再度念押しする。

「渡されへんでもええねんな？」

彼の言葉が自分の願いを聞き入れてくれる前提のものだと察した蘭は、笑顔で頷いた。

それを確認した平次は、目の前の白い封筒を受け取りジャケットの左の内ポケットに仕舞い込む。

「一応、預かってくわ。」

「それと、もうひとつ。」

終了すると思っていた会話がまだ続くことを知った平次の声のトーンが少し下がった。

「まだあんのかいな。」

「昨日、和葉ちゃんと何にも話ししてないんだってね。」

触れられたくない話題を振ってきた蘭に心の中で舌打ちした平次は、黙ったまま何も答えない。

「このままでいいの?」

「何がや?」

苛立った声で答えた平次に、彼女は追い討ちを掛ける。

「だから、このまま離れ離れになってもいいの?」

彼は、ずっとその事について考えていた。

そして、その答えも出ていた、このままではいけないと。

しかし、どうすればいいのかわからない。

彼女と話をしたところで、自分の考えも彼女に心配を掛けてしまいうことも、何も変えられないのだから。

そんな彼の苦悩を知ってか知らずか、蘭は平次に和葉の気持ちを代弁する。

「和葉ちゃんが今、どんな気持ちでいるかわかってる？昨日、和葉ちゃんは何か言おうとしてたの、気付いてたんでしょ？」

今日だって、服部君に顔見せてないよね？それがどうしてなのか、本当はわかってるんじゃないの？だったら、このままで

いいなんて事ないはずよ。」

捲くし立てるような彼女の言葉を聞いても、平次からの反応はない。

蘭は大きく息を吐き出して昂る感情を落ち着かせると、静かに語りかけた。

「私がここまで新一のこと待てたのは、アイツの『待っててくれ』って言葉があったから。だから、それを支えに頑張って

これだ。それは、和葉ちゃんにだって必要なはずなの。服部君が帰ってくる場所は、和葉ちゃんのところでしょ？だから、

和葉ちゃんにもそのことを伝えてあげて。」

自分の気持ちを全て見透しているような蘭の発言に、平次の顔がわずかに紅く染まっていたが、それに気付かない彼女は

さらに説得を続ける。

「ちゃんと、2人で話さなきゃだめだよ。そうじゃなきゃ、和葉ちゃんだって頑張れないわ。お願い、服部君。行く事を止められないのなら、ちゃんと和葉ちゃんと向き合って。」

昨日、平次は本当の意味で新一の気持ちを理解した。

大切な女性^{ひと}を待たせる者の気持ちを。

であるならば、和葉の気持ちを1番理解できるのも、彼女なのだろう。

蘭の言葉が和葉と彼女自身を重ね合わせたが故のものであると納得した平次は、蘭に向かって頷いた。

「わかった。」

平次の回答に安堵したのか、彼女は笑顔を見せる。

「ほな、行くわ。」

「あ、服部君。」

立ち上がった平次を呼び止めた蘭は、自分も布団から立ち上がると彼に頭を下げた。

「なんや。」

突然の彼女の行動に困惑した平次へ蘭の想いが届く。

「新一の事、よろしくお願いします。」

声は穏やかなのに、平次には彼女の悲痛な叫びに聞こえた。

彼は行くと決めたからには、蘭の気持ちを真摯に受け止めるべきだと思った。

「ああ。任せとき。」

不敵な笑みを浮かべて答えると、平次は部屋を後にした。

「和葉、開けんで。」

勢い良く開けた扉の向こうには、泣きはらした彼女が呆然と平次を見上げていた。

今日初めて見た彼女の顔は、悲惨そのものだ。

この顔を見せたくないという和葉の気持ちは理解できる。

確かに、この顔が最後になったらと思うと平次も辛い。

「行くで。」

一言そう言うと、平次はそばに置いてあった和葉のジャケットを持ち、彼女の手を掴んだ。

「ちょっと・・・平次！」

和葉の声を無視して玄関へと急いだ平次は、家の前に止まっていた車の後部座席に彼女を押し込めると、自分もその横へ座る。

ドアが閉められたことを確認した車は、静かに動き出した。

動揺している和葉に向かって、平次はいつもの憎まれ口を叩く。

「しばらく会われへんのやから、見送りにきてもええんやないか？」

「へい・・・じ・・・。」

見送りを許された嬉しさと、彼にしばらく会えない寂しさで、和葉の瞳に涙が滲む。

そんな彼女に気付かない振りをして、平次は握り締めた手の力を少し強くした。

10時過ぎに服部邸を出た黒塗りの車が新大阪駅に到着したが、11時半前。

さすがに大阪にまで奴らの目が届いているとは思えないが、念のためとばかりに平次は周囲に気を配りながら歩く。

その右手には、和葉の手を握ったままで。

新幹線の出発までにはまだ時間がある事を確認した平次は、券売機で入場券を買い無言で和葉に渡した。

それを受け取った和葉は平次と共に改札を通り、東京方面の乗り場へと進む。

出発30分前ということもあって人もまばらだったが、その中でも最も人が少ないホームの端で足を止めると平次は和葉に

向き直った。

「和葉、言いたいことあんねやろ？言うてみ。」

さつきから唐突なことばかりする平次に、少し気持ちが落ち着いてきた和葉はいつもの調子で答える。

「あんなな・・・さつきから何やの？」

「・・・ほんなら、オレからええか？」

普段と変わらない悪態をついてくるのだろうという和葉の予想を裏切った彼の言葉に、彼女の大きな目がさらに大きくなった。

「え？」

「すまん、和葉。」

そう言った平次の顔があまりにも辛そうで、見たことのない幼馴染の表情が胸に突き刺さった和葉の視界がぼやけてくる。

「お前もわかつと思うけど、オレはどうしても行かなあかんねん。」

「うん。」

「心配掛けんのもわかってるんやけど、これだけは譲られへん。」

「うん・・・。」

珍しく素直に気持ちを話す平次の言葉が、和葉の心にまっすぐ届いて、返事をする声が涙で徐々に擦れていく。

「そやけど、絶対帰ってきたるから。お前んところに。」

「う・・・ん・・・えっ？」

信じられない言葉を聞いた気がして、和葉は耳を疑った。

驚きを隠せない顔で呆然と平次を見つめると、彼は苦笑いを浮かべている。

「そやから、そんな顔せんと待っとけ。」

「へ・・・いじ。」

涙が溢れて言葉にならない和葉を平次は掴んでいた右手を引き寄せて、抱きしめた。

「ここに帰ってくるから、待っといてくれ。」

初めてこんな風に抱きしめられた事で、和葉の頭が真っ白になっていく。

嬉しいことのはずなのに、こんな状況の為かどうしても素直には喜べない。

むしろ切なさが彼女を支配して、流れ出た涙が彼の服に痕をつける。

しかし、胸が詰まって身動きが取れなくなってしまう前に、自分の気持ちを彼に伝えなければと和葉は思った。

「待ってる・・・から。ぜ・・・ったい・・・帰って・・・きて・・・や。」

「任せとき。」

「く……どうく……んも……一緒……にや……」
で。」

「おう。約束や。」

彼女のぬくもりを感じながら、もう一度彼女をこの腕に抱くために、必ず帰ってくると平次は自分自身に誓いを立てる。

その時、新幹線の到着を伝えるアナウンスがホームに響き渡った。

それを合図に2人の体は離れたが、和葉は俯いたまま顔を上げられない。

「そんな顔するなって言うたやろ？」

見えなくてもわかる彼女の表情を思い、頭にぽんと手を置いて平次が彼女を慰めると、それに応えるかのように和葉は

精一杯の笑顔を向けた。

「いってらっしゃい、平次。」

痛いほど伝わってくる彼女の想いに後ろ髪を引かれながら、平次はそれを振り切るがごとく力強く答える。

「行ってくるわ。」

和葉の願いと平次の決意を乗せて、12時発の東京行きののぞ

みは静かに動き出した。

40. 誓い（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

最近は、少しずつ更新ペースを安定させられる様になって、ちよつと安心しています。

前半戦の終了まで、あと少し。

気合を入れて執筆に励みたいと思っておりますので、引き続きご愛読、

よろしくお願い致します。

41. 抑えきれない想い

大量の電子機器と通信機械、そして比較的人相の悪い人間が集まった薄暗い部屋。

そんな無機質な様相にそぐわない2人の子供達はソワソワすることもなく、その空間に溶け込んでいた。

今日は、35時間後に迫った計画の最終打ち合わせの日だ。

情報提供には貢献していたが計画の立案にはほとんど関わっていない哀も、今日の会議には計画の全貌を把握するため

参加を許されていた。

緊迫した空気の中で次々と説明される構想。

FBIにはこの短期間で、以前コナンが優作に頼んだICPOからのものも含めた多くの情報が集められていた。

それらをフル活用している今回の案は、東西名探偵と赤井秀一が中心となって練り上げられたものらしい。

哀は、綿密且つ大胆な計画に少し不安を感じながらも、舌を巻いていた。

組織を抜け出したあの日、この世で唯一の頼りだった工藤新一

の家の前で阿笠博士に拾われた。

それは、きっと哀の人生の中でこれ以上ない幸運だったのだ。

彼らがいなければ、組織を倒すなど夢のまた夢であっただろう。

彼女自身が、ここまで生きてこれたという保証もない。

そんな幸運に感謝しながら、説明に耳を傾けだして2時間が経った頃、ドアの開く音が聞こえた。

その場にいる人間全ての視線が向けられた扉から姿を現したのは、西にいたはずの高校生探偵。

彼を確認したFBIのメンバーはすぐに、顔を元の位置に戻し会議を再開する。

しかし、東の少年探偵は例外だった。

彼の予想を裏切ってすっきりした面持ちの平次に、驚いていたのだ。

昨日の電話では、平次は明らかに沈んでいた。

大阪で何があったのかは、すぐにわかった。

恐らく、幼馴染の彼女と何かがあったのだ。

自分と同じ迷路に迷い込んだのだと思っていた。

だが、目の前の彼はもう既に出口を見つけたようだった。

つまり、彼は自分が乗り越えられなかった壁を乗り越えたということ。

それは彼の力がこもっていて、頼もしく感じられる様子からわかる。

（何があったんだ？）

この迷路の脱出方法を平次に聞いてみたいという衝動に駆られたコナンだったが、すぐに思いとどまる。

その方法が誰しも同じとは限らない。

答えは、結局自分で見つけなければならぬものなのだ。

考えを改めたコナンは、再び会議の内容に集中した。

突入に関する最終打ち合わせを入念に行ったコナンたちが開放されたのは、22時を廻った頃だった。

疲れきった表情で帰ってきた3人を博士が出迎える。

用意された軽食とコーヒーを口にした後、コナンは早々に立ち上がり自室へと戻った。

その行動をきっかけに、哀は平次に切り出した。

「で、大阪はどうだったの？」

表向きの話は、先程の会議中におおよそ聞いているのでコナンも哀も知っている。

それでも尚問うてきた彼女の言葉に、哀は2人の少女達のことを聞いているのだと平次は察した。

そして、大阪での出来事を必要最低限の範囲で手短に話す。

聞き終えた哀は、少しホッとした表情を見せながらも、コナンのことを気にしていた。

「蘭さんから渡されたっていう封筒、彼には？」

「これからや。姉ちゃんのこと、ほとんど話してないしな。」

「そう。」

頷いて2階を見上げた哀は、やるせない表情で呟く。

「彼、大丈夫かしら。」

「心配しなや。何とかなるやろ。」

そう言って笑みを見せた平次の言葉を、哀は心から信じたいと

思った。

哀との話を終えた平次は荷物を自室に置き、託されたものを手に取るとそのままコナンの部屋へ向かった。

コナンは平次の来訪を予想していたらしく、すんなり彼を受け入れた。

机の側の椅子に腰掛けたコナンへ、平次は手にしていた封筒を差し出す。

「これ、姉ちゃんから預かってきたんや。お前にやて。」

「オレに？」

「姉ちゃんには、お前には会うてへん設定で話をしとったんや。そやから、渡されへんかもしれへんねやでって言うたん

やけど、それでもええから持ってってくれ言われてな。」

平次から封筒を受け取ったコナンは、複雑な表情を浮かべていた。

そんなコナンの様子を一瞥しながらも、平次は用件だけを口にする。

「まあ、姉ちゃんの体調は大分良うなっと思うわ。しばらくは和葉もウチのオカンもいてるし。そやけど、大丈夫とは

言われへんやろうな。あとは、お前次第や。」

そういい残すと、彼はコナンの部屋を後にした。

残されたコナンは、同じく残された白い封筒を見詰める。

持った感触では、何か厚みのあるものが入っているようだ。

彼は、迷っていた。

これを開けるべきかどうか。

書かれている内容がどんなものであっても、自分の心を乱すだろう。

決戦まであと25時間。

余計なことを考えている場合ではない。

(でも……)

彼女がこれをどんな気持ちで平次に託したのか。

それを考えると、逃げてはいけない気がした。

散々待たせた挙句、『待たなくていい』と言って傷つけた自分をそれでも待つと言ってくれた彼女に、これ以上背を向ける

ことは許されなかった。

覚悟を決めたコナンは、机の引き出しからペーパーナイフを取り出し、慎重に封筒を割っていく。

そして、目を閉じ大きく深呼吸をすると、中身を確認した。

入っていたのは、1枚の白い便箋とお守り。

それらをゆっくり取り出すと、お守りを机の上に置いて、便箋を開いた。

新一へ

私は何の力にもなれないから、神様をお願いしてきました。

同封したお守りは、その時に買ったものです。

きっと、新一を護ってくれるはずだから、持っていて下さい。

絶対に、帰ってきてね。

蘭

あの夜のことも、志保と会ったことも、何一つ触れられていなかった。

ただ、彼女は自分を心配し、帰ってきてほしいと願っていることを伝えたいのだと思った。

「待っている」と言う言葉を敢えて使っていない文章に、彼女が自分に負担を掛けまいとしている心情が読み取れた。

そして、体調の思わしくない体で自分のために祈ってくれた蘭を、心から愛しいと思った。

(蘭……)

久しぶりに見た彼女の字にさえ心惹かれる。

コナンは何度も手紙を読み返した後、同封してあったお守りを握り締めた。

やっぱり、彼女の元へ帰りたい。

『工藤新一』として戻ってきた時、きっと見せてくれるだろう彼女の笑顔を手に入れたい。

想いが抑えきれなくなった時、コナンは携帯電話を手にした。

深い闇の中に煌々と輝く月が、薄い雲に隠れてばやけた光を放っている。

そんな空が、カーテンの隙間からわずかに見えた。

蘭は薄暗い部屋の中で、横になりながら眠ろうともせず、ただ空を見上げていた。

今日、この家の一人息子は東京へと戻った。

彼の大切な幼馴染と自分を大阪に残して。

こちらの方が体力回復にはいいと勧められて大阪に来たのだが、理由はそれだけではないのだろう。

東京にいる事によって、彼らになにか不都合があるからに違いない。

何よりも、平次は嘘をついていた。

新一とは会っていないと言っていたはずの彼が、一昨日の晩言った言葉が蘭はずっと引っ掛かっている。

『これ以上アイツが苦しんでるとこ、見たないんや。』

それは、彼に会ったからこそその言葉だと思った。

あの辛そうな平次の表情は、真に迫るものがあったから。

だからこそ、あの手紙を平次に託した。

きっと、新一に届くと信じて。

(新一……)

蘭は軌道により雲から顔を覗かせた月を見上げて、同じ空の下にいるであろう彼を想う。

今ごろ彼は、自分の手紙を平次から受け取ったであろうか。

同封しているお守りは、大阪に来た日に和葉に無理を言って連れて行ってもらった神社で買ったものだ。

新一のそばにいることも、彼が何をしているのかを知ること
も許されない蘭に唯一できること。

それが、神様に祈ることだった。

和葉が平次の安全を願ってお守りを持たせているように、蘭も
新一への想いを込めたお守りを渡したかった。

月から視線を部屋に移すと、暗闇が蘭の視界を覆い尽くす。

目の前の闇は、彼女の心とシンクロしているようだ。

これから、彼らに何が起ころうとしているのか。

考えてもわからないことなのに、頭から離れることもない。

蘭は、ぐるぐると頭を駆け巡る悪い予感に押しつぶされそうに
なっていた。

それを振り払おうと体を起こした時、聞きなれない音が背後か
ら蘭の耳に届く。

布団から抜け出て音の出所を探すと、それは自分のバックの中
に収まっている携帯電話だった。

ある女性から渡された桜色の携帯電話。

一度も使われた事のない携帯電話。

そして、画面には『非通知』の文字。

掛かってくる人物は1人しか思い当たらない。

蘭は信じられないと思いつつも逸る気持ちを抑えながら、震える指先で通話ボタンを押した。

「も・・・も・・・しもし。」

やっこの思いで問い掛けた言葉に返ってきたのは、彼女が心から待ち望んだ声だった。

41. 抑えきれない想い（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

前回の後書きでも触れましたが、いよいよ前半のクライマックスに突入です。

予定では、残すところ後2話。

大まかには書きあがっているので、次話もそれほどお待ちせずにお届けできると思います。

ただ問題は、その先なんですよね。

作者自身もこの小説を書き上げられるのかどうか、とっても不安・

とりあえず応援して下さっている読者の皆様の期待に添えるよう、頑張って執筆していこうと思っています。

42. 迷路の出口

『蘭・・・か?』

どれほど、この声を待っていただろう。

蘭は、今起こっていることが現実とは思えなくて、自分の全てから力が抜けていく感覚を覚える。

『蘭?』

再び彼女の耳に入ってきた心地よい声。

もう2度と、この声を聞けることがないのだろうと思っていた。

もう2度と、この声で呼ばれる事はないのだろうと思っていた。

だから、もっと自分の名前を呼んで欲しい。

今この瞬間は、彼と繋がっているのだと信じさせて欲しい。

彼女の強い願いが雫となって、瞳から零れ落ちた。

『おい、蘭?』

何の返答もない相手に、さすがに不信感を抱き始めたのだろう。

彼の声が焦りを帯びてくる。

それに、感づいた蘭は慌てて声を上げた。

「は……い。」

ようやく聞こえてきた彼女の声に、彼女の身に何か起こったのかと心配になっていた彼は胸を撫で下ろした。

しかし、緊張しているようにも思える様子に、彼も変声機を持った左手が震える。

『あ……あのさ、今日偶然服部に会ったんだ。で、もらったからお守り。』

（服部君、やっぱり渡してくれたんだ。）

それは小さな望みだったが、叶った喜びもまた蘭を優しく包みこむ。

『サンキューな、蘭。』

「うん……。」

返事の声から受話器の向こうで彼女が泣いているのだと察した彼は、次の言葉が続けられなくなる。

一方、蘭も伝えたい事はたくさんあるのに言葉にならない。

（このままじゃ、ダメ！もう話せないかもしれないもの。ちゃんと、伝えなきゃ。）

これが最後のチャンスとばかりに自分自身を奮い立たせた蘭は、小さいながらもハッキリと言葉を紡ぎだした。

「新一、ごめんね。」

突然の彼女からの謝罪。

自分が謝らなければならないと思っていた彼から、間の抜けた声が出る。

『は？』

「私、新一との約束・・・守れそうにない。」

（オレとの約束？）

彼の中で彼女との約束と言えば、『待ってて欲しい』という言葉
葉。

でもそれは、彼自身が反古にしたはずだ。

意味がわからないと思っている彼が見えているかのように、蘭
はあの夜の言葉を復唱する。

「『必ず幸せになってくれ』って言われたでしょ？」

彼女の台詞から、彼はあの夜のことを鮮明に思い出した。

あの暗く出口の見えない迷路に迷い込んでいた頃の気持ちを。

「あれからずっと考えてた。私にとっての幸せってなんだろうって。でも、どれだけ考えても結局、『答え』はひとつしか

なかった。」

彼は、これから彼女が告げようとしている『答え』に考えを巡らせた。

そして思い至ったのは、この10日程の状況を踏まえた上で決して一人よがりではないだろうと信じられるものだった。

「私、やっぱり・・・」

蘭は勇気を振り絞って、ずっと抱えてきた想いを伝えようとする。

しかし、その言葉は彼によって遮られた。

『蘭。そこから先は、オレに言わせてくれ。』

意味のわからない彼の言葉に、史上最大の決意をふいにされた蘭は困惑する。

「え？」

『蘭。もう一度だけ、オレのワガママ聞いてくれねーか？』

そこで一呼吸置いた彼は変声機を握りなおすと、ずっと言いたくて言えずにいた言葉を口にした。

『待ってて欲しい。』

刹那、時間が止まった。

二度と聞けないと思っていた彼の声が聞けた事だけでも幸運だ
とと思っていたのに、一番望んでいた言葉が耳に飛び

込んできたことが蘭は信じられない。

しかし、心はそれを受け入れていた。

その証拠に、彼女は次から次へと溢れてくる涙を止めることが
できない。

「しん・・・い・・・ち。」

『あんな事言っておいて、今更かもしれないけど・・・でもや
っぱりオレ、オメーに待ってて欲しいんだ。』

素直に自分の気持ちを伝えられることが、これほどまでに心を
満ち足りたものにするのか。

彼は口にした言葉が、自分自身に力を与えていくのを感じてい
た。

『必ず、帰ってくるから。生きてオメーのところに帰ってくる
から、だからそれまで蘭に待ってて欲しい。』

以前、彼に『死んでも』戻ってくると言われたことがある。

でも、今回は『生きて』戻ってくると約束してくれた。

蘭は彼の強い決意を感じ、それを信じようと心に決める。

「う．．．ん。待って．．．る。待ってる．．．から。だから．．．お願い。必ず．．．必ず帰ってきて。」

彼はやっと言えた言葉に対して、望んだ答えが彼女から返ってきた事にホッとしながら、それを隠そうともせず

少し照れたような優しい声で答える。

『ああ。約束する。』

「ホントね？」

『ああ．．．絶対だ。』

ひどい事を言って傷つけた自分を受け入れてくれた蘭が、彼はどこまでも愛しく思える。

ずっと彼女の声を聞いていたいけれど、別れの時は迫っていた。

『じゃあ、次いつ連絡できるかわかんねーけど、それまで服部のご両親の言う事聞いて、早く元気になれよ。』

どんな状況でも蘭を気遣う彼の想いが、彼女の心に届けられる。

それを素直に嬉しく思った彼女の気持ち、真っ直ぐに彼へと表現された。

「うん。ありがとう、新一。」

『じゃ。』

短い会話が終わろうとしていることがどうしようもなく寂しくて、蘭はつい呼び止めてしまう。

「あ、新一！」

『どうした？』

聞き返されても、『切らないで欲しい』という言葉だけは言えない。

蘭は慌てて言葉を搜す。

「あの・・・えっと・・・、体に気をつけてね。」

なんとなく彼女の気持ちを垣間見た彼は、彼女の願いを聞き入れることはできないけれど、わかっているという言葉の

代わりに謝意を伝えた。

『サンキュ。』

彼に気持ちに通じていると感じられた蘭は辛く寂しい気持ちを押し殺して、今度は自分から一時の別れを切り出す。

「またね、新一。」

『ああ。またな、蘭。』

再び会えることを予感させる言葉で会話を終えた2人は、例えどんなに細くてもお互いを結んでいる糸の存在を確認できた

事がこの上なく幸せだった。

（やっぱり、出口はココ以外なかったな。）

迷路の先にあったのは、蘭への気持ち。

通話を終えた後の規則的な機械音も、コナンには耳障りに聞こえなくなっていた。

窓の向こうには白から青へと色を変えた空が見え始め、鳥のさえずりが春が間近に迫っていることを知らせている。

コナンは窓を開け放ち、朝の爽やかな空気を部屋に取り込んでいた。

こんな朝を迎えられたのは、いつ以来だろう。

きっと今の自分も、あの時の平次と同じ顔をしているのだろう。

そう思ったらなんだか恥ずかしくて、コナンは鏡も見ずに部屋

を後にした。

リビングでは、哀が既に朝食の準備をしていた。

みんな、特別な日の朝だけあって、いつもよりも早く目が覚めているようだった。

でも、目の前の光景はいつもの朝と何ら変わりはない。

平次は、ソファで新聞を読んでいて、博士は哀の横で朝食作りの手伝いをしている。

そして、準備が整ったと声を掛けられると、各々がダイニングに集まってきた。

これが最後の朝食になるかもしれない。

そんなことは、ここにいる誰もが思っているが信じていなかった。

席に着いた平次と哀は、同じくいつもの椅子に腰掛けたコナンの顔を見るなり笑みを溢した。

なぜなら、目の前の彼が昨日とは違っていたから。

彼の目に、再び力が宿っていたから。

その様子を怪訝そうな顔でコナンが睨みつける。

「なんだよ。」

「別に、なんでもないわ。」

哀はそこで話を終えようとしたのだが、平次がそれを許さなかった。

「工藤。オレらに言わなあかん事があるんとかうか？」

全てを見透かしたような彼の目に、コナンは苦笑とともに天井を仰ぐ。

（これだから、コイツらは嫌なんだ。）

深いため息をついてみたものの、これまで散々迷惑を掛けてきたのは事実だ。

自分が出口を見つけられたのも彼らのお陰であると、口に出してはいえないが心の中では感謝している。

彼がその結果を要求する事は当然の事だと、コナンも理解していた。

「おい。工藤、はぐらかすつもりやないやろな？」

更に追求してきた平次に、コナンは面倒くさそうな声で答える。

「わぁーったよ。言えばいいんだろ、言えば。」

そこで一旦、間を置いたコナンの顔がみるみるうちに赤みを帯びてくる。

その様子を平次は、面白そうに眺めていた。

「蘭にちゃんと言ったよ。『待っててくれ』って。・・・いろいろ迷惑かけて、悪かったよ。」

彼の告白に、2人は口にこそ出さなかったが、心の底から安堵した。

彼らと同じように心配してきた博士も、笑顔を浮かべている。

もう少し突っ込もうかとも思った平次だが、それでまたコナンに機嫌を損ねられたら厄介だと考え直し、話の方向を朝食へと

変換させた。

「ほな。食べよか。」

その言葉を合図に、4人は久しぶりに揃って朝食を取り始める。

そんな当たり前の光景を目にしながら、哀は決戦前に3人がそれぞれに答えを見つけられた事を、普段はその存在を信じても

いない神様に感謝していた。

42. 迷路の出口（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

投稿が遅くなってしまう、申し訳ございません。

文章自体は3日前には出来上がっていたのですが、インターネットの調子が悪く投稿できませんでした。

ここのところネットに接続できない日が増えていて、非常に不便でちよつと困っています・・・。

次話は、前半のエピローグ的なものなので、驚くほど短い予定です。こちらは、ネットの調子が悪くならなければ5日以内には投稿したいと

思っております。

前半終了まで、あと1話。

後半の準備のピッチを上げないと危険だと認識しながら、なかなか進まない今日この頃です・・・。

43. 決戦へ向けて

「みんな、準備はいいな。」

突入予定時刻まで、あと3分。

配置についた各員のイヤホンに、ジェイムズからの最終確認が入る。

コナンはそれを左耳で聞きながら、キック力増強シューズの靴紐をキツく結びなおした。

一方、コナンの隣で目の前の建物に鋭い視線を向けている平次は、襟についているマイクでジェームズに答えた後、

視線を変えずにコナンへ声を掛ける。

「工藤、必ず生きて帰んで。」

彼の言葉に、コナンは静かに目を閉じた。

できることは、全てやった。

この3週間、集められる限りの情報を集め、最善策を練ってきたつもりだ。

あとは、自分達を信じるだけ。

コナンが瞳を開くと、その視線の先には彼らから遠く離れた場所で待機している赤井秀一がいた。

お互いに視線がぶつかり、何を言うわけでもなく頷き合う。

そして不敵な笑みを浮かべたコナンは、平次にいつもの自信に満ち溢れた声で返事を返す。

「あったりめーだ。」

その言葉を聞いていたかのように、時計の全ての針が重なり合った。

と同時に、ジェイムズからの指令が全メンバーに届けられる。

「Ready Go!」

そして、最後の戦いが始まる。

4.3. 決戦へ向けて（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回で、やっと話の半分が終了致しました。

現段階でのアクセス数は、PVで94,000アクセス・ユニークで30,000人を

超えています。

書き始めた頃は、こんなにたくさんの方々に読んで頂けるとは、思ってもみませんでしたし、応援やアドバイスのコメントを頂けるとも思っていませんでした。

思い通りに書けなくて何度もつまづきながらも、ここまで頑張ったのは、読者の皆様のお陰だと感謝しております。

本当に、ありがとうございました！！

次話は、組織との戦いが終わった後から始まります。

相変わらず原稿は進んでいないのですが、あまりお待たせせずにお届けできるように執筆しておりますので、今後ともこの作品をどうぞ宜しくお願い致します。

S e c o n d p r o l o g u e) A f t e r t h e b a t t l e

戦いは、終わった。

残ったのは、爆音とともに燃えさかる建物と目的を成し遂げた人々。

そして、希望の欠片と信じがたい現実。

きな臭い匂いが立ち籠め熱風が吹き荒れる中で、呆然と立ちつくす者。

光を求めて、動き足掻もがいている者。

その全ての者たちに、もうすぐ朝が訪れようとしていた。

最後になるはずの戦いは、終焉を迎えてはいなかった。

これから、新たな戦いが始まる。

本当の帰るべき場所を求めて。

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

さて、いよいよ始まりました後半戦！

にも関わらず、過去に例を見ないほど短い文章で申し訳ございませ
ん。

どうしても、この部分は独立させたかったため、このような形を
取らせて頂きました。

次話からは、通常通りの長さでお届けする予定です。

試行錯誤を重ねながら、なんとか続きを書いておりますが、思うよ
うに

進んでおらず悪戦苦闘の状態です。

少しでも早く投稿できるように頑張っていますので、もうしばらく
お待ち

頂けると幸いです。

今後とも、よろしくお願い致します。

44. 新たな戦いの前に

雨が降る。

しとしとと雨が降る。

まるで、自分の代わりに泣いてくれているように。

その日は、朝から空が灰色の雲に覆われていた。

昼を過ぎる頃、最初の涙が落ちた。

そして、夕方前には途切れることなく、水溜りに輪を作っては消えていく。

いつもより早い時間から辺りが暗くなっていたが、部屋の明かりをつける気にはなれなかった。

辛うじて部屋に光を与えているのは、目的も無く付けられているテレビ。

そこから聞こえてくるアナウンサーの言葉は、母国語ではない。

しかし、意味がわからない言語でもなかった。

そんな薄暗い部屋の中で、何をするわけでもなくソファに沈んでいる体。

自分のものともわからないような体の感覚を覚えながら、ふと見た窓に閃光が走る。

数秒後、響くような音が聞こえてきた。

それを耳が受け止める。

（今頃、彼女はどうしてるかしら。）

不意に彼の言葉を思い出して、彼の幼馴染のことを考える。

偶然にも彼女のいる街も、雷雨だとテレビが伝えていた。

『あいつ、昔から雷が苦手だよ。そういう日は、大抵オレの家に来てたんだ。』

震える彼女の傍らで、彼は彼女に安心を与えていたのだろう。

もしかしたら、普段出来ない事でもしていたのかもしれない。

例えば、手を握るくらいのことを。

そして、彼の温もりに彼女は助けられてきたのだろう。

でもその彼は今、彼女の傍にはいない。

彼女は、たった一人で雷雨を過ごしているのだ。

彼女から彼を奪ったのは自分。

彼女に恐怖の時間を与えているのは自分。

慌しく動く脳とは対照的に、固まったままの体が恨めしくなる。

しかし、体が動いたところで今の自分が彼女に出来る事など何もない。

唯一のことを除いては。

見上げた空は、自分を嘲笑うかのように黒く澱んでいた。

（結局、彼女しかないのよね。）

そう。彼女しかない。

彼にその想いが、その声が届くのは。

落ち込んでいる暇などない。

そんなことは、全て終わってからすればいい。

今、考えなければならぬ事は、たった一つだ。

数時間前から、目の前に置かれているものを訝しげに見つめる。
どうするべきか、ずっと悩んでいた。

これを使ってしまうことで、彼らに対する罪から逃げる事にならないか、と。

それでも、彼を確実に救うためには必要なことだった。

そして最悪の事態が起こった場合、彼女を説得するためには使った方が効果的であることは確かだった。

（逃げるわけじゃない。逃げないために使うのよ。）

そう自らに言い聞かせると、眼前にあるカプセルを手を取った。

自分で作ってしまった恐ろしい薬物。

本当に全てを終わらせるためには、この道しかない。

心を決めると、それを口に入れる。

そのまま水を流し込み、カプセルを体内へと運んだ。

数分後、2回ほど経験した事のある激痛が全身を襲う。

支えきれなくなった体が、そのままソファーへと倒れこんだ。

この後の段取りは、全て連れに伝えてある。

仮に副作用でしばらく目を覚まさなかったとしても、何とか対処してくれるはずだ。

（彼らに与えてしまった苦しみに比べたら、こんな痛みくらい・・。）

朦朧とした頭が彼らへの罪悪感に包まれた頃、彼女は意識を手放した。

4.4. 新たな戦いの前に（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

なんとか更新できて、一安心です。

今回は、モノローグ的な文章となりました。

『誰の』かは、たぶん分かって頂けると勝手に思っているのですが・
・。

次話からは、ちょっと時間が飛びます。

そして、『現在』と『過去』という時間を交錯させた書き方で進めて
いきたいと思っております。

何分力不足ですので、わかりにくいというご意見も出てくるかと思
います。

その際は、遠慮なくご指摘いただければ幸いです。

もちろんアドバイスを頂けたら、さらに嬉しいです。

現在、頑張って構想を練っておりますので、今後ともご愛読お願い
します。

45. 止まったままの時間

暖かい日差しが、枝に残ったわずかな花とその面積を増してきた葉の隙間から差し込んでくる。

新学期が始まって、2週間。

もうすぐ、桜の季節が終わろうとしていた。

例年に比べて寒さが残った影響は、例外なく桜にも及んだ。

いつもならもう既に散ってしまっている時期にも関わらず、この日本の春の代名詞ははまだ少し花を咲かせている。

そんな並木道を、蘭は憂いに満ちた顔で歩いていた。

毎年、この季節を迎えると彼と一緒にこの道を歩いた。

満開の桜は美しくて、心が温かくなる。

散り行く桜は儚くて、切なくなる。

花びらが舞い散る様を見つめる蘭の表情はどこか悲しげで、そんな時はなぜかいつも彼が側にいてくれた。

彼女には彼の存在が、その儚さを華やかな美しさへと変えてくれているようにさえ感じられていた。

でも、去年は違った。

その季節、彼女の側に彼はいなかった。

その代わりに小さいナイトが一緒だった。

同じように桜を見上げながら、彼がいなくても胸が押しつぶされるほど寂しくないのは、この少年のおかげだと

蘭は思った。

そして、今年は彼女一人だ。

彼も、少年もいない。

ひらひらと桜の花びらが蘭の髪に舞い降りる頃、彼女の瞳に涙が溢れていた。

その時、突然その場にそぐわない電子音。

ポケットから取り出した携帯電話の画面を見ると、そこには西の親友の名が表示されている。

蘭は涙をぬぐって大きく深呼吸をした後、通話ボタンを押した。

「もしもし。和葉ちゃん？」

『あ、蘭ちゃん？今、大丈夫？』

「うん。大丈夫だよ」

『・・・連絡あった？』

平次に言われて大阪に行き、その翌日新一と電話で話したのを最後に、彼らと連絡が取れなくなった。

そしてその1週間後、世間に激震を与える出来事が報道される。

『世界的な犯罪組織 摘発』

今まで決して表舞台に顔を出すことなく暗躍してきた組織が壊滅したという情報は、新聞の一面を大きく飾り、

連日のようにニュースやワイドショーを賑わせた。

初めてその事件を目にした時、蘭と和葉の第六感と同じことを訴えていた。

幼馴染が関わっているのは、この事件ではないか、と。

それから二人は、食い入るように新聞やテレビを見続けた。

しかし、この事件の情報はどうやら規制されているらしく、詳しい事が伝えられず憶測ばかりが飛び交う状況に、

テレビに映っているアナウンサーもコメンテーターも、情報を開示しない警察の対応を激しく批判していた。

結局、何の手掛かりも掴むことが出来ず、ただ闇雲に大きくなっていく不安だけが彼女達に残った。

そして、すぐに考えてしまう嫌な予感と戦いながらも、蘭と和葉は共に彼らの帰りを待ち続けた。

でも、春休みが終わっても彼らが帰ってくることはもちろん、連絡すら入ることはなかった。

その後、学校が始まるため仕方なく東京へ戻った蘭の元へ、和葉から定期的に連絡が入るようになった。

2人ともわかっている。

どちらか片方だけに連絡が入ることなどないことを。

だから、そんな頻繁に連絡を取り合う必要がないことも。

でも、確認せずにはいられなかった。

ほんの僅かな望みにでも縋りたかった。

「ないよ。そっちには？」

『こっちにもないわ。』

こんな会話が何度繰り返されてきたことだろう。

電話の頻度は、今までと比べものにならないくらい高くなったけれど、通話時間は数分の1になった。

学校の話や最近起こったことなどいつもなら時間を忘れて話をするのに、ここしばらくはそんな事もなくなった。

『ほな、連絡あったら電話してな。』

「うん。わかった。和葉ちゃんもね。」

毎回、同じやりとり。

それ以上でもそれ以下でもない。

それでもこの電話は、あの日から時間を動かさずにいる2人にとっての精神安定剤になっていた。

「ねえ、蘭。やっぱり、なんかあったでしょ？」

翌日、学校帰りに寄った喫茶店で、席に着いた途端に発せられた園子からの一言。

唐突な彼女の言葉に蘭は目を見開いたが、すぐに困った表情を浮かべる。

「いきなり、どうしたの？園子。」

「だって最近元気がないし、どんどん痩せていくし、心ここにあらずって感じだし、どう考えたって変よ。」

体重が落ちているのは事実で、それは隠しようがないから仕方がないとして、元気がないとか上の空とかは、蘭と

してはうまく誤魔化してきたつもりだ。

事実、それについてクラスメートから指摘された事も心配された事もなかった。

それなのに彼女が気付いたのは、付き合ってきた年数と密度にやるものなのだろう。

だからと言って、園子に全てを話す事はできない。

「そうかな。痩せたのは、少しダイエットしたからよ。ウエストがヤバめだったし。元気がないように見えるのは、

この間お父さんとお母さんがケンカしたせいかな。ほんとに・・・いつになったら仲直りしてくれるんだろう。」

蘭は、最もらしい理由をつけて園子を納得させるしかなかった。

「・・・そうだったんだ。おじさん達も相変わらずだね。それ

より蘭、それ以上やせる必要なんてないわよ。」

蘭が打ち明けるつもりが無いことを察した園子はそれ以上追及するのをやめ、彼女の言葉に当たり障りの

ない答えを返す。

そして、誰も気付かないほど小さいが深いため息をついた。

春休み前から気になっている蘭の体調。

両親の別居の時だって、彼女の幼馴染がいなくなってからだって、なんとか彼女は生活してきた。

それが、出来なくなるほどの理由はたった一つしかない。

あの気障な名探偵との間に明確な何かが起こったのだ。

だから、彼女は普通にしてられないのだ。

しかし、それは何の確証もないことだった。

あくまで、長年蘭と付き合いってきた彼女の勘。

そして、もしそれが当たっていたとしても、二人の間のことに無理やり割って入る権利など自分にはないことを

園子はわかっていた。

（だけど、これ以上蘭に何かあったら、その時はいくら新一君

でも許さないわよ。」

目の前の彼女への遣り切れない園子の想いが、一向に姿を現さない彼女の幼馴染へと向けられていた。

45. 止まったままの時間（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

もう秋だというのに文章には桜が満載で、季節感がおかしくなりますね。

早く季節に合った、お話が書きたいところです。

さて、次話は少しだけ過去に遡ります。

ちよっとわかりづらいような気もして、投稿前から既に心配なのですが・・・。

出来るだけ早くお届けしたいと思っておりますので、もう少しお待ちください。

よろしく願います。

46. 開戦

その女性が成田空港に降り立ったのは、希望と絶望を同時に味わったあの日から2週間後だった。

彼女は戦いに決着がついた後、すぐにアメリカへ飛んでいた。

決死の思いで奪取されたAPTX4869のデータを持って。

そして今、その手に唯一の望みを携えて日本へ戻ってきたのだ。

行きかう人の波を掻き分けながら、小さいキャリアケースひとつで到着ロビーを歩いていた彼女は聞きなれた声で

呼び止められる。

「おかえりなさい。哀……いえ、志保」

声がした方向へ目を向けると、そこにいたのは金髪のFBI捜査官。

「ただいま。ジョディ先生。迎えに来てくれたのね」

見知った顔に出会えた安心感からか、強張っていた志保の表情が少し柔らかくなる。

ジョディは初めて対面した『彼女』に少し困惑しながらも、笑顔を見せたその様子にホッとし、すぐに移動を指示する。

「裏手に車を手配してあるわ。急ぎましょう」

それに従うように、志保は歩く速度を速めた。

空港を出ると、志保は心地よい風を受けて無意識に目を瞑る。

数時間前までいた場所はまだ肌寒かったため、春を感じさせる暖かさは日本に戻ってきたことを実感させた。

出口から少し離れたところに停めてあった車に移動し、志保が助手席に乗り込んだのを確認すると、ジョディは

すぐさま車を発進させる。

夕陽に照らされた体にシートベルトを装着した志保は、口癖になっている質問を投げ掛けた。

「その後の状況は？」

志保が日本を離れていた間、ジョディとは1日に2〜3回のペースでメールか電話でやり取りしてきたし、状況に

変化が生じた場合は連絡が必ず入るとわかっている。

それでも空の上を飛んでいて連絡の取れなかった、この13時間に見えかけた志保の期待は次の言葉で呆気なく

消し去られた。

「何も無いわ」

ジョディは、ステアリングを握りながら表情一つ変えずに答える。

そして、彼女もまたこの数日間で何度も口にした質問を志保に投げ返した。

「体調は？」

志保が解毒剤を飲んだのが、今から1週間前。

ほぼ完璧に近い解毒剤を作る事に成功していたため、重い副作用が起きているわけではないということだったが、

本来ならばもう1週間は絶対安静が必要だと報告を受けている。

しかし、志保はそれを押し切って帰国していた。

「問題ないわ。」

そう言いながらも長いフライトで彼女の顔に疲れが見え始めているのを横目で確認すると、ジョディは車のスピードを

少し上げた。

車は吸い込まれるように、地下の駐車場へと走っていく。

そして、定位置と思われる場所に収まると、乗っていた二人の女性は車を下りた。

互いに言葉を交わすことも無く建物へと続く通路を歩き、突き当たりにあるエレベーターへと乗り込む。

ジョディは、操作パネルの一番上にあるボタンを押すと、壁に寄りかかって腕を組んだ。

志保は、前方の電光掲示板の数字が1つずつ増えていくのを見つめている。

ゆっくりと上っていたエレベーターが、目的地に着いたことを音で2人に知らせた。

開かれた扉の向こうには、絨毯張りの廊下と高価そうな調度品。

普通の人なら、ちょっとした優越感を味わえる場所なのかもしれない。

しかし、志保にとって約3週間ぶりのその場所は、決して心穏やかでいられる場所ではなかった。

エレベータを降りたジョディが、車を降りてから初めて志保に

声を掛ける。

「一人で大丈夫？」

「ええ」

いろんな意味を含んだ彼女の問いに簡潔に答えた志保は、その場を後にした。

ヒールが沈む絨毯の上を歩きながら、徐々にその歩幅が狭くなっていくのが自覚できる。

そして、たどり着いた扉の前で一瞬足が竦んだ。

それでも勇気を奮い起こして彼女がドアをノックすると、1度だけ会った事のある人の声が聞こえてきた。

「あなたが、宮野志保ちゃんね？『志保ちゃん』って呼んでいいかしら？」

姿を現した女性は、笑顔で志保に話しかけた。

志保は相手が予想外に明るい様子に驚き、思わず彼女の顔を凝視する。

「入ってもらったかどうか？有希子」

呆然としている志保を余所に、部屋の奥から男性の声が聞こえた。

「そうね。どうぞ」

彼の提案に従うように有希子は、ドアを全開にして志保を中へと促す。

しかし、そこから見えた光景に志保は思わず目を背けた。

心臓をえぐられるような鈍い痛みが襲い、呼吸がおぼつかなくなる。

そんな彼女の様子を見た彼は入り口に歩み寄ると、2人の女性に向かって微笑みかけた。

「喉が渴いたな。コーヒーを飲みながら話をしようか」

そう言って、突然部屋から出て行った彼の背中を有希子が慌てて追いかける。

「ちよつと・・・優作！」

志保は二人のやりとりを眺めながら、自分の気持ちを察した上で、優作の心遣いに感謝しつつも、改めて

突きつけられた現実が苦しくなった。

この建物の中には、FBIが詰めている部屋が3ヶ所ある。

2つは常時FBIのメンバーが使用しているが、もう1つは念のために用意された部屋で、使用されていないことが

多かった。

そこが、いつしか工藤夫妻のために使われるようになっていた。

室内には、優作の希望でコーヒーマーカーが置かれ、いつでもおいしいコーヒーが飲める。

優作にドアを開けてもらった志保がその部屋に入ったときも、上質なコーヒーの香りがたちこめていた。

窓の外には、夕暮れからすっかり夜へと姿を変えた空が広がっている。

そして、街の明かりが星のように輝いているのが見えた。

最後に入室した優作は、明かりをつけると彼女達を席に誘導する。

有希子はそんな彼の立ち居振る舞いに慣れているためか、ナチュラルな動きで椅子に座った。

しかし、同様に椅子を引かれた志保は、それに応じることなく

立ち止まる。

そして、二人に向かって頭を下げた。

「申し訳……ありませんでした」

突然の彼女の行動に優作も有希子も困惑したが、その意味を理解できないわけではなかった。

「謝る事はない。君が悪いわけではないのだよ」

肩にポンと置かれた優作の手の温かさに、志保の胸が詰まる。

「そうよ、志保ちゃん。これは誰のせいでもないわ。何よりも、新一が自分で選んだ道なんだから」

有希子の言葉に、堪えていたものが志保の瞳から零れ落ちた。

それに反応した有希子は立ち上がって志保に近づくと、そっと彼女を抱きしめる。

「自分ひとりを責めちゃダメ。あなただって、被害者なのよ。何よりも、私達はあなたを責めるつもりなんて

ないんだから。新一もきっとそうよ」

回された手で志保の背中をポンポンとあやすように叩きながら、有希子は穏やかな声音で語り掛ける。

優作は、そんな二人を何も言わずに温かい眼差しで見つめてい

た。

志保は溢れ出る涙を止めることも出来ず、ただ包まれた慣れない優しさに身を委ねる以外なかった。

46. 開戦（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

前回から少し間が空いてしまい、申し訳ありませんでした。

にしても、今回はいろんな意味でかなり苦労しました。

文章もそうですが、サブタイトルも悩みに悩んで投稿しているので、おかしな点があるかもしれません。

気になる部分等ございましたら、ご指摘ください。

後半に入って、ますます執筆速度が遅くなっている気が・・・。

次話も書き始めているのですが、なかなか進まない状態です。

とにかく頑張っていますので、楽しみに待ってて頂けると嬉しいです。

よろしくお願い致します。

47. 再会

その日、志保はある場所へ向かって移動するFBIの車中にいた。

4月も半ばを過ぎ、暖かさを増した春の日差しが車の中をも春にしている、寝不足の彼女の思考を鈍らせる。

それでも、頭の中の奥底はしっかりと緊張していて、それが緩む事はない。

彼女はシートに体を預けると、少しの間まぶたを閉じた。

この1週間は、怒涛のように過ぎていった。

アメリカの医者への制止を振り切って帰国する際、日本に戻ってからも1週間は安静にすることを条件にされていた

志保は、工藤夫妻との話合いの後すぐさま入院させられた。

しかし、彼女にはやらなければならない事が山積みで、ゆっくりと休める状況になかった。

治療に専念しない志保をジョディが何度も諫めたが、彼女は頑として譲らないどころか聞く耳すらもたない。

そのため、何度か眩暈を起こしては、医者とジョディに咎められていた。

周りにいる人たちはみんな志保のことを心配していたが、彼女はそれを素直に受けられるほど器用な人間では

なかった。

ただ、この日のために走り続けるしか出来なかった。

ふと、ジョディの言葉が蘇る。

『本当に、大丈夫？』

心から自分を案じて発せられた言葉。

同時に見せた表情からも、それは感じ取れた。

そして、体調のことだけを言っている訳ではないのもわかって
いた。

ジョディの気遣いに一瞬緩みそうになった心を何とか踏み留めて、
彼女は相手に向かって無理やり頷いて見せた。

それが、小一時間前の話。

思い出した事によって再び気持ちが弱っていくのを感じた志保は、
目を開けて見えた太陽を睨みつけた。

それから十数分後、目的地に着いた車は目立たないように街路樹の陰に停められた。

そして、車に乗っていた4名のFBI捜査官の内の半分が車外へ飛び出していく。

残りの2名は運転席と助手席に陣取り、慣れた手つきで通信機器の準備を始めた。

その様子をぼんやりと眺めながら、志保は近づいてくる時間に身震いした。

これから行う任務は、彼女にとってこれ以上ないほど重要だ。

そして、畏怖の念すら抱くものだった。

車窓から見える景色は見慣れたもののはずなのに、いつもと違って見えるのはあの頃と視線が変わったせいなのか、

これからのことを考えて沈んでいる気持ちがそうさせるのか、彼女にはわからなかった。

今日、何度目かのため息が漏れる。

（覚悟は出来てると、思っていたのにね）

自分の情けない態度に呆れて自嘲的な笑みを浮かべていると、抑揚のない声が耳に飛び込んできた。

「対象が動き出しました」

その言葉に思考を切り替えた志保は、前に座っている捜査官に指示を出す。

「一人になるまでは手を出さないように。周りの状況にも十分注意して」

「了解」

返答後、彼らはこの近辺の地図が表示されたモニター上に点滅した光を見つめながら、すぐにインカムで連絡を

取り始めた。

志保も同じくその光を見ながら、この状況に遣り切れなさを感じる。

その光の発信源は、以前志保がある女性に渡した携帯電話だった。

これは彼女が彼女の無事を確認するために、そして彼女に危険が迫った時に彼女の居場所を把握するために渡した

ものだった。

（こんな使い方をする為ではなかったのに・・・）

それでも、結局役に立っている事が皮肉に思えてならなかった。

「対象との距離、100m！」

聞こえた言葉が、志保の贖罪しほへんざいの時間の始まりを示している。

（余計なことを考えている場合じゃないわ）

顔を上げ大きく深呼吸した志保は、その時を待った。

「じゃ、また月曜日ね。蘭」

家の事情で迎えが来ていた園子と校門前で別れた蘭は、一人帰路についていた。

これから憂鬱な週末が始まってしまいう事に、思わずため息が出る。

平日の方がマシだった。

学校へ行って、勉強をして、友達とおしゃべりして、放課後は部活があつて、帰宅すれば家事が待っている。

蘭の1日は、比較的忙しい。

あつという間に時間は過ぎていくから、余計な事を考える時間が少なくて済む。

それでもふとした瞬間には、彼を想って涙が零れそうになる。

それが週末ともなると、時間を持て余してひどく落ち込んでしまふようになっていた。

蘭の様子を気にかけている園子が週末の予定を埋めてくれることが多くなったけど、家の用事があると言っていた

今週末はそれは望めない。

（どうやって、過ごそうかな・・・）

物思いに耽りながら、いつもの通学路を重い足取りで歩く。

そして、学校から10分ほど歩いた場所にある公園の角を曲がった時、急に背後から数人の男に体を囚われた。

（な・・・なに？）

突然のことで状況が掴めないながらも、決して好ましい事態ではないと判断した蘭は、必死に空手の技を繰り出そうと

身構える。

しかし、それさえも封じ込まれたことによって相手がプロだと悟り、ただもがく事しかできなかった。

口も塞がれているため声も出せない。

辛うじて動かせる目を駆使して周りに人がいないか捜してみ

も、何の気配も感じない。

すべて仕組まれているような状況に、蘭は打開策を見出せず絶望感だけが襲ってくる。

暴れる彼女を諸共せず、男達は近くで待機していた車に手早く彼女を押し込めドアを閉めた。

それと同時に、蘭はシートに沈んだ体に揺れを感じる。

無理やり乗せられた車が、走り出したことを知った彼女の体からフツと力が抜けた。

(どうしたら・・・)

混乱した頭で導き出したのは、『誘拐』という結論。

しかし蘭は、それををどう呑み込んだらいいかわからなかった。

その時、彼女の動きを封じていた手が離れていく。

何が起こったのかと体を起こして辺りを見回した蘭の目が、これ以上ないほど大きく開かれた。

「手荒な真似してごめんなさい。でも、これしか方法が浮かばなくて」

そう言って頭を下げたのは、隣に座っていた茶髪の女性。

聞こえた言葉に反応する事もできず、蘭はただ彼女の顔を見つ

めていた。

「久しぶりね。蘭さん」

言葉を失っている彼女に向かって、志保は計画通りの言葉を並べる。

「今から時間もらってもいいかしら。もしかしたら・・・ちよつと長くなるかも知れないけど。この後、何も予定ない？」

蘭は頭が混乱しっぱなしでありながらも、首を縦に振った。

「ありがとう」

志保は努めて微笑みながら謝辞を述べると、運転席の男性に次の指示を与える。

蘭はただ、呆然とその様子を見つめるほかなかった。

1ヶ月ぶりに会ったその女性が、止まっていた蘭の時間を動かそうとしていた。

47. 再会（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

さて、今回は『現在』に戻ってのお話です。

補足させて頂きますと、『現在』と『過去』の基準は今のところ蘭になっていきます。

なので、45話と今回は『現在』、46話は『過去』になるということです。

本来ならば、補足せずにご理解いただけるのが一番なのですが、何分文集力が

追いついていないので・・・。

一応、背景の色を変えることで見た目にも分かりやすくしているつもりなのですが、

ご意見等ございましたら遠慮なくコメントして下さい。

次話は、また『過去』に戻ります。

ちょっと分かりづらい構成かもしれませんが、お付き合いいただけると嬉しいです。

48. それぞれの決意

窓から見える星の数が少し減り、闇が徐々にその範囲を広げている。

そして、その漆黒の中にいつの間にか、白い光を帯びた三日月が姿を現していた。

泣きはらしていた志保が落ち着くのを待って、3人は改めて椅子に腰を下ろす。

どのくらい時間がたったのかは誰にも分からなかったが、変わらずその部屋にはコーヒーの芳醇な香りがただよって

いた。

そして、志保はポツリポツリとこれまでの事を話し始める。

志保がアメリカに出発した翌日に、FBIからの連絡を受けた工藤夫妻は日本に帰国していた。

入れ違いだったため、3人が直接話をするのは初めてだった。

優作たちは既に、おおよその事情を聞いているだろうとは思っていたが、志保はどうしても自分の口から説明しなかった。

自分の過去、この1年間に起こったこと、組織突入のこと、そしてアメリカから持ち帰ったもの。

あまり抑揚のない調子で、それでいて少し震えるような声で志保は語り続けた。

優作と有希子にとってその内容は、FBIはもちろん新一からもある程度聞いていたため、基本的に予想していた範疇の

ことだった。

ただ、事実と経過を話し終えた志保が、最後に口にした決意は彼らを驚かせた。

なぜなら、それは志保にとってあまりにも辛いであろうことだったから。

しかし、彼女の決意は全てを踏まえた上でのものであることも読み取れた。

「その役を、君に任せていいのかね？」

しばらく逡巡していた優作が、志保を案じて問い掛ける。

彼女は、ただ黙って頷いた。

彼女の答えに小さくため息を漏らした優作は、苦笑いを浮かべながら志保に頷き返した。

それは、彼が彼女の意見を受け入れた証だった。

そこで話が終わったとばかりに自然と体から力が抜けた志保は、不意に何の反応も示さずにいる有希子へ目が向いた。

有希子は少し俯いていたため表情は読み取れないが、何かを考え込んでいたようだった。

志保の視線を感じた有希子は顔を上げると、険しい面持ちで志保に話しかける。

「志保ちゃん。もし、どうしても言うなら、一つお願いしたいことがあるの」

そう言った有希子の顔を見つめた志保は、そこで初めて彼女の顔に疲れを読み取った。

この夫婦にとって、日本に帰国してからの半月は過酷なものだったはずだ。

心身ともに疲れ果てていて、当然なのだ。

志保がそれに気付けなかったのは、有希子が悟られまいとしていたからだ。

そして今、それが隠し切れなくなるほど、自分是有希子を追い詰めているのかも知れない。

有希子の行動の意味を知った志保は、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

しかし、有希子はそんな志保に気付く様子もなく、自分の想いを語り始める。

「蘭ちゃん、私にとって本当の娘同然なの。この事実を知らば、あの娘がどれだけショックを受けるか、手に取る

ように分かるわ。出来れば、そんな思いはさせたくない」

有希子は一旦言葉を切って目を伏せると、もう一度伝えたい事を頭の中でまとめてみる。

そして、再び視線を志保に合わせると、言葉を選びながらゆつくりと話を続けた。

「でも、志保ちゃんの言い分もわからない訳ではないの。だから、その選択は蘭ちゃんにしてもらいたい。あの娘に

道を選ぶチャンスをあげたいの。全てを知ってしまったら、蘭ちゃんを選ぶ道は一つしかなくなってしまいうはず

だから……。ただの気休めかもしれない。私の自己満足なのかもしれない。それでも、あの娘自身に考える機会

を、そして違う道を選んでも良いということを伝えたいのよ」

言い終えた有希子の瞳には、涙が溢れていた。

彼女が息子の幼馴染のことをどれだけ大切に思っているかが伝わるには十分だった。

（私がしようとしていたことは、ただのエゴなのかもしれない）

有希子の話を聞いて、志保は素直にそう思った。

こちらが彼女の未来を決めるようなことはしたくない。

選ぶ権利は彼女にあるのだから。

そんな事を考えながら話を聞いていた志保の表情が徐々に険しくなっていくのを見ていた有希子は、志保に自らの

意見を提示する。

「志保ちゃんの目の前で、蘭ちゃんが自分の人生の選択をするなんて、あなたには辛すぎると思う。でも、私もこれ

だけは譲れないのよ。だから・・・私に任せてもらえないかしら」

驚いた表情で見返してきた志保を、有希子はさっきとは打って変わって母親のような穏やかな眼差しで見つめた。

「あなたは、これまでも十分苦しんできたはずだわ。これ以上は必要ない。だから、自らそんな辛い役を引き受け

なくていいのよ。私に任せて・・・ね？」

このことは、日本に帰国してから有希子自身ずっと考えていた事だった。

そして、その時が来たら自らの手で実行しようと思っていた。

自分以外に出来る人間はいないと。

だから、志保の決意は想定外のことだった。

彼女の決意は只ならぬもので、それは有希子も理解しているつもりだ。

しかし、志保の決意を呑むということは、有希子の計画も彼女にさせなければならなくなる。

それは志保にとって、拷問に近い。

有希子は、もうこれ以上誰も傷つけたくなかった。

一方の志保は、目を瞑り考えていた。

（もし、彼女の答えが「NO」だったら・・・）

その可能性は、蘭の気持ちを考えると限りなくゼロに近い。

以前、彼女が新一から『待たなくていい』と言われたときにも、志保は同じように考えた事がある。

苦しみに耐えられなくなって違う道を選ぶかもしれない、と。

しかし結局、彼女は彼を待つ事を選択した。

彼と共に生きていく未来を選んだのだ。

そういう女性だからこそ、志保は工藤夫妻に話した事を決意したのだから。

故に有希子の問いの答えも、恐らく「YES」であるはずなのだ。

でも、もし仮に彼女が違う道を選んだとしても。

志保が期待する道を選ばなかったとしても。

そして、それがどんなことを意味しているとしても、志保はその責任を取ることが自分に課せられた勤めだと思

った。

（やらなくちゃ。逃げないために、この道を選んだんだから）

そして、再び開けた彼女の瞳の奥には、強い意志が含まれていた。

「ね。志保ちゃん。この件は、私に・・・」

言いかけた有希子の言葉を志保の強い声が遮る。

「いえ。大丈夫です。やります」

その言葉と表情に、有希子も優作も一瞬目を見張った。

そして、起こってしまった現実から逃げずに向き合おうとしている彼女の強さを知った。

「わかった。志保くん任せよう」

これまで黙って事の経緯を見守っていた優作は、彼女の言葉に静かに頷いた。

48. それぞれの決意（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回は『過去』に戻ってのお話です。

一応、46話の続きという形で読んでいただけるとわかりやすいかと思います。

今回も、なかなか納得いく文章にならず投稿するまでに時間が掛かって

しまったのですが、読者の皆様にとって読みやすい文章になっていきます

でしょうか？

また、ご意見等ございましたらお聞かせください。

今後とも、よろしくお願い致します。

49. 選ばれた道

志保は窓際に置かれた椅子に座ったまま、有希子と交わした約束を思い出していた。

そして、回想が終わったことによって、現実に戻される。

ここは、蘭と話をするために用意されたホテルの客室の隣室で、FBI捜査官が待機するために手配された場所だ。

志保は先ほどまで、現在の経過を報告するためにこの場所でジョディと話をしていた。

その電話の途中、有希子が電話口に出たことが、彼女を過去へと誘った。

『志保ちゃん、無理はしないで。最後は私がいることを忘れないで』

あの夜から今日まで有希子がどれだけ自分のことを気遣ってくれていたか、志保は十分過ぎるほどに分かっていた。

言葉にこそ出さなかったが、今日のことも最後まで有希子が代わろうとしていたのも知っていた。

それを振り切って、志保は今、ここにいる。

（感傷に浸っている場合じゃないわ）

蘭との再会を無事に果たしたことで、第一関門は突破できた。

しかし、問題はここから。

難所がいくつも控えている。

ベッドサイドに取り付けてある時計を見ると、もうすぐ13時になろうとしていた。

時間があまりないことに少し焦りを感じた志保は、すっと立ち上がり部屋を後にした。

その頃蘭は、見覚えのある部屋に佇んでいた。

『久しぶりね。蘭さん』

そう言った女性は自分をここに連れてきた後、どこかへ消えていた。

蘭は独り残された部屋の窓から見える景色を眺めながら、見えない不安と戦っていた。

これから起こることは、いや既に起こっていることなのかもしれないが、恐らく唯事ではない。

数十分前に彼女と会ってから収まる事のない胸騒ぎが、それを

予感させている。

自然と握られていた蘭の掌に力が籠った。

その時、部屋のチャイムが鳴る。

蘭がドアを開けると、そこに立っていたのは予想通り志保だった。

彼女は部屋に入ると無言でお茶の準備を始め、出来上がったものを室内に備え付けてあったローテーブルに置いた。

「どうぞ。今回は何も入っていないから安心して」

その言葉に驚いた蘭が表情を見せると、志保は苦笑いを浮かべる。

「この部屋のこと、覚えているわよね？」

蘭は無言で頷いた。

ここは、初めて彼女に会った場所だ。

あの時はどこか分からなかったが、先程窓から見えた風景でここが杯戸シティホテルだと知った。

「気付かなかった？あの時、あなたに出した紅茶には睡眠薬が入っていたのよ。あの時点で、あなたにこの場所を

知られる訳にはいかなかったから」

言い終えると志保は、入り口の側で立ちつくしていた蘭に座るよう手で促す。

そして、彼女が自分の前まで歩み寄ったのを確認すると、志保はおもむろに右手を差し出した。

「前は、ごめんなさい。宮野志保です。よろしく」

蘭は、突然名前を明かされたことに困惑しながらも、自分も右手を出して彼女の手を握る。

「よろしくお願いします」

「どうぞ。座って話しましょ」

握手していた手をゆっくりと離れた志保が座ったのを見て、蘭も慌てて座る。

そして、渴いた喉を潤すために紅茶を一口含んだ。

「さっきは、ごめんなさい。どこか痛いところはない？」

志保の問いに、蘭は首を横に振って答える。

「あそこであなたに事情を説明できる状況でもなかったし、悠長に事を進められる時間もなかったものだから。怖い

思いをさせたわよね？ 本当にごめんなさい」

椅子に掛けた状態で体を傾けた志保を、蘭は慌てて止める。

「本当に大丈夫です。心配しないで下さい」

その言葉に体を起こした相手を見つめて、蘭はずっと気になっていることに触れようとした。

「あの、それより・・・」

蘭が次の句を詰まらせていると、志保が彼女の気持ちを汲み取って後を引き継ぐ。

「そうね、本題に入りましょうか」

居住まいを正した志保が向けた視線の強さに、蘭はビクッと体を揺らした。

「まず最初に、確認したい事があるの」

志保はそこで一旦間を空けると、蘭の目をまっすぐ見据える。

「いろいろ聞きたいことがあるのは、十分分かってるわ。もう、逃げも隠れもしないから安心して」

言われた言葉に、蘭は素直に頷いた。

以前、志保と会った時もそうだったように、なぜだかわからないが彼女の言葉を信じる自分がある。

根拠など何もないのに、蘭の心はすんなり志保を受け入れている。

た。

さらに今回は、以前は伏せられていた名前を名乗ったことが、彼女への不信感を和らげていた。

「これから、私が話す事はあなたにとって・・・とても残酷なことだと思う。辛くて受け止められない現実になるかもしれない。

それでも、あなたに隠したままでは、どうしても正しいことだとは思えなかった。でも、今すぐ知る必要があるかと

いうと・・・そういうわけでもないの」

志保は自分の言葉に困惑した表情を浮かべている蘭を見て、自嘲的な笑みを浮かべる。

「何言ってるか、わからないわよね？」

躊躇いながらも頷いた蘭に、志保は核心に触れる質問を投げ掛ける。

「これから、どんな事実があなたに襲い掛かっても、それを受け止められる？」

志保はただじっと蘭を見つめて、彼女の答えを待った。

「それは・・・新一に・・・関係していることなんですか？」

しばらくの沈黙の後、蘭が震える声で問うてきた問いに、志保は一言で答える。

「ええ」

そのたった一言が、蘭の体を慄かせた。

やはり、蘭の胸騒ぎは的中していた。

志保の表情から、これから聞かされることが悪いことなのだと蘭にも容易に想像できる。

それが、最悪のシナリオだった時、自分はどうそれを受け止めるのだろう。

蘭は、これまで何度も頭に浮かんでは打ち消してきたことを考え、軽い眩暈を覚えた。

でも、このまま前に進めない状況の方がもっと嫌だった。

（知りたい。新一が今、どうしているのか）

この数週間心を占めてきた謎の答えが、目の前にある。

例えそれがどんな結末だとしても、逃げ出したくないと蘭は思った。

「約束したんです」

「え？」

脈略のないように思える彼女の返事に、志保は真意が読めずに

聞き返す。

「待ってるって。新一と約束したんです。だから、それをちゃんと守りたいんです」

真剣な眼差しで言う蘭を見つめながら、志保ははっきりとした言葉を聞くために改めて問い掛ける。

「それは、どんな現実であろうとも向き合いたいということね？」

「はい」

そう答えた蘭を前に、志保は安堵とも諦めとも取れるため息を零した。

49. 選ばれた道（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

本当は、もう少し早く投稿したかったのですが・・・ギリギリまで訂正を

掛けていて、なかなか出せませんでした。

いつになったら、納得いく文章が書けるようになるのやら・・・。

さて、今回は『現在』のお話でした。

次回はいいよ、主役が登場する予定です。

相変わらず更新スピードが遅くて申し訳ありませんが、今後ともご愛読

宜しくお願いします。

50. 突きつけられた現実

蘭の答えを聞いた志保は、ゆっくりと立ち上がり窓際へと足を進めた。

ガラス越しにみえる空は、雲ひとつない快晴。

地上では人々がせわしなく行き交い、どちらもいつもと変わらない光景が広がっている。

志保はそれをぼんやりと眺めながら、別の場所で自分達のことを心配しているであろう、有希子のことを思った。

やはり、蘭の答えは「YES」だった。

それを聞いた時、有希子はどう思うのだろうか。

良かったと喜ぶのだろうか。

それとも、蘭のこれからのことを思って泣くのだろうか。

きっと、どちらでもない。

言いようもない複雑な表情を浮かべるに違いないと、確信めいたものが志保の脳裏を横切る。

しかし、もう道は選ばれた。

後戻りは許されない。

志保はぎゅっと強く自分の体を抱きしめた後、蘭のいる方へ振り向いた。

自分の様子を不安げな表情で見ていた蘭の心情が手に取るように分かった志保は、顔が強張らないように注意

しながら彼女に声を掛ける。

「行きましようか」

今まで隠されていた扉が、蘭の目の前に姿を現した瞬間だった。

二人が再び乗り込んだ車は、杯戸シティホテルを後にし国道を走り始めた。

「あの・・・どこに行くんですか？」

「さっきも言ったけど、もう逃げたり隠したりはしない。だから、着くまでもう少し待って」

視線を合わせず有無を言わさない志保の口調に、先を知りたいという蘭の欲望が無理やり抑えられる。

今の彼女に出来る事は、早くこの車が止まるようにと願う事だけだった。

重たい沈黙が車内を支配した状態が続く事約20分、蘭は車の前方が傾いた事でどこかの地下へと入ったと知る。

目的地に近いことを察して、彼女の胸は大きく騒ぎ出した。

そして完全に停車した後、それまで黙っていた志保が蘭を促す。

「行きましょう。あなたに会って欲しい人が待ってるわ」

車から降りると、そこはどこかの駐車場だった。

二人の乗っていた車の窓はスモーク状態で、車中から外の様子を伺う事が出来なかった。

だから、自分のいる場所がどこなのか蘭には知る術がなかったのだ。

唯一分かっている事は、杯戸シティホテルからそう遠くまで移動していないという事だけだ。

蘭は他に情報はないかとあたりを見回すが、何も見つからない。

先に歩き出していた志保を追いかけて、駐車場と繋がっていた通路の奥のエレベーターに乗り込むと、蘭は消毒液に

似た匂いを感じて違和感を覚える。

（病院？）

徐々に開示される情報が不穏な空気をはらんでいて、志保と会った時から感じている胸騒ぎがどんどん大きくなって

いくことを、蘭は認めない訳にはいなくなっていた。

エレベーターが到着した場所は、鼻を掠める匂いとはかけ離れた高級感を漂わせる空間だった。

開いた扉の先に見知った女性が立っているのを目にし、蘭は思わず呼びかける。

「おば様！」

そう声を掛けられた女性は蘭の近くまで歩み寄ると、彼女の両手を握り締めた。

「蘭ちゃん・・・」

彼女の名が口から零れたものの、有希子はその先の言葉を続けられない。

志保の予想通り、複雑な表情で一時蘭を見つめていた有希子は、目線を蘭の後ろに控えていた志保に移すと、

無理やり笑顔を作る。

「ありがとう、志保ちゃん」

「いえ」

有希子の想いが伝わってきた志保は、居たたまれない気持ちになったが、ここで立ち止まっている訳にはいかない

とばかりに、敢えて事務的な口調で有希子を促す。

「では、私は例の部屋で待っています。後は、よろしく願います」

「わかったわ」

軽く一礼をして志保がその場を後にし、残された二人はもう一度視線を絡ませた。

「蘭ちゃん、本当にいいの？」

ホテルを出発する前に志保から報告を受けていた有希子だったが、どうしても自分の耳で確かめたくて再度彼女に

問い掛ける。

「もう・・・嫌なんです。ただ、待っているのは。新一のことだから、知りたいんです」

涙を浮かべてそう言った蘭を有希子はそっと抱きしめると、背中をぽんぽんと軽く叩く。

「分かったわ。でも、これだけは約束して。決して一人で抱え込まないでね。辛い事や我慢できない事があったら、

必ず私達に言って。蘭ちゃんは一人じゃないのよ」

「はい」

蘭の返事に満足した有希子は、腕から解放した彼女を真剣な眼差しで見つめた。

「じゃ、蘭ちゃん。ついて来て」

その時、有希子が一瞬見せた憂いの表情に、蘭はこれから自分が踏み入れる場所の见えない恐ろしさに震えた。

立ち籠める消毒液の匂い。

規則正しく聞こえてくる電子音。

有希子が開けた扉から蘭が最初に感じたものは、嗅覚と聴覚から得た情報だった。

「どうぞ入って。蘭ちゃん」

恐る恐る足を踏み入れて見えたのは、白いベッドの上に白い包

帯をあちらこちらに巻かれ、数本のコードに繋がれて

横たわる男性^{ひと}。

それは、まぎれもなくこの1ヶ月間、蘭の心を独占してきた人だった。

「新一！」

弾かれたようにベッドの側に駆け寄った蘭は、数ヶ月ぶりに間近で見た彼の姿に絶句する。

そして、意識せずともぽろぽろと涙が零れ落ちていた。

「し……しんい……ち？」

呼びかけても、彼からの反応は何もない。

いつも自信たっぷりで、いざと言う時頼りになるカッコイイ彼の姿が蘭の脳裏に浮かび、それが眼下の光景とあまり

にも違いすぎて触れることもできない。

刹那、蘭の体から力が抜けて、ベッドの前に膝から崩れ落ちた。

「蘭ちゃん！」

思わず駆け寄った有希子が蘭の肩を抱いて支えるが、その蘭の目に有希子が入っていない。

ただ、眠っている彼しか見えていなかった。

「し……んい……ち……」

蘭の力ない声が、部屋の中に響く。

目の前の現実に一気に血の気が引いていく蘭の体を、有希子はそっと後ろから抱きしめた。

「蘭ちゃん。ごめんね」

聞こえた言葉ではなく伝わってくる温もりが、蘭に有希子の存在を気付かせる。

「お……おば……さま。どう……して……」

零れる涙を拭う事もせず、蘭が必死に答えを有希子に求めた。

「ごめん……ね」

濡れた声で返されたのは、答えではなく謝罪。

その言葉で、蘭の涙腺は崩壊した。

蘭は、有希子に縋りついて子供のように泣き始める。

有希子もまた彼女の背中を擦りながら、声を出さずに涙してた。

蘭の嗚咽が収まった頃合を見計らって、有希子は彼女を抱えて近くにあった応接セツトの椅子に座らせると、

自分も彼女の隣に腰を下ろした。

「大丈夫？ 蘭ちゃん」

声を掛けてハンカチを手渡すと、蘭はそれを受け取り頬に当てる。

「すみません・・・」

その様子で蘭が少し落ち着いたと判断した有希子は、意を決してはじまりの言葉を口にする。

「蘭ちゃん。話をしても平気かしら？」

問いかけの意味を察した蘭もまた、覚悟を決めて静かに頷いた。

50. 突きつけられた現実（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

少し早めに投稿できて、ホッとしております。

そして、やっと我らが主役の登場です。

と言っても、彼が声を発するのはいつのことやら、わかりませんが・
・・。

さて、今回のお話を書くに当たって悩んだのが、蘭に有希子をどう呼ばせるかでした。

私は、基本的には原作に則って小説を書きたいと思っています。

この件に関して原作では、『新一君のお母さん』となっていますが、それに

従うとかなり読みづらい文章になるので、どうしても呼びやすい呼称にしたいと

考えていました。

いろいろ悩んだ結果、『おば様』が一番わかりやすいと判断しました。

今後のお話でも、この呼称で統一していきたいと思っています。

次回は、また『過去』に戻る予定です。

今後ともご愛読宜しくお願い致します。

51. 凶報

薄暗い廊下を走り抜け、たどり着いたのはICUと書かれたドアの前。

そして、その前に独り立っていたのは、松葉杖をついた金髪の女性だった。

「お待ちしておりました。工藤さん」

外見からは予想していなかった流暢な日本語を操ったその女性は、工藤夫妻を目の前にして頭を下げる。

「彼は、まだこの中にいます」

その一言が、優作と有希子にこれが夢ではないことを告げていた。

その日、イギリスは雨が降っていた。

重苦しい雲が空を覆いつくし、もう春だというのに寒さが残っている。

夕方と言える時間が過ぎ夜に差し掛かると、室内にいても気温の低下を感じるほどだった。

軽く暖房を入れたりリビングで、優作は執筆もせず本を読んでいた。

有希子は夫を気遣ってか、音量を下げたテレビをソファに座って見ていた。

しかし、二人ともその内容は全く頭に入っていない。

無意識の内に彼らの視線は、壁に掛けてある時計とドアの近くに置かれた電話へ向けられていた。

しばらくして、緊迫した空気に居たたまれなくなった有希子が腰を上げる。

キッチンからティーセットを持ってくると、紅茶が注がれたティーカップを優作と自分の前に置いた。

そして、ポツリと呟く。

「新一、大丈夫かしら？」

有希子の言葉に優作は答えることもなく、本から顔を上げて再び時計を見つめた。

以前、電話で交わした約束通り、突入に関する情報は新一から事前に連絡が入っていた。

日本時間で日付が変わったと同時に作戦が開始されると聞いている。

そして、作戦が始まってから既に3時間が経過していた。

（そろそろ連絡が入ってもいい頃なんだがな）

遅くなればなるほど、悪い事態を想定しなければならない。

不意に浮かんだ予感を払拭するかのように優作が目を閉じたのと同時に、電話のベルがリビングに鳴り響いた。

一瞬二人が目を見合わせた後、優作がおもむろに立ち上がり受話器を取る。

「Hello.」

『工藤優作さんですか？』

日本語で問うたその声は、若い女性のものだった。

「はい。そうですが」

『はじめまして。私、FBI捜査官のジョディ・スターリングと申します』

新一ではなくFBIからの連絡という事態に、優作は顔をしかめる。

『今すぐ、ご帰国願えますか？・・・息子さんが重体です』

予感的中した電話でその後の手筈を聞いた優作は、さしあた

り必要な荷物を纏め、有希子を連れてヒースロー空港へ

と向かった。

空港に到着すると、打ち合わせ通りFBIの関係者から二人のための航空券が手渡され、成田で別の担当者が待っている旨

を英語で伝えられる。

そして、異常に長く感じられたフライトを終え、二人が成田に到着するとすぐさま病院へと案内された。

連絡を受けてから、約24時間後。

それが、最愛の息子の許へ駆けつける精一杯の早さだった。

その後、まず優作と有希子はジョディの案内で面談室へと移動した。

部屋の中にいたのは、初老の男性。

彼は二人に座るように促した後、ここの病院長であると名乗った。

そして、レントゲンやMRI画像を示しながら、新一の病状に

ついでの説明がなされる。

新一は2日前、意識不明の状態で病院へと運ばれていた。

目立った外傷として、まずは骨折が全部で4箇所。

左上腕部と肋骨3本でその内1本が肺に刺さっていた。

そして、左肩には銃創も見られ、その他拳銃で撃たれたと思われる裂傷が数箇所見られた。

緊急手術により、それらの疾患に関しては全て適切な処置が施されていて、何とか一命は取り留めている。

しかし、深刻な問題が残っていた。

「傷の状態から見て、ある程度高いところから落下したかと思われる。その際にどうやら頭を強く打っているようで、

脳に損傷が見られました。手術で外科的には処置を終えていますが、意識を戻さない事にはなんとも・・・」

そこで口を濁した病院長は、目を伏せた。

堪えきれずに泣き出した有希子の肩を抱きながら、優作は彼に向かつて問い掛ける。

「目を覚ます確率は？」

「三割・・・ないと思ってください」

相手の目から嘘はないと判断した優作は、深いため息をついた。

（やはり、止めておくべきだったのかもな）

息子を止めるチャンスは何度もあった。

初めて阿笠博士から状況を聞かされた時は、誘拐事件まで偽装して外国へ連れ帰ろうとした。

その時、『これはオレの事件だ』と真剣な眼差しで訴えた彼のことを、取り敢えず信じてやらせてみようと思った。

危険だと認識したら、泣きついてくるだろうと推測して。

しかし、息子は想像を超える決意を持っていたようだった。

結局、彼がこの事件を諦めることも、父親に泣きついてくることもなかった。

そして、FBIと協力して組織に突入する計画を立てるところまで漕ぎ着けたのだ。

成長著しい息子を誇らしく思うと同時に、調べれば調べる程危険な連中を相手にしているという事実が、優作を

悩ませた。

本当に、このままやらせていいのかと。

だが、息子は自分の体を取り戻すだけでなく、大切なものを守りたいが為に必死になっている。

それが優作も十分にわかっていたからこそ、ここまで引き止めずにきたのだ。

その結果がこれだ。

突きつけられている現実には、後悔と責任を感じずにはいられない。

優作は隣で泣き続けている有希子にハンカチを渡すと、病院長へ声を掛けた。

「息子に会えますか？」

先ほど来た道に戻り、二人は再びICUの扉の前に立っていた。

中に入り看護師の指示に従って、専用のガウンを着用し靴を履き替え、手洗いを行う。

そして案内された先に、小さな体に肌が見えないほど多くの包帯が巻かれ、両腕から点滴を打たれている痛々しい

息子の姿があった。

事前に話を聞いていても、直接対面した時の動揺は抑えきれない。

唯一の救いは、心電図モニターから聞こえる音が規則正しいことだった。

「新一・・・」

ベッドの前で呆然と息子を見つめていた有希子の瞳から、再び涙が零れ落ちる。

そして彼の手を握り、その場にしゃがみこんだ。

優作もまた、息子の様子をただ黙って見つめていた。

彼が高校生になり、優作と別々に暮らすようになってから、こんなにじつくりと息子の顔を見たことはなかったように

思う。

体こそ子供だが、顔は少し大人になった観が伺えた。

その様子を見て、優作は今し方の己の考えを反省する。

（後悔など後でもできるな）

息子は、自分の身に突然起こった数奇な運命を真正面から受け止め、力の限り戦った。

そして今、必死で生きようとしている彼の為に何が出来るのか。

それを考えるのが、危険を承知で彼を送り出した自分がするべきことだと思いついた優作は、今以上の情報を仕入れる

ために動き出した。

51. 凶報（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

このお話もとうとう50話を超え、本当に長編となって参りました。書き始めてから1年半が過ぎ、一体いつになったら終われるのかと、執筆しながら

思っているのですが、構想上はようやく半分を超えたといったところでしょうか。

スローペースな更新で、読者の皆様には大変ご迷惑をお掛けしておりますが、

できるだけ良い作品をお届けできるように努力しておりますので、今後とも

ご愛読頂ければ幸いです。

さて、次話は『現在』に戻ります。

蘭、志保、有希子以外にもう一人、しばらくお目見えしていない人物が再登場

する予定です。

只今、必死で執筆しておりますので、もうしばらくお待ち下さいね。

52. 各々の覚悟

有希子はあの日の出来事を思い返しながら、ゆっくりと蘭に話し聞かせていた。

起こった事実だけを正確に。

そして、そこへ至った経緯を伏せて。

蘭は聞こえてくる情報を受け止めながら、涙を止める機能を失ったかのようにただ無言で泣き続けている。

有希子自身も医師から話を聞いた時は、絶望せずにはいられなかった。

だからこそ、蘭がどんな思いでいるかがよくわかる。

それでも、現状を包み隠さず彼女に伝えることが、今はなによりも大切だと言われた優作の言葉を胸に、先を続ける。

「新一がいつ目を覚ますかは、今の医学ではわからないらしいわ。明日かもしれないし、1週間後、1ヵ月後、1年後・・・」

10年後かもしれない」

有希子は蘭からベッドの上で眠っている息子へと視線を移した。

「もしかしたら、一生このままかもしれない」

その言葉に、思わず蘭は顔を上げて彼女を見つめる。

「ごめんね。辛い思いをさせてしまっ」

膝の上で固く握られていた蘭の手に、有希子の手がそつと重なった。

「蘭ちゃんのこと・・・考えたわ。知らせるべきかどうか、とっても悩んだ。これ以上あなたに辛い思いをさせたくなかった。

でも、いつ目覚めるか分からない現状で、蘭ちゃんに事情も知らせず待たせるなんて酷だと志保ちゃんに言われたの」

意外な人物が話に挙げったことで、蘭の潤んだ目が大きく開かれる。

「え・・・彼女が？」

「そう。彼女に言われて、その通りだなんて思ったわ。だって、私が蘭ちゃんの立場だったら知りたいと思うもの。だから、

蘭ちゃんに真実を話そうって思ったのよ」

少し微笑んで見せた有希子は、最初にこの病院で会った時から姿形がすっかり変わってしまった息子に聞かせるように、

彼女の予感を口にした。

「それにね、蘭ちゃんの声なら新一に届くような気がするの」

「えっ・・・？」

「新一は、いつも蘭ちゃんが笑顔でいられるようになって一生懸命だったから。だから、蘭ちゃんが悲しんでいる事を知ったら

目を覚ますんじゃないかと思うのよ」

驚いた表情を見せる蘭へ、有希子は熱い眼差しを向ける。

「新一は、蘭ちゃんのためなら奇跡も起こせると思うわ。親の勝手な希望にあなたを巻き込んでいるのは、よくわかって

いるのよ。でも、お願い蘭ちゃん。新一の側にいてくれる？」

「わた・・・し・・・私で・・・いいんですか？」

戸惑いつつ紡ぎ出された彼女の言葉に苦笑して、有希子は応接セツトのテーブルの上に置いてあったものを蘭に差し出す。

「これ・・・」

それは、1ヶ月ぶりに目にした蘭にとって思い入れの強い代物だった。

「新一がここに運ばれた時、右手に握り締めていたんですって。これくれたの、蘭ちゃんでしょ？」

蘭は有希子から手渡されたそれを胸の前で強く握り締めると、小康状態だった涙が再び零れ落ちた。

「新一が・・・ボロボロの状態であつても生きて帰ってこれたのは、蘭ちゃんの気持ちが詰まったそのお守りのおかげだわ。」

きつとあの子は、蘭ちゃんのところに戻りたいって強く思ってたのね。だから今、新一が必要としている人は蘭ちゃん以外

にいないでしょ？」

手の中にあるお守りから新一のぬくもりが伝わってくるようで、涙が溢れては頬から滑り落ちる。

泣きすぎで飽和状態になっていた頭を駆使して有希子の言葉を咀嚼した蘭は、自分の想いを伝えるために有希子に向き

直った。

「私・・・私に出来る事は何でもします。新一のために出来る事があるなら・・・。だから、お願いします。側にいさせて下さい」

「ありがとう。蘭ちゃん」

涙に濡れた瞳に少しの希望の光を宿した蘭を有希子はそっと抱きしめた。

ひとしきり泣いて少し落ち着きを取り戻した蘭は、有希子にここ数週間の謎の答えを求めた。

「おばさま。教えてもらえませんか？・・・・・・新一に何があったのか」

その問いに、有希子は目を伏せた。

彼女はまだ、迷っていた。

この先を蘭に話すのは、誰であるべきなのか。

初めて志保と会った日のことが蘇る。

ドアの隙間から見えた息子の様子に動揺し、自らを責めながら涙を流した彼女が示した決意。

『これまでのことを工藤君に代わって、私が蘭さんに話そうと思っています。本来ならば、彼が自分の口から話したかった

でしょうが、今の状況を考えるとそれは不可能です。であるならば、私が話すべきです。彼と蘭さんを巻き込んでしまった

私が、その役目を負いたいと思っています』

志保からそれを聞いた時、どれほどの決意を持って日本に戻ってきたのかが伺えて、有希子は切なくなった。

志保だって、いわば巻き込まれた被害者だ。

彼女は生まれたときから、その人生を強制されていたのだから。

それでも、彼女は自分を許せず、新一達に対して大きすぎるほどの罪悪感を抱えている。

これ以上志保が咎められることなどないはずだと有希子は思っていたが、志保はそれを望んでいる。

そして、詳細に正確にこの1年のことを話せる人間は志保以外にいないことも事実だった。

（私も、覚悟を決めなくちゃいけないってことね）

蘭が全てを知ったとき、どれだけ傷ついたとしても。

志保が全てを話した後、どれだけ打ちのめされたとしても。

二人を支えてやる事が、自分の役目だ。

それぞれが、この忌まわしい事件を乗り越えるために必要なことだと信じて。

有希子は深く息を吐き出すと、蘭に打ち合わせしていた通りの台詞を伝える。

「それに関しては、志保ちゃんが話したいって言うてるの。でも蘭ちゃん、明日にした方がいいんじゃない？」

それは、散々泣き尽くした蘭を氣遣ったの言葉だった。

「蘭ちゃんは、今初めて新一の状況を知ったわけだし、無理して全てを聞くと辛いと思うの。だから、今日はゆっくり休んで、

また明日話の続きをしましょう」

しかし、蘭はそれに頷くことはなかった。

「知りたいんです、新一に何があったのか。ちゃんと、聞きたいんです。それにこのままじゃ、かえって気になって眠れないと

思うし・・・」

蘭が心配で仕方ない有希子だったが、蘭の希望は出来るだけ叶えてあげたいとも思っていた。

「本当にいいのね？」

頷いて見せた蘭の手を有希子が握り締める。

「わかったわ。蘭ちゃんと志保ちゃんが話し終わるまで、私はここで待ってるから。辛くなったら、途中で止めてもいいから。

お願いだから、無理はしないでね」

「はい」

彼女の返事を聞いてから、有希子は蘭を志保のもとへと案内すべく立ち上がった。

同じく腰を上げた蘭は、眠り込んだまま新一の顔をしっかりと

見つめた後、有希子の後を追って部屋を出て行った。

蘭と有希子を引き合わせた後すぐ、志保は待機すべき部屋に戻る前にある場所へ立ち寄っていた。

ドアをノックし返事があったことを確認すると、部屋に入る。

彼女の顔を見るなり、ベッドに横たわっていた色黒の少年は体を起こした。

「戻ってきたんか。毛利の姉ちゃんは？」

「今、有希子さんと一緒に工藤君の病室に」

志保は平次のベッド横にある椅子に座って端的に答えると、その答えに安心したのか彼は少し表情を柔らげた。

平次は新一同様、作戦が終了した段階で多くの傷を負い、病院へと収容されていた。

右足の骨折及び、爆発による火傷や擦過傷などが見られ重傷ではあったが重体ではなかったため、意識不明になることも

なく、入院してからもFBIと共に残務処理を行っていた。

志保は帰国して以来、毎日この部屋を訪れている。

それは、新一ほどではないが、平次に対しても巻き込んでしまったという思いが拭えない彼女が、せめて今の自分にできる

ことはしたいとの思いがさせるものだった。

しかし、今日は朝からこの計画のことでバタバタしていて顔を出していなかった。

そのせいか、この部屋に入るたびに口になっている決まり文句が自然と口について出る。

「体調はどう？」

「そんな、毎日毎日聞かんでも、たいした変化はないやろ？元々、体力には自信あるしな、平気や」

苦笑いを浮かべて答えた平次は、すぐに表情を真剣なものへと変える。

「あんたは、大丈夫なんか？」

志保は問われた質問の意図に気付かない訳ではなかったが、心配されたくもなかった。

「大丈夫よ。まだ、何も話せていないし……。今は有希子さんが、彼の病状を説明しているところだと思うわ」

彼女が強がっていることに気付きながらも、励ますことを望んでいないと察した平次は、話の方向を転換させる。

「なあ。頼みがあんねんけど」

「何？」

「あんたの話が終わってからでええから、姉ちゃんをここに連れてきてくれへんか？」

何か必要なものがあるのかと思って尋ねた志保は、予想を裏切る答えが返ってきたことに驚きを隠せない。

「オレ、あの姉ちゃんに『工藤は必ず連れて帰って来たる』て約束してたんや。そやから、謝まらなあかんねん」

平次が蘭とそんな約束をしていることを知らなかった志保は、絶句した。

まさか、自分と全く同じ言葉を彼女に掛けていたとは夢にも思わなかった。

そして、そのことで彼が罪悪感を抱えている事も。

全ての原因は自分にあるが、彼と彼女がした約束について、志保が口出しをする権利はない。

だが、やっぱりいろんな人達に悪影響を及ぼしている現実が、志保を苦しめていた。

「・・・わかったわ」

「すまんな」

彼の返事を聞くや否や、志保は立ち上がり部屋を後にした。

逃げ出すように彼女が出て行ったドアを見つめながら、平次もまた天井を見上げて小さく息を吐き出した。

待機用の部屋に戻った志保は、つい先ほどの自分の行動を振り返り嘲笑を浮かべた。

あの部屋にいるのが辛くなって逃げたことを、きっと平次は気が付いただろう。

そうなるかわかっていても、平然を装うことはできなかった。

薄く笑った自分をかすかに映す窓から見える雲ひとつない空の袂が、紅く染まり始めている。

彼が一番大切にしていた女性ひとが真実を知るまであと少し。

もう間近に迫っているその時を前に、志保は徐々に激しくなる鼓動を落ち着かせることもできずに、空を眺めるしか

なかった。

52. 各々の覚悟（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

予告通り、平次も登場させられてホッとしております。

そして、またまたサブタイトルに悩みました・・・。

タイトルも52個目にもなると、同じような言葉が浮かんでしまっ
てなかなか決められないものです。

文章と合っていないかも知れませんが、ご了承下さい。

さて、今回はいつもよりも長い文章となりました。

というのも、来月・再来月は年末年始ということもあり、プ
ライベ
ートが

忙しくなりそうで、それでも遅い更新速度が今よりもさらに
遅くなる

可能性が高くなってしまいました。

と言う事で、書けるところまで書いてみた結果が、今回のお話です。

次話は、できるだけ早くお届けしたいのですが・・・忙しい上に志
保の台詞に

悪戦苦闘中で、ちょっと間が空いてしまいそうです。

申し訳ございません。

ご迷惑をお掛けしてしまいましたが、見捨てずにご愛読頂ければ幸い
です。

今後とも宜しくお願い致します。

53. 真実を知るとき

有希子が蘭を連れてやってきた部屋は、1週間前に工藤夫妻と志保が話をしたあの部屋だった。

ノック音に反応して開けられた扉から、志保が顔を覗かせる。

「やっぱり、今・・・なんですね？」

最初から、今日のことは蘭の状態を最優先に考えられていた。

蘭が取り乱したり、状況を受け止められない状態になった場合は、日を改めることになっていた。

しかし、蘭は志保の予想通り、今日全てを知ることを選んでいった。

「ええ。どうしても、全部聞きたいそうよ」

有希子の答えを受けて、志保は扉を全開にし蘭を中へと招き入れる。

「蘭さん。どうぞ」

蘭はその言葉に無言で従い、部屋へと足を踏み入れた。

その様子を不安げに見詰めていた有希子は、最後にもう一度蘭に忠告する。

「蘭ちゃん。無理しちゃダメよ」

「はい」

振り向いて頷いた蘭に満足した有希子は、新一の病室へと戻っていった。

その背中を見送った志保はドアを閉めると、用意してあったコーヒーを持って、自分も蘭の正面の椅子に座る。

「本当に、大丈夫なの？」

「はい」

まっすぐに志保を見る蘭の目は、どれだけ泣いたのか想像できるほど腫れていた。

それでも、聞きたいという強い思いが彼女を動かしているのだと志保は思った。

「まずは・・・」

再び立ち上がった志保は、蘭の前で体を90度に折り曲げる。

「ごめんなさい」

「え？」

「あなたとの約束、守れなくて」

「約束?・・・あっ・・・」

一瞬意味がわからないという表情を見せた蘭だったが、すぐにある記憶が呼び起こされたようだった。

『私が必ず、彼をあなたの元へ返すから・・・無事に連れ戻すから』

初めて会った時、何がなんだかわからない状態で話をしながら、志保が蘭にした約束。

志保はそれを守れなかったことを謝っているのだと、蘭は理解した。

「最初に謝らなければならなかったの。許してもらえらると思ってないわ。ただ、本当にごめんなさい」

顔を上げることなくただ謝罪を繰り返す志保に、蘭は居たたまれなくなる。

「顔を上げてください」

思わず立ち上がった蘭が、志保の肩に手を掛けた。

「それよりも、聞かせてください。新一に何があったのか」

志保は謝罪よりも真実を知りたいことを望んでいる彼女の希望をかなえるべく、ゆっくりと体を起こした。

「その前に、少し私の話をしてもいいかしら？」

腰を下ろしてコーヒーを一口含んだ後、志保は静かに問い掛ける、

そして、蘭が頷いたのを確認すると、少し間を取りながら話し始めた。

「私は・・・生まれた時から、普通の生活を送った事がなかった。普通に学校に通って、友達と遊んで、それなりに

勉強して・・・そんな当たり前の生活をしたことがないの。

その理由は、私の両親の職業が普通じゃなかったから。

両親はある組織に属していて、私達はその監視下で生活していたのよ」

突然思いも寄らなかった話が展開されていくことに、蘭が戸惑いの表情を浮かべていたが、それを気にする事なく

志保は話を進める。

「両親は科学者で、その組織である研究に携わっていたんだけど、私を産んだ後すぐに事故で亡くなったらしいわ。

そして、どうしても研究を完成させたかった組織は、私に両親の後を引き継がせることにしたの。で、その組織と

というのが・・・3週間前に報道された、世界的な犯罪組織よ。
今は・・・ほぼ壊滅状態だけだね」

聞こえてきた内容は衝撃的なものなのだろうが、蘭の心には驚きというよりやっぱりという気持ちが沸き起こる。

彼女は、報道を見た時感じた自分の予感に対する正解をもらった気分だった。

「私は、組織に命じられるまま研究を続けたわ。そして今から半年ほど前、事件が起きた。私のたった一人の姉が

・・・殺されたの」

淡々と語られる彼女の生い立ちは辛い出来事ばかりで、どう受け止めていいのかわからずに蘭が困惑していると、

彼女の耳に意外な事実が飛び込んでくる。

「姉のことはあなたも知ってるはずよ」

志保に言われて、蘭は目を見開いた。

別世界のような志保の人生と自分に接点があるなんて、蘭は考えもしていなかった。

そして、必死に過去の出来事を振り返るが、思い当たる女性はいない。

その様子を黙ってみていた志保が、あるキーワードを蘭に告げる。

「そうね。あなたには、『広田雅美』という名前の方がわかりやすいかしら？」

「『広田雅美』……って、まさかあの10億円強奪事件の……？」

蘭の記憶から、忘れかけていた後味の悪い事件が浮かび上がった。

「ええ。その名前は偽名で、本名は『宮野明美』。姉は私を組織から抜けさせるために、組織に命じられてあの

事件を起こした。そして、利用されて殺されたの」

「そんな……」

あの事件は確かに悲しい事件だったけれど、その裏にとんでもなく大きな組織が絡んでいた事実、蘭は驚かず

にはいられなかった。

「姉が死んだ理由を、いくら問いただしても組織は教えてくれなかった。だから私は対抗手段として、正式な回答

が得られるまで研究をボイコットしたの。でも組織に歯向かった私は殺されかけ、どうせ殺されるならと自分が

開発した薬を飲んだ」

「その薬って・・・？」

話の中で何度も登場してくる『薬』の内容がわからず、蘭は志保に問い掛ける。

「私が作った薬は、人間を死に至らしめることができるものよ。ただ、ごくまれに細胞の自己破壊プログラムの

偶発的な作用で、神経組織を除いた骨格・筋肉・内臓・体毛それら全ての細胞が幼児期の頃まで後退化する

反応を起こすことがあったの。・・・ここまで言えば、気が付くんじゃない？」

志保が言った言葉の中で、蘭が引っ掛かった一言。

「幼児期・・・」

そう呟いた後、考え込んだ蘭を志保は黙って待った。

蘭の頭の中では、その言葉をきっかけにもう一つ浮かんでいた出来事があった。

志保と初めて会った時の違和感。

（どこかで会ったことがあるような気がしたのは、どうして？）

「杯戸シティホテルで初めてあなたに会った時、あなたは私に

『どこかで会った事があるか』と聞いたわよね。

覚えてる？」

正に今思い起こしていた事柄を志保に尋ねられ、蘭が頷いてみせる。

「その時は答えをはぐらかしたけど、あなたの言葉の通りよ。私は、あなたと何度も会って話をしていたの。」

ただし、その時は別の姿で、別の名前だったけどね」

苦笑した志保から与えられたヒントが、蘭の中で混在していたピースを一つにした。

「まさか・・・あなた・・・」

その表情から彼女は答えを導き出したと判断した志保は、正解を口にする。

「そう。私は・・・『灰原哀』よ」

息を吸うには少し大きく開かれた口の前に手を当てた蘭の時間ときが、一瞬止まった。

そして、僅かに首を振る。

「そんな・・・そんなことって・・・」

「普通じゃ考えられないわよね。だからこそ、私は今日まで生

きてこられたのだと思うわ。そして、組織に顔を

知られている私が殺されずに済んだ理由は、もう一つ。・・・
助けてくれた仲間がいたから」

「仲・・・間？」

「その仲間が誰なのか、それは・・・私が『灰原哀』と知って、
思い当たることがあるはずよ」

彼女の言葉が凶星であることを示すかのように、蘭の体に振動
が走る。

「やつ・・・ぱり・・・コナン君は・・・」

これから、知らされる答えを彼女はとう受け止めるだろうか。

でも、これを告げずにこの先の話を続けるのは無理だ。

志保は蘭からも自分からも逃げないように、背筋を伸ばし蘭を
見据えて、最後の一言を発した。

「そう。『江戸川コナン』は・・・『工藤新一』
よ」

53. 真実を知るとき（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

やっぱり、投稿が遅くなってしまいました。

申し訳ございません。

今回は、1日に取りれる時間が少なかったのがありますが、かなり日数が

掛かりました。

それでも、満足のいく出来ではないのですが・・・、楽しんでいただけると

嬉しいです。

次話の投稿は、年明けになります。

できるだけ早いうちにお届けできるように努力したいと思っています。

この1年、多くの方に読んで頂けて本当に嬉しかったです。
心より感謝申し上げます。

来年も頑張って参りますので、ご愛読宜しくお願い致します。

54. 告白（前書き）

更新が大変遅くなりましたこと、お詫びいたします。

54. 告白

言葉を失って呆然としている蘭は、固まったまま動かない。

もうすぐ姿を消そうとしている紅く染まった太陽が、そんな彼女に影を落としていた。

志保はおもむろに立ち上がると、蘭がこの部屋を訪れた時からかなり明度が下がった部屋を明るくするために、

ドアの傍にある電気のスイッチを押す。

蛍光灯が光を放ったと同時に、蘭の思考は現実世界へと呼び戻された。

その彼女にじっと潤んだ瞳で見つめられた志保は、伝え足りない言葉を紡ぎだす。

「『工藤新一』の行方がわからなくなった日のこと、覚えてる？」

「あの・・・トロピカルランドの？」

「そう。あなたと遊びに行ったトロピカルランドで殺人事件を解決した後、彼は組織の取引現場を目撃し、そこで私が

開発した薬を飲まされたの。死体から毒が検出されない完全犯罪が可能な毒薬として、その時組織の連中が所持

していたから。でも、偶然にも彼の体はその動きを止めずに幼児化した。そして、『江戸川コナン』が誕生したって訳」

蘭が何度も『新一』と『コナン』が同一人物なのではないかと疑った理由の一つが、新一がいなくなった日にコナンが

突然現れたことだった。

その勘も当たっていたのだと知った蘭だが、当然のことながら嬉しいという感情は湧き上がってこない。

何よりも彼が殺されかけていた事実、急激な寒気が彼女の体を襲っていた。

「そして、その日から彼の戦いは始まったわ。『工藤新一』を取り戻すためのね。『江戸川コナン』の正体がばれれば、

その秘密を知っている人間にも危害が及ぶと判断し、彼はごく一部の人間以外にその事実を話さなかった。それは

正解だったわ。仮にあなたが真実を知っていたら、彼の正体がばれた時確実に組織に消されていたから」

自らに身の危険が迫っていたという事実を聞かされてても、蘭はそれを理解することは出来なかった。

そして、彼の判断をありがたいと思えなかった。

「そして彼は、正体を隠したままいずれ組織の情報が入ってくるかもしれない、探偵事務所を開いているあなたの家

に居候することにしたの。でもそれは、単に情報を掴むためだけでなく、あなたを・・・あなたと毛利探偵を組織から

守りたかったからでもあったと思うわ。・・・それからの1年間、彼は自分の体を取り戻すために必死だった。そのせい

で、何度危ない目に遭ったかしのれない。それでも、彼が諦めることはなかった。全ては、あなたの為よ。待たせている

あなたの許へ戻るため。あなたとの約束を果たすためだった」

切々と語り続ける志保に対して、『コナン』の正体を知ってから反応に変化を表さない蘭の様子に、彼女の心情が読み

取れず志保は不安を覚える。

「怒ってる・・・わよね？」

弱弱しい声で言った志保に、ようやく表情を変えた蘭は困った顔で志保を見つめた。

「お願いだから、工藤君のことは責めないでね。彼は、間違った事はしていない。ただ、目の前で起こった犯罪を見逃せ

なかっただけなのよ。真実を追い求める探偵だから。それに彼がそういう人だから、あなたは・・・工藤君が好きなんで

しょ?。」

悲しそうに微笑んだ志保を見た蘭の心に、小さな棘が刺さる。

その棘が何なのか、今の蘭には考える余裕もなく、ただ耳から入ってくる言葉を消化するためだけに彼女の脳は動いて

いた。

「それに彼は、何度あなたにこの事実を伝えようとしていたわ。『工藤新一』を心配して、泣いているあなたを見る度に

ね。だから本当は今、私が話しているこの内容も自分で伝えなかったはずよ」

志保は新一のこの一年間を代弁するために、必死に蘭へ訴えかける。

「そして、それを何度となく止めてきたのは私。あなたが真実を知れば、それだけ危険が近くなる。私は、もうこれ以上

誰も傷つけたくなかった。だから、彼を止めたの。例え、どんなにあなたを苦しめることになったとしても……。だから、

あなたが怒りをぶつける相手は、彼でなく私よ。あの薬を開発し、彼を幼児化させ、さらにその事実をあなたに伝える

ことを許さなかった私なの」

そこまで言い終えると、志保は再び立ち上がり蘭に向かって頭を下げる。

「本当にごめんなさい。あなたの・・・彼と楽しく過ごさずだった時間を奪って。彼との思い出をたくさん作れるはずだった

『17歳』の時間を奪って。その上、彼をあんな目に遭わせてしまつて・・・本当にごめんなさい」

無言のまま自らの体を抱きしめている蘭の表情からは、明らかに疲れと困惑が見て取れる。

ゆっくりと体勢を元に戻した志保は、これ以上話を続けるのは無理だと判断した。

「今日は、ここまでにしましょう。何か知りたいことがあれば、遠慮なく聞いて。何でも答えるわ。それから、今後のことも

話をしておかなくちゃいけないから、明日の午後にも時間もらえるかしら？」

コクンと蘭が力なく頷く。

「じゃ、有希子さんと呼んでくるわね」

そう言つてドアノブに手を掛けた志保の耳にか細い蘭の声が聞こえた。

「あの・・・っ」

振り返ると、先ほどまで放心状態だったはずの蘭が、立ち上がつてまっすぐに志保を見ている。

そして、予想だになかった言葉が投げ掛けられた。

「ありがとうございます」

先ほどの蘭とさして変わらない程、混乱した顔の志保へ蘭は礼の理由を述べる。

「知らせてくれて、話してくれて・・・本当にありがとうございます。ちょっとまだ混乱してて・・・どうしていいのかわからない

んですけど・・・でも、もし新一に起こっていたことを知らずにこのまま過ごしていたら・・・って思うと、そんなこと耐えられ

ない。それだけは、確かなんです。だから・・・」

懸命に何かを伝えようとする蘭の心の純度があまりにも自分とかけ離れすぎていて、それを目の当たりにした志保は彼女

を見ることがすら辛くなる。

「お礼なんて・・・あなたに言ってもらえる資格はないわ。私には」

蘭の言葉を遮って、志保は足早に部屋を後にした。

有希子と話をつけた後、新一の病室を出た志保は平次の病室の

前を通り過ぎて、彼との約束を思い出す。

これ以上蘭を混乱させたくはなかったが、彼との約束も破れない。

ひとまず、彼女に事情を話さなければと考えながら志保が再び部屋のドアを開けると、先程まで座っていた椅子から離れ、

蘭が窓際で外の景色を眺めていた。

ドアが開いた音で振り返った蘭と目が合った志保は、話を切り出そうと声を出す、同時に彼女の声も聞こえてくる。

「あのね・・・」

「あの・・・」

お互いの声に一瞬沈黙が生じた後、志保が蘭へ言葉の先を促す。

「なに？」

「えっと・・・」

蘭も志保の言葉が気になって先を続けられずに、再び沈黙が部屋を包み込んだ。

「遠慮しないで言って。私も、あなたの話を聞いた後にちゃんと言うから」

蘭を安心させるように微笑みを添えて言った志保は、彼女の言

葉を待つ。

蘭は少し逡巡した後、恐々と口を開いた。

「あの……服部君はどうしてるんですか？」

どんな事を言われるのか内心ドキドキしていた志保は、同じ事を言おうとしていた事実を知ってホッとする。

「彼の事を聞きたかったのね。私も、彼の事話したかったのよ。あなたに会いたいわって言ってるんだけど、今から会う？それ

とも、明日にする？」

志保の問い掛けに蘭は間をあげる事なく即答した。

「今すぐ会います」

「彼の病室はここよ」

蘭が志保に連れてこられた場所は、新一の部屋から少し離れた場所だった。

「ゆっくり話をしてもらっていいわよ。私は車を手配した後、ここで待ってるから」

志保はそう言って、近くにあった椅子を指差した。

「わかりました」

彼女の返事を確認した志保がそのまま廊下を歩き去り、独り残された蘭は小さく深呼吸をする。

そして、軽くドアをノックすると、覚えのある声が聞こえてきたことに少し安堵した。

ゆっくりとドアを開けて見えたのは、色黒の少年が体を起こして蘭に視線を向けている姿だった。

「服部君・・・」

蘭の泣きはらした顔に思わず目を逸らした平次は、彼女にベットの横の椅子に座るように伝える。

たどたどしい足取りで近づいた蘭は、彼の吊られた足や包帯だらけの腕に釘付けになった。

平次は、そんな彼女の様子に気付かない振りをして話を始める。

「ほんまに、悪かった」

平次からの突然の謝罪で既視感を覚え、蘭はただ呆然と彼を見つめていた。

「あんたとの約束守れへんかった。工藤をあんな目に遭わせてしもうて、オレがついていながら・・・すまん」

いつも明るく活気溢れる平次から聞いた事も無い弱弱しい声に、蘭は小さく首を振りながら答える。

「ごめん、服部君。私・・・さっき初めて新一に何があったのかを聞いて・・・まだ混乱してるの。だから、今はまだ・・・

ごめんなさい」

「そら、そうやな。こっちこそ、悪かったな」

さらに困った顔をした平次に蘭はもう一度首を振った後、心の底から絞り出すような声をあげた。

「良かった・・・。服部君が無事で、ほんとに良かった。服部君に何かあったら、私・・・和葉ちゃんに顔向けできないもの」

その言葉に目を丸くした平次に向かって、蘭は彼に会いたかった動機とも言える質問を口にする。

「服部君。どうして和葉ちゃんに連絡してないの？」

有希子を呼びに志保が部屋を出て行った後、混乱した蘭の頭に浮かんできたのは、西にいる親友の顔だった。

そして、平次のことを思い出したのだ。

志保がした話の中に、平次の名前は一度も挙がらなかった。

だから、戻ってきた志保に確認した。

すると、平次も自分に会いたいと言ってるという。

という事は、彼は無事で会話が出来るのだ。

知った瞬間、蘭には疑問が浮かんた。

なぜ、和葉に連絡が入っていないのか。

口が利けない新一とは違って、平次は少なくとも意識がある状態のはずだ。

それなのに、彼をひたすら待っている和葉に連絡しないとはどういうことなのかと。

だから、その真相を確かめなければならないと思った。

自分と同じように、眠れない日々を過ごしている彼女の為に。

蘭の問いかけに、平次は思わず言葉を詰まらせた。

新一のことでどれだけ責められてもいいと覚悟していたが、まさか和葉のことを持ち出されるとは思っていなかった平次に

としては、痛いところを突かれた状態だ。

言い訳も言えずにいると、蘭が涙を湛えながら訴えかける。

「連絡してあげて。和葉ちゃんがどれだけ心配しているか、わかってるでしょ？お願い、服部君。すぐに和葉ちゃんに電話

してあげて」

蘭の言葉に平次の口から思わず苦笑が漏れる。

この東の名探偵の幼馴染は、明らかに自分のことで手一杯であるだろうに、それでもなお自分達のことを心配している。

こんな時くらい、他人のことなど気にしなくてもバチなど当たらないのに。

だからこそ、今眠っている親友は彼女のことが愛しいのだろうが。

必死に哀願する蘭を見て、平次は観念したように頷いた。

「わかった。姉ちゃんが帰ったら、和葉に連絡するわ」

「ほんとよ。絶対ね。約束よ」

何度も念押ししてくる蘭に、平次は再び苦笑いを浮かべる。

「ああ」

「よかった・・・」

彼の返事にホッとした蘭の瞳から、新しい涙が溢れてくる。

「頼むから、泣かんでくれ。工藤に殺されるわ・・・」

その言葉に驚いた蘭は、泣き顔からすこし笑みを見せた。

54. 告白（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

遅くなって、本当にすみません。

1月中に更新しようと思っていたのですが、予想以上の忙しさに重なって、

体調を崩してしまい、1ヶ月以上も空けてしまう結果となってしまいました。

お待たせして、申し訳ございません。

次回こそは早くお届けしたいと思っているのですが・・・今回ほどではない

にしろ、少し時間がかかってしまいそうです。

ご了承下さい。

相変わらずなスローペースの更新になるかと思いますが、今年1年もどうぞ宜しくお願い致します。

55. 葛藤

わずかに気分を浮上させ、平次の病室を出てきた蘭を待ち構えていたのは、志保ではなく有希子だった。

「おばさま・・・」

「どうして驚くの？独りで帰したりしないわよ」

笑顔を見せながら立ち上がった有希子は、蘭の背中にそっと手を添えた。

「行きましょ。小五郎君たちにも説明しないといけないでしょ？」

「えっ！？でも・・・」

「もちろん、事情は話せないわよ。それが出来たら、蘭ちゃんから直接言ってもらってもいいもの。出来ないから、私が

一緒に行くの」

それは先ほど、平次の病室へ行く道すがら志保に忠告されたことだった。

『このことは、しばらくの間誰にも言わないで。お友達はもちろん、ご両親にも。さっきも言ったけど、知れば危険が及ぶ

可能性があることを忘れないで』

だから、両親にも涙の訳を話せない。

それなのにこの顔で帰って、事情を話さずにやり過ごす自信は蘭にはなかった。

「ありがとうございます」

「お礼を言ってもらわなければならないのよ。それは、私の台詞」

そう言うと、有希子は急に表情を真剣なものに変えて蘭を見つめる。

「あの子を信じて、待っていてくれて、本当にありがとう」

その言葉が、今日何度目になるわからない涙で蘭の頬に一筋の跡をつける。

でも、それは彼女にとって決して悲しさを意味するものではなかった。

蘭は首を大きく横に振ると、涙を拭いて有希子に笑顔を向ける。

彼女の笑顔に満足した有希子は唇に柔らかい笑みを乗せると、再び蘭を促してエレベータへと続く廊下を歩き出した。

探偵事務所に着いた二人は、ゆつくりと階段を3階まで上がりチャイムを鳴らす。

顔を覗かせたのは、小五郎という予想を裏切り英理だった。

「おかえりなさい」

思いも寄らない人物の登場に驚いた蘭は、泣きはらした顔を見られまいと思わず俯いてしまう。

その様子に異変を感じた英理は娘の顔を見ようと覗き込むが、陰になって表情を読み取る事ができない。

「蘭？」

呼びかけに応えることもできず、かと言ってこのままでもいられないので、蘭は仕方なく靴を脱ぎリビングに向かう。

蘭を追いかけてきた英理とテレビを見ていた小五郎は、そこで見た娘の状態に息を飲んだ。

「蘭・・・」

声を上げた英理の言葉を遮るように、リビングに上がってきた有希子が蘭に声を掛ける。

「蘭ちゃん。今日はゆつくり休んで。明日、目が覚めたら連絡してね」

蘭は背中で受けたその言葉に頷いて、そのまま自室へと引き上

げていった。

「ちょっと、有希子。どういうこと？」

英理からの鋭い眼差しを受けた有希子は、珍しく固い表情を見せる。

「下の事務所で話さない？」

彼女の提案に異議を唱える者はなく、三人は二階へと足を進めた。

「どういうこと？ 蘭に何があったの？」

有希子から電話をもらって事務所で待つように言われた時から、英理は胸騒ぎを感じていた。

そして、それは帰ってきた娘を見て確信へと変わった。

何か悪い事が起こったのだと。

それをいち早く知りたい英理から少し慌てた様子で詰め寄られた有希子は、厳しい表情を崩さずに話し始める。

「英理、小五郎君、お願い。何も聞かないで、私に蘭ちゃんのことを任せてもらえないかしら？ そして、蘭ちゃんを支えて

あげて欲しいの」

有希子の言葉の後、一瞬事務所の中に沈黙が流れた。

そして、英理が軽く首を振る。

「有希子・・・何言ってるの？おかしいじゃない。外国にいる
とっていただたら突然連絡してきて、何かと思つて来てみれば、

意味のわからないことばかり。一体どうしたつて言うのよ
？」

「納得できないことを言つてるのは、よくわかつてるわ。でも、
どうしても事情は話せないのよ。時が来れば、必ず説明する

わ。でも今は・・・今だけは、何も聞かずに協力して欲しい
の」

先ほどから追加されることのない情報に困惑した様子を隠せな
いでいる小五郎と英理に向かつて、有希子は説得を続ける

ほかなかった。

「蘭ちゃんは、危険な事に巻き込まれている訳ではないのよ。
ただ、今のあの娘には心の支えが必要な」

解せない言葉の羅列に呆れ気味の英理は、ため息をつきながら
反論する。

「有希子。私は蘭の母親よ。娘に起こったことを聞く権利はあるはずよ」

「わかってるわ。でも、どうしても話せないのよ。英理の言いたい事は重々承知してる。だけどお願い、協力して」

押し問答になって埒が明かない状態が続き、英理の顔に苛立ちがはつきりと見え始めていた。

「有希ちゃん」

その時、それまで沈黙を守っていた小五郎が不意に声を上げる。

そして、意外なほど落ち着いた声で核心に触れた。

「新一に・・・何かあったんだな」

「えっ・・・」

小五郎の言葉に瞬時に反応したのは、有希子ではなく英理だった。

有希子も少し遅れて、驚きの表情を見せる。

そんな二人を一瞥した後、小五郎はゆっくりと煙草に火をつけて吐き出した煙を目で追いながら言葉を続けた。

「この1ヶ月ずっと張り詰めた糸のように緊張していた蘭が、さっき帰ってきた時の表情は、緊張の中にどこかホッと

したような・・・そんな感じに見えたからな。あんな顔を見たのは、本当に久しぶりだった」

有希子はフツと笑みを浮かべ、賞賛の眼差しを小五郎に送った。

よく英理が小五郎の愚痴を零しているが、やっぱり彼は蘭の父親だ。

いつもグータラでどうしようもないところがある小五郎だが、見るべきところをきちんと見ている。

しかし、その質問にはっきりと答えることもできない有希子は、沈黙を返すしかなかった。

有希子の様子で自分の考えは間違っていないのであろうと確信した小五郎は、もう一度煙草を口にくわえた。

紫煙を吐き出しながら、思い出す。

奥穂村で新一に再会した時に見せた、娘の嬉しそうな顔を。

そして、娘を見る新一の瞳を。

本当は、認めたくなどない。

いつか、あの生意気な男に大切な娘を持っていかれる未来など、決して容認できない。

だが、娘が新一を想って泣くのを見続けるのもまた、小五郎には許せないことだった。

（結局、蘭を笑顔にさせられるのは、アイツだけだって事か・
・）

どうしようもない寂しさが彼を襲うけれど、それでも娘の幸せには代えられない。

「有希ちゃん。信じていいんだな」

改めて真剣な眼差しで問い掛けた小五郎に、有希子もまた真剣な表情で答える。

「ええ」

「わかった」

それまでのやり取りに口を挟む術が無かった英理が、不安と信頼の色を含んだ瞳で小五郎を見つめた。

「あなた・・・」

それを受け止めた小五郎が妻に向かって頷くと、英理は諦めたように嘆息を漏らした。

「小五郎君。ありがとう」

有希子はおおよそ気付いていながら、それ以上聞かないでいてくれている二人に感謝して頭を下げた。

そして、無事に話を終えた事務所の外には階段に腰掛け静かに

涙を流した蘭がいることに、誰も気付いていなかった。

55. 葛藤（後書き）

いつも読んで下さって、ありがとうございます。

前回ほどではないにしろ間があいてしまい、申し訳ございません。

今回は、工藤・毛利両家の両親メインでお送りしました。

（といっても、優作さんは出てませんが・・・）

こんな状況になって本人達も辛いでしょうが、それを見守るしかない親も辛いだろうと考えて、この話を書きました。

そのあたりの心情が、皆様に伝わると嬉しいです。

さて、次話は志保・平次がメインになります。

そろそろ和葉も出したいなと思っているのですが、そこまでは、辿りつかない

かも・・・。

ちよっと構成に苦戦して先が見えなくなってきたのですが、頑張張って

乗り越えたいと思っています。

今後とも、ご愛読よろしく願います。

56. 前へ進むために

「蘭さんは今、服部君の病室にいます」

その台詞が聞こえたのは、有希子が蘭を迎えに行こうと新一の病室を出た時だった。

蘭を送り届ける車を手配し終えた志保が、病室の前で変更になった事情を説明するために有希子を待っていた。

節約のためか蛍光灯が十分に光を供給できていない薄暗い廊下で、そう言った志保の今にも壊れそうな様子に、有希子は

思わず息を飲む。

「私が彼の病室の前で待っていますので、出発できる状況になったら、また呼びにきます」

あくまでも淡々と話している志保が見ていられなくなった有希子は、近くにあった長椅子に志保を座らせ、自分も彼女の前に

かがんで目線を合わせる。

「志保ちゃん。無理しないで」

蘭と話をしていた1時間ほどの時間で、志保がどれだけ気力を消耗しているかは一目瞭然だった。

ただ心配で有希子が言った言葉に、志保はフツと笑みを浮かべ

る。

「大丈夫です。心配しないで下さい」

表情と連動出来ない彼女の瞳には、固い意志が表れていた。

それは、志保の覚悟。

新一の病状を知った時から、彼女は心に誓った事が二つあった。

それは、常に気丈であり続けることと、決して人前では涙は見せないこと。

彼の周りの人たちの方が、よっぽど辛いのだ。

それなのに、この状況を生み出した自分が誰かに弱さを見せる事など、ましてやおめおめと泣くことなど許されない。

この先どんな辛い現実が待ち構えていたとしても、どんなに責められ詰られても、新一が目を覚ますまでは耐え続けると志保

は決めていた。

しかし、その覚悟があったとしても、疲れを隠すことまでは無理だった。

有希子は首を横に振ると、険しい視線を志保にぶつける。

「蘭ちゃんのこととは、私に任せて。志保ちゃんはもう休みなさい。あなたの役目は終わったわ」

初めて聞いた有希子の威圧的な声に、反論できる気力の残っていない志保は従わざるを得なかった。

蘭が病院を出発した連絡を受けた後、志保は平次の病室前で室内の様子を窺っていた。

しかし、予想していた状況が感じ取れず、彼女は中の人物に気付かれないようにため息をつくどドアを軽くノックする。

小さく返事があったことを確認して扉を開けると、平次がヘッドライトに照らされて携帯電話を片手にしていた。

「まだ、連絡してなかったの？」

志保は、無言の返事を受け止めながら歩み寄った彼の部屋の窓から夜景を見下ろした。

それなりに光り輝いている景色を綺麗と思えないのは、その程度の夜景なのか、自分の心が澁んでいるせいなのか。

さして重要とも思えないことに頭を使いながら、窓越しに見える彼の表情は少し暗く、彼女は彼が迷っているのだと知った。

「蘭さんに・・・言われたんでしょ？」

志保は二人の会話を聞いていた訳ではなかったが、蘭が今すぐ平次に会いたいと言った理由は他に思い浮かばなかった。

そして、携帯電話とにらめっこをしている彼を見て、自分の予想は当たっていたのだと悟ったのだ。

当然のように言った志保の言葉を気に留める風でもなく、平次は頷く。

「ああ」

「それに、もう連絡できない理由はないでしょ？」

「は？」

間の抜けた声が聞こえた方へ振り返った志保は、苦笑を漏らした。

実のところ、平次は和葉への連絡を状況が落ち着くまでしないと決めていた。

それは組織が『ほぼ』壊滅状態であるという事が、大きく起因している。

加えてFBIからも許可があるまで、外部への連絡を制限されていた。

しかし、現在は特例として蘭への連絡を許可した事により和葉へも同様の許可が下りている。

だから、彼女へ連絡を取るための障害はなくなっていたが、彼にはそれ以外に連絡できない理由があった。

それを誰かに話したことは無い。

平次は、志保が気付いている確率を考えたこともなかった。

「気付いてないとも思った？」

凶星の表情を見せた平次に志保は呆れた顔をする。

「そこまで、鈍感じゃないわよ。あなたが和葉さんに連絡しなかった理由は二つ。一つは工藤君への罪悪感。彼が蘭さんと

連絡を取りたくても取れない状態なのに、自分だけ取るなんて出来なかった。そして……もう一つは、和葉さんを苦しめ

ないため」

僅かに目を見開いた西の探偵をよそに、志保は自分の推理の披露を続ける。

「あなた達と連絡が取れなかったこの二週間、蘭さんと和葉さんがどれだけ心配していたかは想像するに難くないわ。そして、

それを二人で支えあってきた事もね。ここで和葉さんにだけ連絡すれば、彼女は安心を手に入れると同時に蘭さんに対して

秘密を持つ事になる。今日、蘭さんがあなたの様子を確認しようとしたように、和葉さんも工藤君の状況を必ずあなたに

確認するものね。それは、和葉さんには残酷すぎる秘密だわ。
工藤君のあの状態を知っても蘭さんに伝える事が出来ない

なんて、和葉さんを苦しめる以外の何物でもない。それなら、
自分達の安否を知らせずに、一緒に連絡を待っている方が

ずっとマシだと判断したんでしょ？」

的確に平次の思考を当ててきた志保に、彼は両手を上げた。

「降参や。そこまで見切られてとは思えへんかった」

「私も、随分見くびられたものね。あなたの意見に賛成だった
から、何も言わなかっただけ。でも・・・もう蘭さんは真実を

知ったわ。もう、隠す必要もない。だったら、早く連絡する
べきなんじゃないの？」

苦笑いを浮かべた平次にこれ以上の言葉は必要ないと結論付け
た志保は、ドアの方へ足を進める。

「明日の朝一で車を手配しておくわ。羽田なのか、東京駅なの
か、決まったら連絡して」

そういい残して、志保は部屋を出て行った。

「かなわんな・・・」

呟いて、平次は再び電話番号を表示させたままの携帯を見つめ

た。

平次の病室を後にした志保は、その足で新一の病室を訪れていた。

消灯時間が過ぎているため照明が消されている病室の中で、月明かりに照らされた白いベットとそこに横たわる新一が

ぼうつと浮き上がっている。

志保は帰国してから、新一の顔を直視する事がなかなかできずにいた。

側にあつた椅子に座って久しぶりに彼の顔を見つめながら、志保は心の中で問い掛ける。

（これで良かった？ 工藤君）

蘭に全てを告白した事を知ったら、彼は怒るだろうか？

それでも、彼女が傍にいないと彼はこのまま眠り続けてしまう予感がするから。

彼が目を覚ましてくれるなら、どんな事でも躊躇わずにできる。

目覚めた後に彼からどんなに叱責されようとも、喜んでそれを

受けられるだろう。

「だから・・・お願い。目を覚まして」

口に出すつもりはなかった想いが漏れて、志保の頬に一筋の涙が零れ落ちた。

56. 前へ進むために（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

やっぱり更新が遅れてしまい、本当に申し訳ございません・・・。

しかも、タイトルもいま一つ・・・。

かなり悩んだんですが、納得いくものが浮かびませんでした。

内容と合っていないかと思いますが、ご了承下さい。

さて、今回は志保メインでお送りしました。

これから数話は、蘭・平次・和葉とそれぞれの心情を中心にした作品になる予定です。

まだ構成には悩んでいるのですが、僅かに光が見えてきた気がするので、

（あくまで、気がするだけでも知れませんが・・・）

少しでも執筆のスピードを上げられたらと思っています。

今後とも、ご愛読よろしくお願い致します。

57. 報徳

決戦後、平次は新一と同様、病院に運ばれていた。

外傷は多数見られたが、命に関わるような怪我がなかったことが幸いだった。

処置を終え運ばれた病室には、傍らに松葉杖を置きベッド近くの椅子に座ったジョディが待っていた。

「大丈夫？」

「そら、お互い様やろ？」

付き添っていた看護師の手を借りて病室のベッドに移動した平次が対面した彼女は、骨にヒビが入ったという足に

包帯を巻かれ、腕や顔には擦過傷に対する処置の後が見られた。

そして、彼と色違いの病衣に身を包んでいる。

骨折してしまい動けない平次ほどではないが、彼女もまた数日の入院を余儀なくされており、二人とも俗に言う

『ボロボロ』という言葉がぴったりの状態だった。

「私はたいした事ないわ。それよりも・・・」

言いかけて口を閉ざした彼女の言葉の先を察した平次は、静か

に目を閉じた。

目の奥に浮かぶのは、あの凄惨な現場で倒れていたコナン。

あの時、血まみれの彼を見て思わず息を飲んだ平次の頭に最初に過ぎったのは、最悪の結末だった。

そして、それを慌てて否定した。

そんな事が起こりうる訳がないと。

だが、あれから数時間が経ち、戦いはほぼ終焉を迎えているにも関わらず、平次は今でもその最悪のイメージを

消し去る事ができない。

(なんでや・・・)

この状況を回避するために、自分はここにいるはずだった。

結局、避けることの出来なかった現実に対する怒りと悔しさで、平次の右手が固く握られる。

「あなたのせいじゃないわ。これは、我々FBIの責任よ」

降ってきた言葉に顔を上げた平次は、同じくらい苦い顔をしているジョディに自嘲的な笑みを浮かべながら答える。

「そんな事、今更言うても仕方ないやろ。誰かのせいにしてアイツが助かるんやったら、それが必要なのもかもしれ

へんけどな」

今、手術室の中で戦っている親友は、きっとそんなことは望まない。

同じ男として、そしてこうなる可能性を知りながら、元に戻るための道を選んだ彼の一番近くで手を貸してきた人間

として、それは断言できる。

平次がもう一度ギュッと閉じた目を開いた時、その瞳から絶望は消えていた。

「信じるしかないねん、工藤を。アイツは大丈夫や。姉ちゃんを遺して、絶対に逝ったりせえへん」

彼の力強い言葉をジョディは涙を堪えながら頷いて答えた。

「とりあえず、しばらく彼女達には連絡できないわね」

ジョディは自分の中に生まれた負の感情を沈静化させた後、もう一つの懸案事項を口にした。

忘れていたわけではないが、彼女の言う『彼女達』のことを思い出した平次は、一瞬顔を歪める。

「そうやな・・・」

コナンの状態と組織を完全に検挙できなかった現状を考えると、まだ知らせる事はできない。

それでも、不安を抱えながら自分達の帰りを待っているであろう二人の少女を思っ、平次の胸は痛んだ。

そして、それと同時に彼女達を守るように頼んだ人物が彼の脳裏に思い起こされる。

「そうや、先生。頼みがあんねんけど」

「何？」

「親父に連絡させてくれへんか？」

平次からの意外な申し出に、ジョディはわかりやすく渋い表情を見せた。

「府警本部長に？」

「ああ。ちゃんと口止めしとくさかい、親父にだけは無事な事を言うておきたいんや」

本来ならば、容認できる話ではない。

だが、それを平次がわかっているはずがなかった。

何か考えがあるのだろうと推察したジョディは、その要求を拒否することはできなかった。

「・・・仕方ないわね。他言無用だという事だけは、きちんと念押ししておくのよ」

「ああ」

平次だって、自分の安全を知らせるよりも、周りの人間の命を守りたい。

でも、平蔵にだけはきちんと知らせておきたかった。

何も言わずに自分を信じて送り出してくれた気持ちに応えるために。

そして、まだ当分会えずに心配を掛け続ける彼女達のために。

その後、ジョディは気を利かせて部屋を出て行った。

独りになった平次は、FBIから渡された盗聴防止の処理が施されている携帯電話で平蔵の携帯番号をプッシュする。

数回のコール音の後、馴染みの深い低い声が耳に入ってきた。

『はい』

「・・・オレや」

『平次か？』

元々の平次の携帯からの電話ではないため、平蔵の携帯には『非通知』と表示されていたはずだ。

そのための確認だったのだろうが、その声は驚きと安堵の色を含んでいた。

府警本部で会った時は平静を装っていた父だったが、やはり心配させていたのだと知って、少しきまりが悪くなる。

「ああ。無事に帰ってきたで」

『怪我はないんか？』

それは、『無事』と言った息子の言葉を全く信用していない切り替えしで、平次は右足を擦りながら苦笑した。

「足をやられてしもうて、動けんだけや」

『そうか……。ほんで、工藤君は？』

口数は少ないながらも要点は決して逃さない父親に、平次も事実を隠さずに答える。

「工藤は・・・まだ手術中や」

『そうか』

それで大体の状況を予測したらしい平蔵の声が、さらに低くな

「オトン。悪いんやけど・・・」

一番話しておきたかった用件を口にした平次だったが、その言葉も平蔵によって遮られる。

『ああ。静華と和葉ちゃん達には、黙っとく』

「頼むわ。まだ、あかんねん。FBIからの許可が下りたら、また連絡するよって」

そのまま通話を終えようと思った平次の耳に、僅かに固さの和らいだ呼び声が聞こえてきた。

『・・・平次』

「なんや？」

『たまには連絡よこせ』

まだ予断を許さない状況であることを察しながら、それでも尚連絡をするように言う父親の言葉を意外に思いながらも、

彼なりの思惑を感じた平次は素直に従うことを決める。

「・・・わかった」

少ない会話だったが、お互いの気持ちを伝えるには十分だった。電話を切った後、少しの緊張からの開放と深憂に対して善処で

きたことで得られた安心からか、平次の口から大きな

ため息が漏れた。

これで、彼女達のことは平蔵がうまく処理してくれるだろう。

とにかく今は、目の前の現実を超えなければならない。

（戻って来い、工藤）

平次は、自分が唯一認めているライバルに思いを馳せた。

57. 報徳（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

今回は、久しぶりの『過去』に戻ったお話でした。

ただ、やっぱり平蔵さんは難しいですね。

多くを語らず、彼の思慮深さを表すというのは・・・。

技量の無さが、悔やまれます・・・。

さて、次話は『現在』に戻りますが、もうしばらく重たい話が続きます。

読みにくい部分もあるかと思いますが、ご愛読いただけると嬉しいです。

よろしくお願い致します。

58. 焦がれた声

蘭が病室を出て行った後、平次は数週間前の事を思い出しながら、薄い雲にその姿を半分隠している満月を見上げていた。

その手に、西に残してきた女性ひととの唯一の連絡手段を握り締め
て。

彼女は自宅にいるらしく、携帯電話の液晶には見慣れた地図上に所在を知らせる光が点滅している。

今頃、彼女も同じ月を見ているのだろうか。

そんな感傷的なことを思っている自分に、平次は冷笑を浮かべる。

戦いが終わってからひとつきのこの一月、彼女のことは考えないようにしてきた。

その為とばかりに、残務処理に没頭してきた。

彼女がどれだけ自分を心配しているかなんて、想像しなくてもわかる。

泣かせたい訳ではない。

彼女の顔を思い出すと、廃墟の中で見つけた血まみれのコナンが一緒にフラッシュバックするのだ。

その情景が、彼に歯止めをかける。

自分だけ楽になってはいけないと。

そして、彼女にまでこの重荷を背負わせてはならないと。

だが、気付かないうちに自分の精神も限界に達していたようだ。

日々増大していく苛立ちや遣り切れなさを持て余した心が、救いを求めている。

（和葉・・・）

目を閉じれば、いつも浮かんでくる彼女の笑顔。

この事件に関わって以来、和葉の存在が自分にとって「子分」以上のものであることを認めないわけにはいかない状況に

追い込まれていて、一旦それを認めてしまえば加速度を増していく彼女への気持ちに平次は多少の戸惑いすら覚えていた。

そして、それが原因だったのか、和葉を心から案じた蘭が言った言葉に思いのほか彼の心は揺れた。

『連絡してあげて』

涙に押し切られて約束したものの、平次にまだ迷いは残っていた。

（ええんやろか。連絡しても）

今、生きるために必死に戦っている親友の顔が頭を過ぎる。

（ええんか？工藤）

届くはずのない問いが、彼の心の中で何度も繰り返されていた。

そんな時、心配してやってきた元黒の組織の女性が、ひた隠しにしてきた平次の所懐を何もかも言い当て、最後に背中を

押して帰っていった。

志保の言葉が、彼から迷いを取り去っていった。

意を決した平次が通話ボタンを押す前にもう一度見上げた月は、その姿をすっきりと現し、優しく微笑むように彼を照らして

いた。

無機質な機械音は何千回と聞いているものののに、こんなに緊張したのは初めてかもしれない。

しかし、その音はすぐに聞こえなくなった。

『も・・・もしもし？』

震える声が平次の耳に飛び込んでくる。

彼は自分を支配していた緊張が、聞こえた声によってあつという間に解けていくのを感じた。

この声を聞くためにあの悲惨な現場から命がけで帰ってきたのだ。

「和葉」

彼女の名を呼んだ声が思いのほか掠れてしまった事で、平次は自分自身に苦笑する。

『へ・・・へい・・・じ?』

「ああ」

『ほん・・・ま・・・に?』

「ああ、オレや」

『へい・・・』

彼女の声が涙に濡れて、それ以上聞き取れなくなる。

傍にいて慰める事が叶わない状況を悔やみながらも、口から出たのはいつもと同じ軽口だった。

「なに、泣いとなねん」

『泣いて・・・なんか・・・あらへんわ』

「泣いてるやろ？」

『泣い・・・て・・・へん・・・言う・・・てるやろ』

「相変わらず、強情なやつちゃうのう」

『うる・・・さいわ!』

「久しぶりに電話して、それかい！」

『あんたのせいやろ?!』

もっと優しい言葉でも掛けてやればいいのだろうが、こんな状況であってもそれは出来ないのが平次だ。

それでもいつもの言い合いで、少しずつ調子を取り戻してきた彼女の様子に、充足感が平次を満たしていく。

「帰ってきたで」

『う・・・ん』

「約束・・・守ったやろ？」

わざと得意気に言った言葉に対する返答がなかったことで、平次は一瞬不安に襲われる。

「和葉？」

『今……どこにいるん？』

和葉の不安は別のところにあったことを知り、平次は自分が考えた事が検討違いであったことに安堵した。

そして、それまでの軽い口調を少し穏やかなものに変えて彼女の問いに答える。

「東京や」

『無事……なんやんな？』

「ああ。信じられへんのやったら、確かめに来るか？」

本当は、平次自身が和葉に会いたいと思っているが、それを素直に口に出す事など出来ない。

違う理由をつけて東京に呼び寄せることが、今の平次には精一杯だった。

『え？』

「明日、日曜やろ？東京に来るか？」

『ええ……の？』

遠慮しがちに問い掛けた和葉に、平次は先ほどの志保の言葉を思い出す。

新幹線と飛行機だったら、飛行機の方が東京に早く着くはずだ。

「ああ。羽田に迎え行かすから、関空からの朝一の飛行機に乗れ」

『・・・うん』

「待ってるから」

『うん』

素直な和葉の応対に気分を良くして思わず顔が緩んでしまっている平次に、そんな彼には全く気付いていないであろう

彼女が呼びかける。

『へい・・・じ』

「なんや」

『明日・・・会える・・・んやね？』

戸惑いながら紡ぎ出された言葉は、彼女もまた自分に会いたいと思っているように読み取れて、平次は少し嬉しかった。

「ああ。そんなにオレに会いたかったんか？」

『そんなん・・・ちゃうわ！』

浮かれている気持ちを誤魔化すための台詞だったが、いつもの憎まれ口が返ってきて、平次は思わず噴き出した。

こんな風に笑えたのは、いつ以来だろう。

和葉が自分にとって、安らぎを与えてくれる存在であることを改めて知らされる。

それから、蘭にも連絡が取れていて明日会えるまでメール等は控える事と、この事を誰にもいわないように指示すると

平次はここが病院である事を思い出して、名残惜しい気持ちを抱えながら彼女との電話を切った。

その後、2箇所ほど電話を入れて手配を済ませると、ベッドに体を横たえる。

（やっと・・・会えるな）

この病院に入ってから懸案事項が一つ解決した事は、平次の心を意想外に軽くした。

耳に残っている和葉の声を子守唄に、彼は久しぶりに深い眠りについた。

58. 焦がれた声（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

更新が遅くなりまして、申し訳ございませんでした。

今回は『現在』の平次を中心にお届けしました。

態度と心情のうらはらな感じは伝わりましたでしょうか？

さて、次話は和葉がメインになる予定です。

もしかしたら、また間が空いてしまうかもしれませんが、見捨てずに読んで頂けると嬉しいです。

よろしくお願い致します。

59. 待ち望んだ瞬間（前書き）

更新が大変遅くなってしまいました事、心よりお詫び申し上げます。

59. 待ち望んだ瞬間

和葉は、手にした機械を耳から外すのと同時に体から力が抜けていくのを感じていた。

ただ、涙腺だけはその動きを止めずに、彼女の瞳からとめどなく雫が流れ落ちている。

待ち続けていた男性が無事だったという安心感と待ち望んでいた声が聞けたという嬉しさと胸がいっぱいになり、次に

しなければならぬ事すらも浮かばない。

そんな時、突然電話の音が遠山家に響き渡った。

どうやら母親が出たらしく、ぼそぼそと会話が聞こえる。

そして一分も経たないうちに、部屋の向こうから大きな声が投げ掛けられた。

「和葉！電話やで」

文明の利器が浸透している今の時代に、携帯ではなく自宅に電話してくる人間など極少数だ。

それは和葉にも当てはまることで、彼女の友人や知人が連絡してくる時も、基本的には携帯でやりとりすることが多い。

自宅に連絡してくる状況で考えられるのは、彼女の携帯番号は

知らないが自宅の電話番号は知っている人が連絡を取り

たがっている場合。

でも、それに当てはまる人物は和葉には思い当たらない。

あれこれ悩んでいる内に、そこその時間が経過していたらしい。

いつの間にか二階に上がってきた母親が、彼女の部屋のドアを開けた。

「和葉、何してんの。お待たせしたら失礼やろ。はよ、電話に出な・・・」

尻窄みになっていく母親の声に、和葉は現在の自分の顔の状態を思い出して俯いた。

「あんた、どないしたん？」

案の定、聞かれた質問に彼女はどう答えていいのかわからない。

平次の現状を和葉の両親は当然のことながら知らないのだ。

「ちよつとな。ほんで、電話って誰から？」

和葉ははぐらかす以外の方法が見つからなくて、涙を拭いながら話題を元に戻す。

「・・・ああ。平蔵さんからや」

「え？」

意外な人物の名前に耳を疑いながらも、それはこれ以上待たせられないとばかりに、和葉は慌てて電話のあるリビング

へ急いだ。

「もしもし」

『和葉ちゃんか？夜分遅くにすまん』

「いえ。こちらこそ、お待たせしてもうて」

『そんなこと、気にせんでええ』

あまり電話越しに聞く事の無い渋い声に耳を傾けながら、何を言われるのかと不安に駆られた和葉の鼓動が次第に早く

なっていく。

そんな和葉の様子を分かっているのか、平蔵から単刀直入に事件が伝えられた。

『平次から、連絡あったやろ？』

「・・・はい」

答える前に間が空いてしまったのは、この事を誰にも言うなどという平次の言葉を思い出したからだ。

しかし、平蔵の問い掛けに和葉は嘘がつけなかった。

『明日、関空までの車をワシが手配しておくさかい、朝早いんやけど家の前で待っといてくれるか?』

「えっ・・・?」

ついさっき平次から連絡があつたばかりで、彼女は事態を何一つ消化できていないというのに、彼の父親の素早い対応に

和葉は驚きを隠せないでいた。

『和葉ちゃん? 聞いとるか?』

「おじちゃん・・・なんで?」

質問で返された事で彼女が混乱していると知った平蔵だったが、今の段階で何かを話す訳にはいかなない。

『それは、平次に直接聞いた方がええやろ。とりあえず、明日朝4時半に迎えを行かすから』

「わかりました」

これ以上尋ねても無駄と察しておとなしく引き下がった和葉に、平蔵は父親に代わるようにと伝え、彼女はそれに

応じて珍しく家にいてテレビを見ていた父親に受話機を渡す。

平蔵が何を言っているのかは聞こえないが、どうやら明日和葉を東京に行かせることへの了承を取っているよう

だった。

短いやり取りの後、電話を切った父親が何か言いたげな表情で和葉を見つめていたが、ずっと視線を逸らすと一言

呟いた。

「明日、早いんやろ？はよ、準備して寝たほうがええ」

「う……ん。おやすみなさい」

和葉は父親の言葉に従って、何も言わずにリビングを後にした。

結局、大して眠れずに夜が明けて、和葉は予定通り東京行きの始発の飛行機の中にいた。

僅か1時間足らずのこの時間がもどかしくて堪らない。

一般市民が使える乗り物でこれ以上早く移動できるものなどないのだが、それでも彼女には遅く感じられてしまう。

心が急いて、寝不足の体を休めることも出来ないまま、定刻通り飛行機は羽田空港へと降り立った。

そして、到着ロビーを出てきた和葉を見知らぬ声が呼び止める。

「和葉さん」

聞こえた方向に視線を向けると、そこにはサングラスを掛けた茶髪の女性が黒いスーツに身を包んだ男性と共に立って

いた。

「あの・・・」

「服部君から頼まれて迎えに来たの。とりあえず、行きましよう」

突然のことで驚いたが、平次のことを知っている人だということとが和葉を安心させた。

男性が和葉の持っていた荷物を手に取り、二人をエスコートするように歩き始める。

足早に歩く二人の後を必死についていく和葉の目に入ってきたのは、黒塗りの車。

それは、一ヶ月ほど前に東京に来た時に乗った車によく似ていた。

流れるような所作で後部座席のドアを開けた男性は二人が乗り込んだことを確認し、ドアを閉めて運転席へと座ると

無言のまま車を発進させた。

動き出した車の中で発せられた言葉は、茶髪の女性の自己紹介と『よろしく』という挨拶だけだった。

どこへ行くのか、平次はどうしているのか、聞きたいことがたくさんあるのに、それを許さない車内の空気に和葉は

困惑する。

そして、彼女がどうすることも出来ないまま、車は小一時間ほど走り続けた。

目的地に着いた車から降りて入った建物が病院だと気付いたのは、エレベーターを降りたときに和葉の鼻腔を掠めた

消毒液の匂いだった。

（平次・・・怪我してるん？）

和葉の心で不安がどんどん増殖し、歩くスピードが徐々に落ちていく。

そして、少し前を歩いていた志保がある扉の前で立ち止まると、おもむろに和葉の方に向き直った。

「服部君はここよ」

そう言った志保は、和葉の憂いを帯びた表情を見て苦笑いを浮かべる。

「彼は確かに怪我をしているけど、命に別状はないわ。って言うっても、慰めにならないのかしらね」

いつだって、彼女達はそうだった。

彼女達の幼馴染が危険な目に遭うたびに、たとえその時負った傷が掠り傷だとしても心配で涙を流す。

そんな事を思い出しながら、志保は目の前のドアをノックした。

「はい」

聞こえてきた声は、いつもよりも少し低い。

（彼も、緊張してるって訳ね）

和葉に見られないように少し笑った志保は、勢いよくドアを開けた。

「連れて来たわよ。ご所望の女性^{ひと}」

志保はそう言って、和葉の背中を優しく押し出した。

「和葉」

呼んだ彼の声は、先ほどの緊張しているものから、慈愛に満ちたものへと変わる。

そして、これ以上は聞いてはならないとばかりに、志保はゆっくりとドアを閉めた。

先ほどまで不安に満ちた顔をしていた和葉が、幸せの笑みを浮かべることを願って。

59. 待ち望んだ瞬間（後書き）

いつも読んで下さり、ありがとうございます。
まずは・・・

本当に、申し訳ございませんでした。

2ヶ月以上も空けてしまったのはさすがに初めてで、続きが読みた
いという

コメントまで頂いていたのに、なかなか更新できませんでした。

言い訳になりますが、事情としては急に忙しくなった事への対応が
できず、

生活リズムを崩しまくりで、執筆活動に時間を割く余裕がなかった
ためです。

去年もこの時期は忙しかったのですが、今年はそれ以上で、正直ち
よっと

困ってます・・・。

実は、まだ落ち着いた訳ではないのですが、これ以上は限界と思っ
て、

今日更新致しました。

最悪年内は、不定期な状況が続くかもしれませんが、できるだけ
早くコントロールできるようにって、執筆する時間を作りたいと
思っていますので、長い目で見守ってやって下さい。

相変わらず、亀のような更新速度ではありますが、必ず完結はさせ
よう

とは思っています！

今後とも、ご愛読頂けると嬉しいです。

よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8217b/>

帰るべき場所

2010年10月11日01時53分発行